

長岡京跡・大藪遺跡
発掘調査概報

昭和63年度

京 都 市 文 化 観 光 局

序

西暦 794 年、平安京遷都以来、政治・学問・芸術・文化・宗教の中心都市として栄えた京都は、数多くの文化遺産を保ちながら、現在も大都市として躍進を続ける世界的にも希な文化都市であります。

本市では昨年、2 巡目初回の国民体育大会を開催し、本年は市制 100 周年、5 年後には平安建都1200年をむかえ、現在の京都は大きな節目にたっているとと言えます。

近年、都市の活性化により、各種事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が年々増加していますが、これらの発掘調査の成果を後世に伝えるよう努めております。

本書は、昭和63年度に京都市が国庫補助を得て、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した埋蔵文化財調査の報告書であります。調査・報告にあたっては市民のみならず、文化庁をはじめ数多くの方々に御協力を賜りました。

御協力をいただいた方々に心から御礼を申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を解明する資料として大いに御活用いただければ幸いです。

平成元年 3 月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した、文化庁国庫補助を伴う昭和63年度の京都市内遺跡発掘調査概要報告書である。
- 2 調査箇所は以下のとおりである。

長岡京左京一条三坊跡（昭和62年度調査分）	京都市南区久世大藪町396
長岡京左京南一条四坊跡（市内遺跡試掘立会調査分）	京都市伏見区久我本町12-11 他
長岡京左京四条三坊跡（市内遺跡試掘立会調査分）	京都市伏見区羽束師菱川町361-1
大藪遺跡（市内遺跡試掘立会調査分）	京都市南区久世大藪町291
- 3 各調査の担当者と調査参加者は以下のとおりである。

長岡京左京一条三坊跡	同研究所調査員	上村和直
長岡京左京南一条四坊跡	京都市埋蔵文化財調査センター	対化財保護技師 北田栄造
長岡京左京四条三坊跡	同研究所調査員	長宗繁一・鈴木広司・吉崎 伸
大藪遺跡	同研究所調査員	吉崎 伸
	調査補助員	上田栄治・木下秀一・小寺末一・西大條哲・林ひろみ
- 4 本書の執筆担当は以下のとおりである。

第I章	上村	第II章	北田	第III章	長宗・吉崎	第IV章	吉崎
-----	----	------	----	-------	-------	------	----
- 5 遺構および遺物の写真撮影、は同研究所牛嶋 茂が担当した。
- 6 本書で使用した遺構略号は、奈良国立文化財研究所の方法に基づいた。
- 7 本書で使用した方位は、平面直角座標系VIによった。また標高は T. P. によった。
- 8 本書で使用した位置図は、京都市発行の1/2,500都市計画基本図を調整使用した。

本文目次

第I章 長岡京左京一条三坊跡	1
第1節 調査経過	1
第2節 遺構	7
第3節 遺物	9
第4節 まとめ	12
第II章 長岡京左京南一条四坊跡	31
第1節 調査経過	31
第2節 遺構	32
第3節 遺物	36
第4節 まとめ	37
第III章 長岡京左京四条三坊跡	39
第1節 調査経過	39
第2節 遺構	40
第3節 遺物	41
第4節 まとめ	44
第IV章 大藪遺跡	45
第1節 調査経過	45
第2節 遺構	46
第3節 遺物	48
第4節 まとめ	50

図版目次

図版1 遺跡 調査位置図
図版2 遺跡 左京一条三坊跡 遺構実測図
図版3 遺跡 左京一条三坊跡 遺構実測図

図版 4	遺跡	左京一条三坊跡	遺構実測図
図版 5	遺跡	左京一条三坊跡	遺構実測図
図版 6	遺跡	左京一条三坊跡	遺構実測図
図版 7	遺跡	左京一条三坊跡	遺構実測図
図版 8	遺跡	左京一条三坊跡	遺構実測図
図版 9	遺跡	左京一条三坊跡	遺構実測図
図版11	遺跡	左京一条三坊跡	遺構実測図
図版12	遺跡	左京一条三坊跡	遺構実測図
図版13	遺物	左京一条三坊跡	遺物実測図
図版14	遺物	左京一条三坊跡	遺物実測図
図版15	遺跡	左京一条三坊跡	調査区全景（西から）
図版16	遺跡	左京一条三坊跡	1 1号住居（南西から）
			2 3号住居（北西から）
図版17	遺跡	左京一条三坊跡	1 4号住居（北東から）
			2 5号住居（北東から）
図版18	遺跡	左京一条三坊跡	1 6号住居（北東から）
			2 8・9号住居（北西から）
図版19	遺跡	左京一条三坊跡	1 12号住居（南東から）
			2 溝1（西から）
図版20	遺跡	左京一条三坊跡	1 13-A号住居（北から）
			2 13-B号住居（西から）
図版21	遺跡	左京一条三坊跡	1 7号住居（北西から）
			2 4号住居遺物出土状況（北東から）
			3 5号住居柱痕（南西から）
			4 6号住居貯蔵穴（北西から）
図版22	遺跡	左京一条三坊跡	1 13-A号住居特殊遺構（北西から）
			2 13-B号住居特殊遺構（北西から）
			3 調査区全景（西から）
図版23	遺跡	左京一条三坊跡	1 建物1・2（北東から）
			2 建物3（南東から）

図版24	遺跡	左京一条三坊跡	1	出土土器
			2	出土石器・土製品
図版25	遺跡	左京南一条四坊跡	1	調査前全景（北から）
			2	調査区全景（北から）
図版26	遺跡	左京南一条四坊跡	1	建物跡全景（西から）
			2	古墳時代溝跡（西から）
			3	方形周溝墓状遺構遺物出土状況（西から）
図版27	遺跡	左京四条三坊跡	1	調査前全景（北から）
			2	3トレンチ全景（北から）
			3	4トレンチ全景（北から）
図版28	遺跡	大藪遺跡	1	第I期調査区全景（東から）
			2	SE1 断面状況（東から）
			3	SE2 断面状況（東から）

挿 図 目 次

第1図	調査位置図	1
第2図	乙訓地方古墳時代遺跡分布図	3
第3図	A区北壁断面実測図	7
第4図	須恵器・土師器実測図	10
第5図	石器・土製品実測図	11
第6図	遺構変遷図(1)	14
第7図	遺構変遷図(2)	15
第8図	旧河川復元図	17
第9図	調査位置図	31
第10図	南壁断面図	32
第11図	中・近世遺構配置図	33
第12図	長岡京期およびそれ以前の遺構配置図	34
第13図	SB1 実測図	35
第14図	土器実測図	36

第15図	調査位置図	39
第16図	調査区配置図	40
第17図	4トレンチ断面図	40
第18図	遺構実測図	41
第19図	SD6 出土遺物実測図	43
第20図	調査位置図	45
第21図	調査区配置図	46
第22図	東壁断面図	46
第23図	SE1 実測図	47
第24図	SE2 実測図	47
第25図	出土遺物実測図	48
第26図	遺構実測図	49
第27図	旧河川復元図	50

表 目 次

第1表	乙訓地方古墳時代集落遺跡一覧表	2
第2表	遺構一覧表(1)	20
第3表	遺構一覧表(2)	21
第4表	遺構一覧表(3)	22
第5表	遺構一覧表(4)	23
第6表	遺構一覧表(5)	24
第7表	遺構一覧表(6)	25
第8表	遺物観察表(1)	26
第9表	遺物観察表(2)	27
第10表	遺物観察表(3)	28
第11表	遺物観察表(4)	29
第12表	遺物観察表(5)	30

第 I 章 長岡京左京一条三坊跡

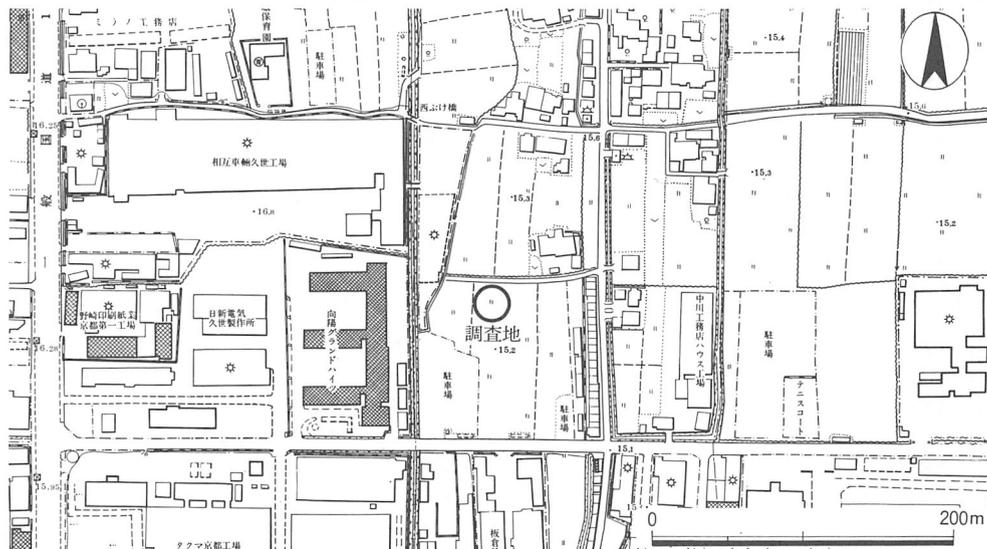
第 1 節 調査経過

1 調査に至る経緯

京都盆地の南西部、乙訓地方は弥生時代から長岡京期を中心として多くの遺跡が所在する。近年、京都・大阪の近郊住宅地としての開発が急速に進み、これに伴う調査も増加し、従来の研究による遺跡の範囲や性格など再検討が必要となっている。本調査地も長岡京期以前の遺跡範囲ではなかったが、今回の発掘調査によって弥生～古墳時代の集落跡の存在が明らかとなり、当地域の集落遺跡研究上注目されている。

当地に宅地開発が計画されたため、原因者と京都市埋蔵文化財調査センターは協議を行い、遺構の有無を確認する試掘調査を実施することになった。1987年12月3日、3ヶ所の調査区を設定して調査を実施した結果、古墳時代の溝などを検出し、当該地区に古墳時代の集落跡の存在を予想した。

この結果をもとに京都市は原因者と再度協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市文化観光局の委託を受けて1988年1月から3月まで行った。



第 1 図 調査位置図 (1 : 5000)

2 遺跡の位置と環境

地理的環境

遺跡の位置する乙訓地方は、西を西山山地、東を桂川によって画された東西5 km、南北1 kmの南北に長い地形である。中央部には北から南へ向日丘陵が張り出し、東側には河岸段丘や扇状地が発達している。丘陵部と桂川との間は沖積平野が広がり、その中に自然堤防が点在している。これは桂川や、丘陵部から桂川に流れ込む小河川によって形成された微高地で、縁辺部には後背湿地となる低地が認められる。自然堤防の存在は、近代の集落の分布からも見分けられ、自然堤防の連続性から旧河川を復原することが可能である。中久世・大藪遺跡の中心部では北西から南東に流れる、弥生時代にまで溯る旧河川を検出した。遺跡はこの一連の自然堤防上に位置する。

歴史的環境

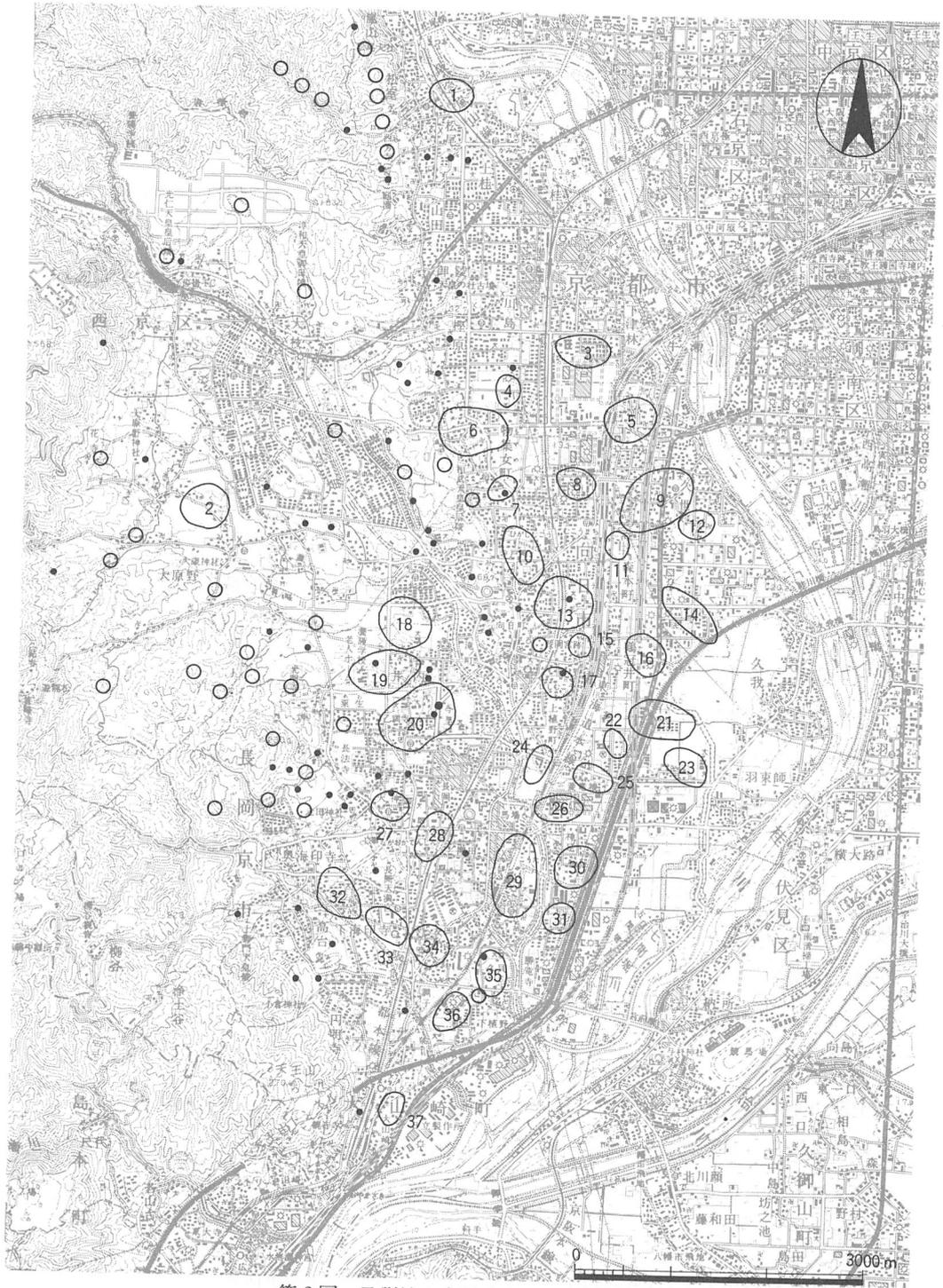
ここでは調査にあたって歴史的環境検討のため、弥生時代後期～古墳時代の集落遺跡を中心として、地域の動向を記述する。^{註1}

弥生時代後期の集落遺跡は中期よりさらに数が増大し、分布も沖積平野内の低地や段丘・丘陵上にまで広がっている。これは農耕技術の向上に伴い、耕地がさらに拡大された結果と考えられる。

小畑川上流域では今里遺跡を中心に井ノ内・石見遺跡が、下流域では神足遺跡を中心に

第1表 乙訓地方古墳時代集落遺跡一覧表

No.	遺跡名	時期	遺構	No.	遺跡名	時期	遺構
1	松室	前～後	竪穴住居・掘立柱建物・水路・土塋	20	今里	前～後	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土塋
2	南春日	後	散布地	21	鶏冠井清水	前～後	水田・土塋
3	下津林	前	散布地	22	芝ヶ本	前～後	河川・土塋・柱穴
4	西ノ岡	後	溝	23	羽束師	前～後	竪穴住居・水田・溝
5	上久世	前～後	竪穴住居・溝	24	吉備寺	前～後	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土塋
6	中海道	前～後	竪穴住居・溝・土塋	25	鴨田	前～後	竪穴住居・河川・土塋
7	物集女車塚辺	前		26	馬場	後	竪穴住居・溝・土塋・井戸
8	修理式	前～後	河川・土塋	27	東代	後	竪穴住居
9	中久世	前～後	河川・土塋・溝	28	開田城ノ内	中～後	竪穴住居・掘立柱建物・方形周溝墓
10	殿長	前～後	竪穴住居・土塋	29	神足	前～後	竪穴住居・掘立柱建物
11	大藪	前		30	古市森本	中～後	溝・土塋
12	野田	前	土塋・溝	31	太田	前～中	溝
13	森本	後	竪穴住居	32	下海印寺	中～後	竪穴住居・溝・土塋
14	東土川	前	土塋・溝	33	伊賀寺	後	竪穴住居・土塋
15	内裏下層	前～後	土塋	34	友岡	後	竪穴住居・河川
16	鶏冠井	前	河川	35	南栗ヶ塚	中～後	溝
17	南開	中～後	土塋墓	36	裕	中～後	溝
18	上里	中～後	河川	37	宮脇・松田	前	散布地
19	井ノ内	後	竪穴住居・土塋墓・土塋				



第2図 乙訓地方古墳時代遺跡分布図 (1 : 70,000)

●は古墳、○は古墳群

開田遺跡などが新たに始まっている。旧羽東師川右岸では森本・石田遺跡を中心に中海道・岸ノ下・羽東師遺跡が、左岸では中久世遺跡を中心に下津林遺跡などが始まっている。神足遺跡や中久世遺跡では、これまで竪穴住居や方形周溝墓、水路などの遺構を検出した。後期には中期にみられた4～5ヶ所の遺跡群が3地域程度にまとまり、河川を通じての地域的結び付きが以前より一層強まったと考えられる。

古墳時代前期の集落は、弥生時代後期から継続するものが多いが、この時期から始まる遺跡もある。立地や分布状況も弥生時代後期とほぼ同様である。旧羽東師川左岸では修理式・上久世・中久世・東土川遺跡など、右岸では羽東師・殿長・中海道遺跡、小畑川上流域では今里遺跡、鴨田・鶏冠井清水・太田・古市森本遺跡などがみられる。今里遺跡・鴨田遺跡で竪穴住居、鶏冠井清水遺跡で水田などの遺構を検出している。また鴨田遺跡では溝内より多くの農耕用の木器が出土し、弥生時代から続く当地方の開発が着実に進められた様相がうかがえる。古墳時代前期の遺跡から出土した土器には河内から搬入されたものや、その影響を受けたものも数多く認められ、弥生時代以来、本地域は河内と密接な関連を持っていたことが想定できる。

前期古墳の分布は向日・長岡・洛西の3地域に集中し、それぞれ首長墓の系譜をたどることができる。最も早く成立するのは向日丘陵南部で、元稻荷・北山・五塚原・妙見山・寺戸大塚古墳と続く。これよりやや遅れ、向日丘陵北部では一本松・百々池・塚ノ本古墳と続く。同じ頃、長岡丘陵では長法寺南原古墳が造られる。

これらの古墳はいずれも90～100mの、前方後円・前方後方墳で、平野部を見下ろす丘陵上に立地する。同時期の京都盆地内の古墳群に比べ規模や副葬品などが卓越し、盆地内で最大の勢力の所産と言えよう。これら3地域では古墳の規模などから向日丘陵南部のものが最も優勢といえる。

このような前期古墳の分布を、集落の分布と対応させて考えると、弥生時代からの農耕生産の発展をもとに古墳群が成立していった状況が理解できよう。

中期の集落は前期から継続するものが多い。旧羽東師川左岸では上久世・中久世遺跡、右岸では殿長・鶏冠井清水・羽東師遺跡、小畑川上流域では上里・今里遺跡、下流域では鴨田・神足・古市森本遺跡などがある。鴨田遺跡では竪穴住居、南開遺跡では土壙墓などを検出している。

中期には首長墓が平野部に進出している。北部では向日丘陵東側の段丘上に天皇ノ杜古墳、南部では平野部に恵解山古墳が造られる。いずれも全長100mを超える前方後円墳で、

恵解山古墳では大量の鉄器が出土した。これらは当地方を統括した首長墓と考えられ、それまでの系譜が大きく2つにまとまったと理解できよう。

以上の首長墓の系譜につながらない古墳群も、当地方には多く見られる。北から、山田地区の山田桜谷・清水塚・天鼓の森・穀塚古墳、向日丘陵山麓の山畑古墳群・南条・山開古墳、長岡丘陵北側のカラネケ岳・芝古墳群、長岡丘陵南側の境野古墳群などがある。これらの古墳は丘陵上や山麓に立地し、規模は先の平野部の大古墳とは大きな差があり、大首長の下にまとまる階級と言えよう。

後期の集落は中期に比べ数が増加し、中期から継続するもののほかに新に始まる遺跡もある。これまで遺跡がほとんど見られなかった大原野地区や小泉川地区などにも遺跡が認められる。松尾地区では松室遺跡、大原野地区では南春日町遺跡、旧羽束師川右岸では内裏下層・森本遺跡など、左岸では上久世・東土川遺跡、小畑川上流域では海印寺・伊賀寺・友岡遺跡がある。神足・今里・井ノ内・森本遺跡では竪穴住居、今里遺跡では掘立柱建物、羽束師遺跡では水田などの遺構を検出している。松室遺跡では6世紀代の大規模な水路を検出し、秦氏が桂川に築いたとされる「葛野大堰」との関連で注目されている。このような水路により、洛西地区のみならず、乙訓地方一帯への水の供給が可能となり、開発がより一層進められたと考えられる。

中期末から後期には大型古墳が見られなくなり、首長墓の系譜を引く全長30m前後の小型の前方後円墳や大型円墳が造られる。向日丘陵東側の物集女車塚古墳、小畑川上流域の井ノ内車塚・稻荷塚・今里大塚古墳などである。主体部はいずれも横穴式石室を採用している。

後期後半、山城では畿内中心部よりやや遅れ、盆地周辺部に群集墳が出現する。群集墳は丘陵上・丘陵の斜面・谷筋などにまとまって造られる。

松尾地区では松尾山山頂に松尾山古墳群、山麓に京都盆地最大規模の西芳寺古墳群がある。西芳寺川上流の谷筋に北松尾・ボウジョウ・上園尾古墳群、松尾地区西側の丘陵谷筋には大枝山古墳群がある。向日地区では向日丘陵上に長野・東山古墳群がある。大原野地区では中央部に福西古墳群、周辺の丘陵に沓掛・灰方などの古墳群が点在する。長岡地区では長岡丘陵北部に小塩・中山古墳群、南部に南原・稻荷山古墳群などがあるがいずれも規模は小さい。丘陵東側平野部には、芝・走田・境田などの古墳群がある。

3 調査の経過

調査目的

今回の調査では、試掘調査の結果、古墳時代の遺構（溝）を確認したこと、調査地が長岡京左京一条三坊十六町跡に比定されることから以下を調査目標とした。

- 1) 古墳時代の溝の方向を明らかにし、関連する遺構を検出する。
- 2) 長岡京期の遺構はこの付近では現在まで検出されていないが、調査で遺構の有無を確認すること。

調査経過

発掘調査は敷地内約3000㎡を対象として、1988年1月22日より実施した。調査ではまず、試掘調査で検出した溝の方向を確認するため、北辺（A区）と南辺（B区）に幅2m・長さ50mの東西トレンチを設定した。その結果、B区西部で住居・柱穴、東部で溝を検出したため、北側・南側を拡張した。

盛土および耕土を重機で除去した後、地山上面で柱穴と竪穴住居を同時に検出した。まず柱穴の調査を行い、写真撮影・平面実測を実施した。その後、竪穴住居の続きを検出するためB区の北西部・南部・東部をさらに拡張した。住居の調査では、重複関係・遺物出土状況・内部施設・貼床などの点に留意し、溝については溝内に3ヶ所の畦を残し、埋没状況を詳しく観察した。遺構完掘の後、全景・個別写真撮影、並びに実測を行った。

2月28日には地域住民を対象とした現地説明会を開催した。

最後に各住居の柱穴や貼床の状況確認のため、断ち割りを行い、3月5日現地における作業を終了した。

第2節 遺 構

1 調査概要

層 序

調査地周辺は水田となり、現地表面はほぼ平坦で、耕土上面での標高は15.4mである。遺構面(中心で標高15.3m)は耕作時などに削平を受け平坦であるが、北から南、東から西へわずかに傾斜する。

調査地の基本層序は上から現代盛土層(0.2~0.8m)・現代耕土層(0.1m)・黄灰色粘土層(0.6m)・灰色砂礫層である。黄灰色粘土層以下は無遺物層で、遺構は全て黄灰色粘土層上面で検出した。

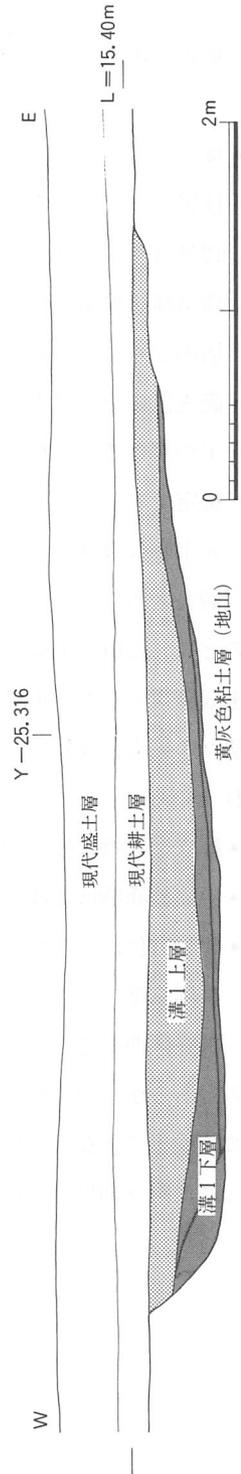
遺構の概要

調査で検出した遺構には竪穴住居14棟、溝2条、掘立柱建物3棟の他、多数の柱穴があり、弥生~古墳時代前期・弥生時代以降・長岡京期の3時期に分けられる。なお、柱穴については建物としてまとまったもの以外は遺物の出土量が少なく、時期を決定することは出来なかった。以下、時代別に遺構の概要を述べる。

弥生時代~古墳時代

弥生時代~古墳時代の竪穴住居群はA・B両区で検出した。遺構の密度や配置から考え、調査区域外にさらに広がると推定できる。個々の住居に関する記述は別表(第1~6表)のとおりであるが、観察結果をまとめれば以下のとおりである。

- 住居群は中央の空間地を挟み西グループ(1~9号)と東グループ(10~14号)に分かれる。
- 西グループの住居の平面形は円形(7号)、隅丸方形(1・6・9号)、方形(3・5・8号)がある。9戸のうち3号が著しく大きい大型住居、4号が小型住居、他は規模に大差はない。住居の方向は、北で東に20~65°振れており、数棟づつのまとまりが見られる。4・7号を除き四本柱で、柱穴の位置は方形に配置される。1・6・8・9号で東辺中央に長方形の貯蔵穴を検出した。3号は北西辺中央に土壙がある。各住居は中央に炉跡があり、5号は



第3図 A区北壁断面実測図(1:40)

東辺に炭・焼土の入った土壌がある。各住居は周溝を有する。また、3号のみ貼床を施す。

- 東グループの住居の平面形は円形（10・11・14号）、多角形（12・13号）がある。5戸の住居のうち、13号が大型住居で、他は規模に大差ない。各住居の柱は13号が9本で、11・12号は4本と推定できる。住居の中央には12号が炉跡、11号が中央ピット、13号では特殊遺構^{註2}を検出した。13号のみ南西部で貯蔵穴とみられる楕円形の土壌を検出した。各住居のうち10・14号を除き、周溝を有する。13号のみ貼床を施す。
- 調査区中央で溝1、調査区東端部で溝2を検出した。溝1は、形状・方向から考え、人工の溝と考えられる。溝1の遺物出土状況から考え、西側から土器が投棄されたものと推定できる。

弥生時代以降

調査区西部を中心として多くの柱穴を検出した。柱穴には掘形が方形で規模が大きいものと（一辺40～50cm）、円形で小さいもの（径20～30cm）があり、方形のものは掘立柱建物を3棟復元した。遺構上面は削平を受け、建物に関連した施設は検出できなかった。

個々の掘立柱建物については別表（第7表）に示したが、観察結果をまとめれば以下のとおりである。

- 掘立柱建物は柱穴から出土した遺物によって、7世紀頃と考えられる。
- 掘立柱建物は2間×4間または1間×2間など、小規模なものである。
- 建物方位はいずれも北で東へ45°振れている。

長岡京期

調査区西部で柱穴を少数検出した。円形で径が小さく（20～30cm）、底に根石を据えるものもあるが、掘立柱建物として復元することは出来なかった。遺構面は削平を受け関連施設は検出できなかった。また遺物の出土量も少なく、主要な居住地とは考えられない。さらに長岡京期以降の遺構・遺物は無く、同時期以降は無住地となっていた可能性が高い。

第3節 遺物

1 土器の概要

土器類は整理箱で20箱出土し、弥生土器・土師器・須恵器などがある。このうち溝1から9箱出土し、他は住居などの遺構から出土した。住居や柱穴から出土した弥生土器・土師器は小片が多く、保存状態も悪いため、十分な観察ができない。個々の土器に関する記述は別表（第8～12表）のとおりである。以下観察結果をまとめ、時代別に概要を述べる^{註3}。

(1) 弥生時代後期（V様式）の土器

- 弥生時代後期の土器は4・7・9号住居で出土した他、各住居の覆土や溝1・2から出土した。
- 7号住居出土の土器はV様式前半に属する。器種には壺B・G、甕A・B、鉢B、器台などがある。壺・甕は大半が無文である。壺・甕の成形には叩き技法を用いたものと、そうでないものがある。甕には近江系のものなども少量みられる。乙訓地域における同時期の土器としては、中久世遺跡SD1-B中層^{註4}、今里遺跡SB1223出土土器^{註5}などがある。
- 4・9号住居出土の土器はV様式末に属する。器種には壺C、甕A・B・F、鉢E、高杯A・B、甗、器台Eなどがあり、壺A・甕Aが主流を占める。甕は平底で大半が叩き技法を施す。器台には口縁部に円形浮文を付けるものがある。また鉢には底部穿孔のものがある。乙訓地方における同時期の土器としては、大田遺跡SK5420出土土器^{註6}がある。

(2) 古墳時代前期（庄内式土器併行期）の土器

- 庄内式土器併行期の土器は1・6・11・12・13号住居、溝1などから出土している。
- 1・6・11・12・13号住居の土器は庄内期古相に属する。器種には壺A・B・C、長頸壺、甕A・B・F・G、甗、鉢、高杯A・B・G、器台E、小型丸底壺A、手焙り型土器があり、壺A、甕A・B、高杯B・G、が主流を占める。甕Bには赤色斑粒を含み在地で作られたと考えられるものと、角閃石・雲母を含み、河内地方から搬入されたと考えられるもの^{註7}があり、特に11号住居では搬入品が多く注目できる。壺・甕の底部は平底で、体部外面はタタキまたはナデを施し、内面はナデのもの^{註8}とヘラケズリのものがある。乙訓地方では中海道遺跡SK0613出土土器^{註8}などが同時期である。
- 3・5号住居、溝1出土の土器は庄内期新相に属する。器種には壺A・C・D、小型丸底壺A・B、甕A・B・F・G、大型鉢、高杯A・B・C、器台B・Eなどがあり、壺C・甕B・高杯Aが主体を占める。甕Bでは、河内産の割合が高い。壺・甕は外面にタ

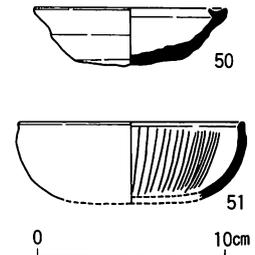
タキ・ハケ目を施し、内面をへラケズリするものが多い。鉢には12のような、口径20cm以上の大型品がみられる。乙訓地方では、東土川 SD3603、森本遺跡出土土器^{註10}などが同時期である。

(3) 古墳時代前期（布留式土器併行期）

- 布留式土器併行期の土器は 8号住居・溝 1などで出土した。
- 8号住居・溝 1出土土器は布留期古相に属する。器種には壺A・B・C・D・E、小型丸底壺A、甕A・B・C、鉢A、高杯A・B・G、器台Bなどがあり、壺C・E、甕C、高杯A・Gが主体を占める。壺・甕の調整は、外面ハケ目、内面のへラケズリは頸部よりやや下がった位置に施す。乙訓地方では、古市森本遺跡 SD1702・1706 出土土器^{註11}が同時期である。

(4) 飛鳥時代の土器

- 飛鳥時代の土器は各柱穴から出土した。
- 建物 1の掘形から出土した土器は 7 世期前半に比定できる。器種には須恵器杯G・H、甕、土師器碗C・甕があるが、いずれも小片で土師器碗(50)のみが図示できた。
- 調査区北西部の柱穴から出土した須恵器杯G(50)は、建物 1から出土した土器とほぼ同時期である。



第 4 図 須恵器・土師器
実測図

(5) 長岡京期の土器

長岡京期の土器は調査区北西部・南東端部の円形柱穴から出土した。器種には須恵器杯A、土師器皿などがあるが、いずれも小片で図示できなかった。

2 石器の概要

石器には砥石と石包丁があり、5点出土した。砥石(52・55) 2点は住居床面、他は住居覆土から出土した。

砥石は砂岩製が多く、砥石面に擦痕・条痕などはなく、仕上げ砥石と考えられる。

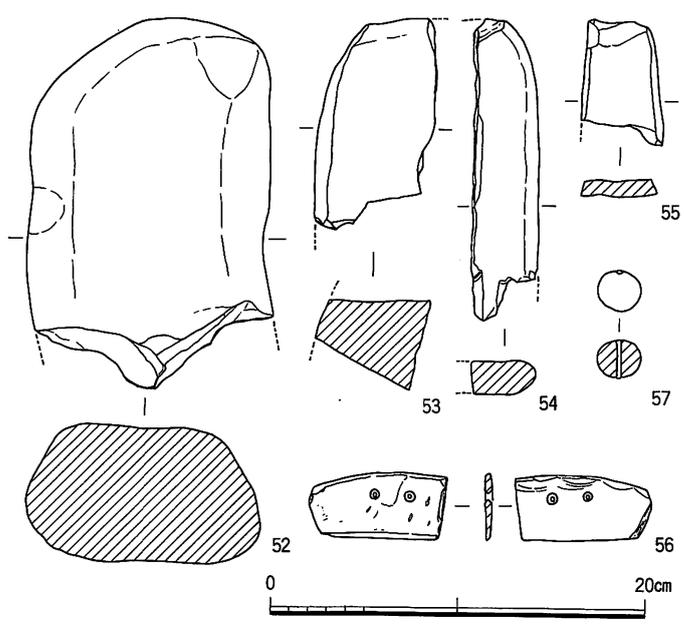
石包丁(56)は1点出土したが、弥生時代中期以前のものであろう。

3 土製品の概要

土製品には玉状土製品(57)がある。13-B号住居床面から出土した。

4 鉄製品の概要

鉄製品は1・6・8-B号住居から出土した。1号住居出土のものはヤリガンナと推定できるが、他の器種は不明である。



第5図 石器・土製品実測図

第4節 ま と め

今回の発掘調査は宅地造成に先立って実施した緊急の調査であり、遺跡の全体像をつかむにはあまりにも調査期間や調査面積の制約の大きいものであった。しかし調査の結果、当遺跡は乙訓地方でも比較的保存状態の良好な集落跡であることが確認でき、当地方における弥生～古墳時代の集落の様相を復元する上での大きな成果をおさめることができた。集落の範囲や水田・墓地などの関連した遺構の確認、周辺遺跡との関係など、今後に残された問題も多いが、ここでは調査で明らかとなったことや問題点について、若干ふれておきたい。

1. 弥生時代から古墳時代の遺跡

遺構の時期

検出した遺構は集落のごく一部にすぎないが、検出した住居の在り方は集落を復元する上で、良好な資料といえよう。ここでは住居群の構造を分析する。

各竪穴住居の時期は、遺構相互の重複関係・遺構の主軸方位・出土遺物・各遺構の位置関係などによって検討した。

遺構の重複状況により、前後関係を示す。

	(古)	(新)
B区西部	1号住居	3号住居
	9号住居	8号住居
	4号住居	5号住居
B区東部	11号住居	溝1
	13号住居	溝1・2

竪穴住居の主軸方位は、次のようになる。

B区西部	北北東方向 (N-20°-E前後) … 1号
	北東方向 (N-45°-E前後) …… 3・5・8・9号
	東北東方向 (N-60°-E前後) … 4・6号
B区東部	北方向 ……………12号
	北東方向 ……………11号

各竪穴住居から出土した遺物によって時期を検討する。ただし、2・10・14号住居は出土遺物の量が少なく、また小破片が多く、時期を決定できなかった。

- 弥生時代後期（V様式前半）……………7号
- 弥生時代後期（V様式末）……………4・9号
- 古墳時代前期（庄内古相）……………1・6・11・12・13号
- 古墳時代前期（庄内新相）……………3・5号
- 古墳時代前期（布留）……………8号
- 古墳時代前期（庄内～布留）……………溝1・2

次に、各時期内の同時存在について考える。

- 3・5と12・13号はそれぞれ接近し、同時存在とは考えにくい。
- 庄内期のうち、1・3号は重なり、1号から3号に建て替えられる。3号は5号と方位がほぼ揃い、同時期と考えられる。
- 6・11・12・13号は出土遺物から、1号と同時期と考えられる。

以上のことにより、今回検出した遺構は5期に大別できる。その時期は出土遺物により I期：弥生時代後期（V様式前半）、II期：弥生時代後期（V様式末）、III期：古墳時代前期（庄内古相）、IV期：古墳時代前期（庄内新相）、V期：古墳時代前期（布留）に当てることができる。これらの遺構の時期別配置をまとめると以下のようになる。

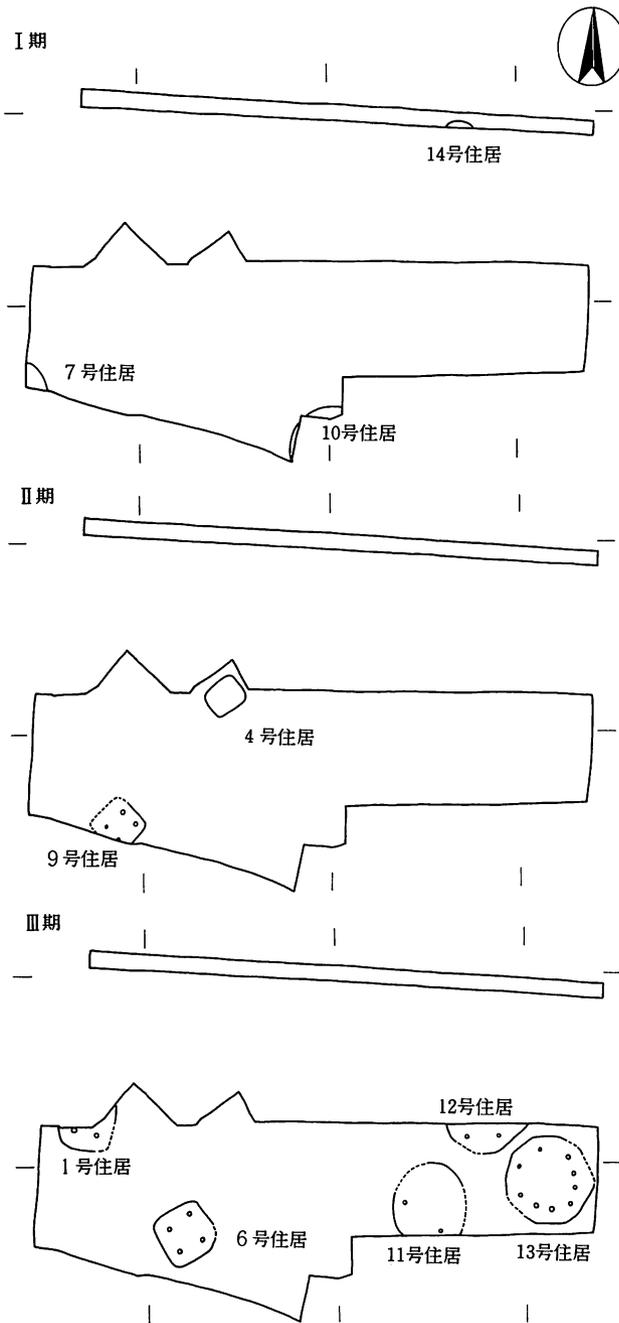
	西 部	中 央 部	東 部
I 期	7号		
II 期	4・9号		
III 期	1・6号		11・12・13号
IV 期	3・5号	溝1・2	
V 期	8号		

集落の構成と変遷

ここでは時期別に遺構内容を概観し、その変遷を明らかにする。

I 期

B区西南部で1棟の住居（7号）を検出した。平面形は円形である。同じく円形住居と推定できる10・14号も同時期と考えられる。この時期以前の遺構・遺物がみられないこと



第6図 遺構変遷図(1) (1:800)

から、当集落はこの頃成立したと考えてよからう。

II期

調査区西部を中心として2棟の住居(4・9号)が存在する。住居の平面形は隅丸方形で、主軸方向はほぼ揃う。4号は小型で無柱の住居である。床面には作業ピットを持ち、粘土・砥石を床面に密着した状態で検出した。何らかの工房的な建物と考えられる。

I期とII期の間に、住居の平面形が円形から隅丸方形への変換期を求めることができる。

III期

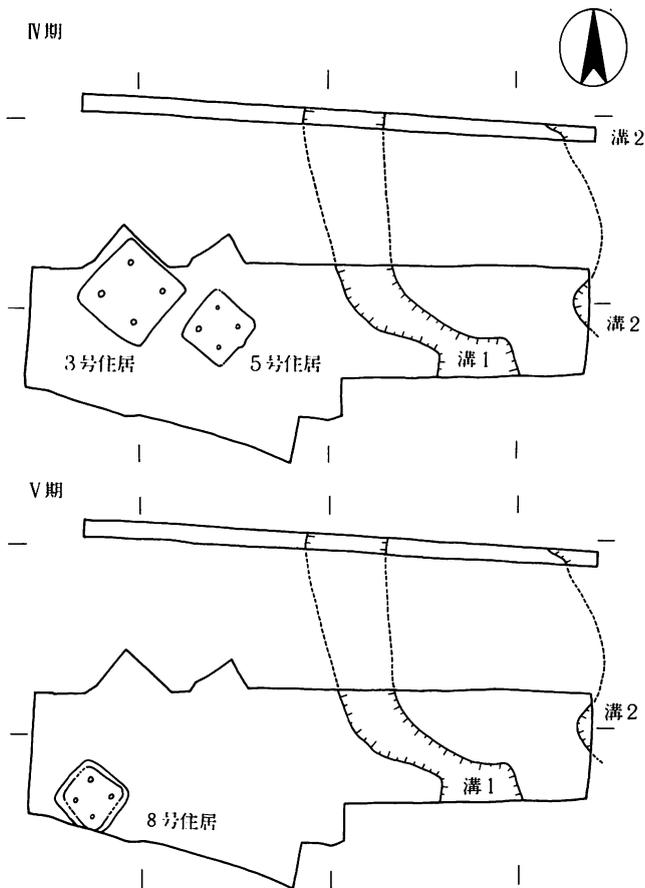
調査区西部に2棟の住居(1・6号)が存在し、東部に新たに3棟の住居(11・12・13号)が出現して2つのグループに分かれる。両群の間は空地となっており、広場などの性格を持っていた可能性がある。西のグループはいずれも隅丸方形で、南西部に貯蔵穴を持つ点で共通する。東グループでは13号が多角形、11号は円形・12号は多角形と推定でき、西グループとは異

なる。13号は径8.4m、床面積60㎡を超える大型住居である。乙訓地方ではあまり類例のない9角形で、中央に特殊遺構を備えている。また玉状土製品が出土し、遺物についても他の住居とは異なる。

この時期は居住区域が中心部から東に拡張し、集落の拡大期と言えよう。

IV期

住居はI・II期と同じく西側で2棟(3・5号)検出した。平面形はいずれも方形である。3号は一辺8.5m、床面積70㎡を超える大型住居であるが、構造や出土遺物は他の住居と大差はない。また3・5号は主軸方向がほぼ揃う。調査区の中央にこれと同じころ溝1を開削している。溝1



第7図 遺構変遷図(2) (1:800)

より東側には当時期以降の住居がないことから、居住区域を画するために造られたと推定できる。溝は区画だけでなく、集落の用・排水や水田の用水などの性格を持っていたと想定できよう。

V期

西部で住居1棟(8号)を検出した。方形で全周を拡張する。この時期には居住区画の溝はほとんど埋没している。これ以降、7世紀になり建物が造られるまで、遺構・遺物はみられず、集落は廃棄されたものと考えられる。

これまで述べてきたことから、集落の居住区域の中心は当初(I・II期)調査区内の西に形成され、III期には東部にもう1つのグループが派生している。その後IV期には区画の

溝が造られ、溝の西側のみ居住区域として機能している。

各時期における住居は、配置・方向・平面形などが共通することから、互いに関連を持つ数棟からなる住居群（単位集団）を構成したと理解することができよう。^{註12}この住居群が単独またはいくつか集まり、一つの集落を形成したと推定できる。

Ⅲ・Ⅳ期には、1つの住居群の中で、規模において明らかに分離できる一棟の大型住居（3・13号）がある。弥生時代、集落内に大型住居が出現することは、すでに各地で確認されており、京都盆地内でも中臣遺跡・嵯峨野小学校構内遺跡・神足遺跡などで検出している。大型住居の性格については、集落内の家長世帯の住居であるか、集落内の特殊な施設と理解するかについては不明であるが、13号は内部施設や出土遺物から考え、共同祭祀などの行われた、集会所的な施設である可能性が高い。

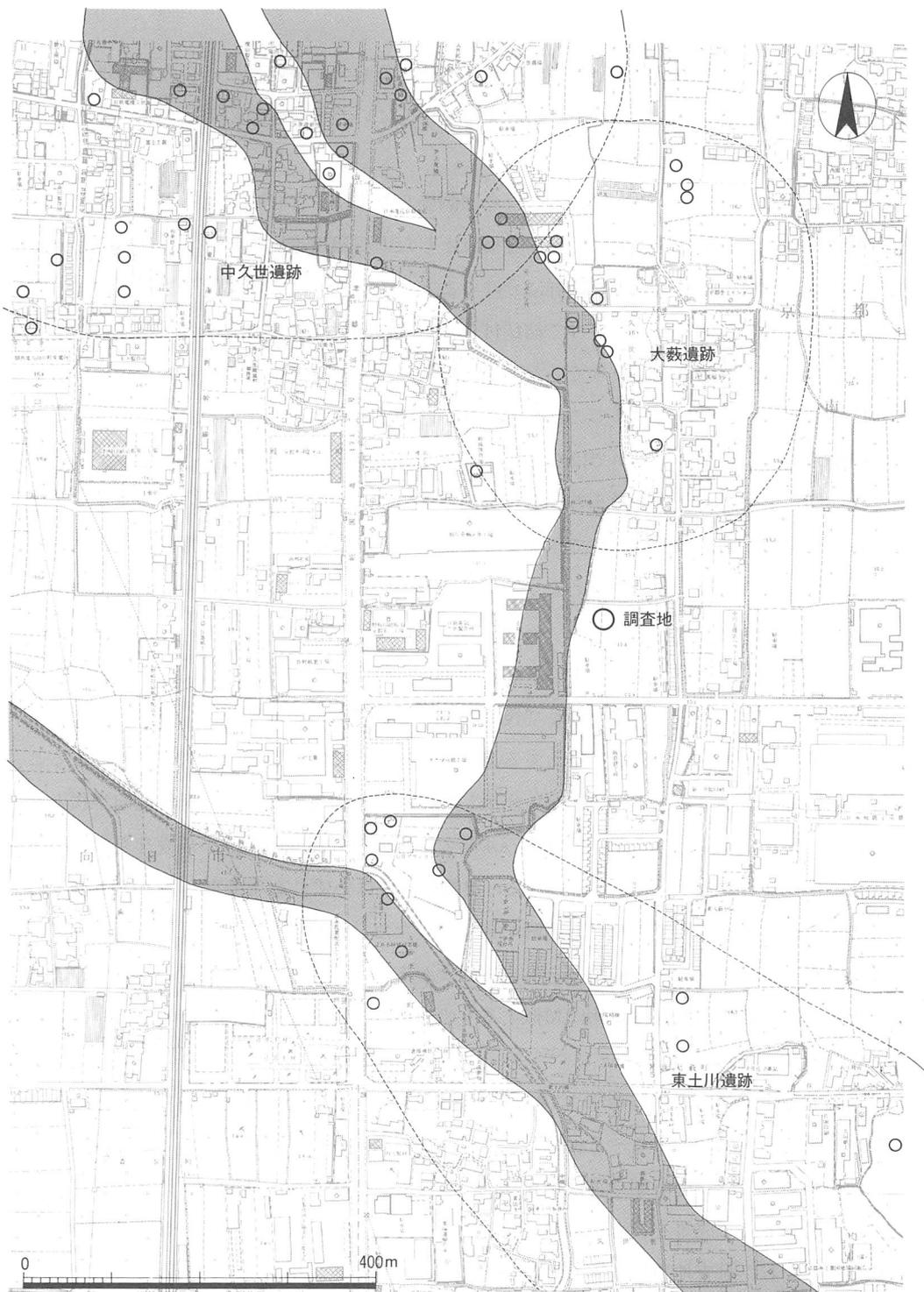
調査地と周辺の遺跡について

遺跡の範囲については調査例も少なく明確でないが、範囲を推定すると、北方約100mの第224次調査では遺構が検出できず、北限であろう。西方は旧河川に接していたようである。^{註13}

集落の存続期間は、出土土器などから考え弥生時代後期から古墳時代前期の間の比較的短期間に限って営まれ、「断続型」ないし「廃絶型」の集落である。^{註14}

調査地を中心とした同時期の遺跡には、北に約300m離れて中久世・大藪遺跡、南約400mに東土川遺跡がある。特に大藪遺跡では、弥生時代後期の大型住居（一辺10m、方形）を検出した。^{註15}これまでの調査成果と遺跡の立地などから旧河川を復元すると、中久世遺跡の中央を北西から南東に流れる河川（旧西羽東師川支流）は、大藪遺跡の西側で南に曲がり、今回調査地の西側を通して、東土川遺跡で検出した向日市物集女から南東方向へ流れる旧羽東師川に合流すると考えられる。^{註16}調査地周辺の水田に今も残る畦畔や水路の乱れが旧河川の名残であろう。先に挙げた中久世・大藪・東土川の他に上久世・下津林などの集落はこの旧河川の両岸に点在する微高地上に営まれたもので、一つの水系を中心とする遺跡群を形成していたと捉えることができよう。この中では中久世遺跡が弥生時代前期から古墳時代後期まで継続するのに対して、上久世遺跡は弥生時代中期・古墳時代前期から後期、下津林・東土川遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期、大藪遺跡は弥生時代後期と当集落と同じく存続期間が短い。

乙訓地方における弥生時代後期から古墳時代前期の集落には、中久世遺跡や神足・森本遺跡のように規模が大きく、方形周溝墓からなる墓地を伴う、多集団で構成された集落のほかに、1単位の集団が営んだ小集落も存在する。前者は継続期間が長く安定した存在で



第 8 図 旧河川復元図 ○は概調査地を示す。

あるのに対し、後者は規模も小さく短期間で廃絶するものが多い。これらの集落は分布の上からも相互に関係しあう存在で、拠点集落を中心にいくつかの周辺集落が結合し、集落群を形成しているものと理解されている。^{#17}

乙訓地方の集落の在り方を考えると、今回調査した集落を含む中久世を拠点とした旧西羽東師川流域の集落群の他に、森本を拠点とした旧石田川流域の集落群、神足・今里などを拠点とした小畑川流域の集落群に分けることができよう。このような集落群のまとまりは河川を通じた地縁などによって結び付き、地域の開発を進めたものと推定でき、かなりの勢力を持つ地域集団になっていたと考えられる。淀川水系にはこのような集落群が16程度あったと想定されており、^{#18} これらもお互いに関連しながら存在したものであろう。この時期の墳墓の状況は明らかではないが、各集落群の首長は集落を見下ろす丘陵上に造られた前期古墳に葬られたと考えられる。乙訓地方の首長も向日丘陵一帯に展開する古墳に葬られたものと推定することができよう。各集落群が具体的にどの首長墓の系譜に対応するかについては今後の問題といえよう。

2 掘立柱建物について

柱穴については調査区西部を中心にして分布し、調査区外西方にさらに広がる可能性が高い。柱穴の中で、掘立柱建物として復原することができたのは調査区中央部の2棟と東部の1棟のみである。柱穴から出土する遺物は極めて少なく、建物の年代を明確にすることは困難であるが、建物1の掘形から出土した土師器や須恵器などから7世紀前半代としておく。建物は梁間1・2間、桁行2～4間で、床面積も15㎡前後の小規模なものである。建物2は総柱の建物で、倉庫とみられる。建物の方位はいずれも北で東へ40°振れ、群としてまとまりをもって建てられたと理解できよう。ただ、建物1・2号は柱筋がそろわず、また近接しており、若干の時間差を考える必要がある。建物方位は、乙訓地対でこれまで検出した奈良時代の掘立柱建物に類似するものもあり、^{#19} 当時の条里を考える上でも注目できよう。

当該期の集落が掘立柱建物だけで構成されるか否かは、調査範囲が狭いため明らかではない。畿内においては、6～7世紀代には竪穴住居から掘立柱建物に変わるとされているが、乙訓地方ではこの時期の集落跡調査例が少なく、今後の検討課題と言えよう。

以上調査で得た成果をまとめておいたが、さらに周辺遺跡の調査成果を含め、検討を深めたい。なお、調査地周辺は宅地化が急速に進みつつある。早急に遺跡の保存措置を図っていかねばならない。

註

1. 歴史的環境については、以下の文を参考にした。
田辺昭三・加藤修「農業の展開・山背国の展開」(『京都の歴史』第1巻 1970年)。
高橋美久二・都出比呂志「弥生時代・古墳時代」(『向日市史』上巻 1983年)。
岩崎 誠「乙訓地方の自然と遺跡(2) 桂川右岸の弥生遺跡」(『長岡京跡発掘調査ニュース』第29号 1983年)。
山本輝雄「乙訓地域の古墳時代遺跡―長岡京内を中心に」(『第7回調査成果交流会資料』1983年)。
2. 特殊遺構の類例には中臣遺跡第20・56次調査4号住居、和泉式部町遺跡15号住居(1987年調査、未報告)がある。
3. 土器器形の分類について、弥生土器は吉岡博之「長岡京跡昭和53年度発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1979年)、土師器は中塚良「乙訓地域における古式土師器の様相」(『長岡京古文化論叢』1981年)を参考にした。
4. 上村和直『中久世遺跡発掘調査概報』1987年。
5. 註3-1に同じ。
6. 岩崎誠「長岡京跡左京第54次調査七条一坊十町・大田遺跡調査概要」(『長岡京跡市文化財調査報告書 第14冊』1985年)。
7. 秋山浩三「河内からもち運ばれた土器」(『長岡京古文化論叢』1981年)。
8. 國下多美樹・中塚良「中海道遺跡第6次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書 第13集』1984年)。
9. 竹原一彦「長岡京跡左京36次調査略報」(『長岡京跡発掘調査ニュース』第18号 1980年)。
10. 都出比呂志「古墳出現の前夜」(『向日市史』上巻 1983年)。
11. 岩崎誠「(仮)古市保育所設に伴う発掘調査概要・長岡京跡左京第17次調査」(『長岡京市文化財調査報告書 第5冊』1985年)。
12. 近藤義郎「共同体と単位集団」(『考古学研究』第6巻 第1号 1959年)。
13. 註4と同じ。
14. 佐原真「農業の開始と階級社会の形成」(『岩波講座 日本歴史1 原始および古代』1975年)。
15. 鈴木広司「大藪遺跡発掘調査概報」1988年。
16. 長宗繁一「長岡京跡・東土川遺跡」(『京都市内遺跡試掘立会調査概報』1986年)。
京都市埋蔵文化財研究所『長岡京跡左京一条三坊六・十一町跡発掘調査現地説明会資料』1988年。
17. 註10と同じ。
18. 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻 第4号 1974年)。
19. 中尾秀正「乙訓地方における奈良時代集落の検討」(『長岡京古文化論叢』1981年)。

第2表 遺構一覧表(1)

竪穴住居

1 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・隅丸方形。(5.4×5.6、深さ0.14)・方位はN-20°-E。 ・主柱穴は2本検出。(本来は4本か?)柱間寸法は2.4。 ・周溝(幅0.2、深さ0.1)は西壁を除く3壁を巡る。 ・北東部に炉跡。円形(径0.4、深さ0.07)で周辺が焼け、中に炭・灰が残る。 ・東辺中央で台形の土壌(南北1.2×東西0.9、深さ0.18)。底面中央にピット(径0.3、深さ0.4)あり。埋土は黄灰色粘土、ピット底部のみ暗灰色泥土である。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から土師器壺C、甕A・B・F、高杯A、小型丸底壺A出土。 ・東辺土壌から土師器壺A、甕B、高杯、鉄製ヤリガンナ出土。 ・周溝・柱穴から土師器甕出土。 ・覆土から土師器壺B、甕B・F、高杯B(2)、器台E(1)出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内式土器併行期。 ・3号と重複。1号→3号。
2 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・北壁部のみ残存。(深さ0.12) ・住居と断定できない。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・出土土器は小片少量である。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・時期不明。
3 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・方形。(8.2×8.5、深さ0.1)床面積は72.8㎡。 ・方位はN-45°-E。 ・床全面に暗褐色砂泥粘土(厚さ0.2)を貼る。 ・主柱は4本。柱間寸法は4.6、4.55、4.7、4.55。 ・周溝(幅0.15、深さ0.1)は東隅部を除き巡る。 ・中央部に炉跡。隅丸長方形(1.0×0.7、深さ0.2)で2段掘り、周辺は焼け、中に炭が残る。 ・東辺に長方形2段掘りの土壌(0.6×1.0、深さ0.4)。埋土は暗褐色泥砂。 ・北辺部中央に楕円形土壌(1.4×1.0、深さ0.25)、西辺部に楕円形土壌(0.8×0.5、深さ0.4)がある。埋土はいずれも暗褐色泥砂。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から土師器壺、甕F(10)、器台(11)など出土。 ・東辺土壌から土師器甕(7)・高杯、北辺土壌から土師器甕、焼土塊出土、中央炉跡から土師器甕A・B(9)出土。 ・貼床土から土師器壺D、甕、高杯出土。 ・周溝・柱穴から土師器甕B出土。 ・覆土から弥生土器壺、鉢、土師器壺A・B・C、甕B(8)・F、鉢(12)、高杯B、器台E、小型丸底壺A出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内式土器併行期。 ・1号と重複。1号→3号。
4 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・隅丸方形。(3.4×4.0、深さ0.1)床面積は11.4㎡。 ・方位はN-65°-E。 ・周溝・柱穴なし。 ・中央に炉跡。円形(径0.5、深さ0.15)で壁面が焼け、中に炭が堆積する。 ・炉周辺にまで炭が広がる。 ・東辺中央に楕円形の土壌(0.8×0.5、深さ0.4)。埋土は暗褐色砂泥。

第3表 遺構一覧表(2)

4号	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から土師器壺C、甕A、砥石(52)、灰白色粘土塊出土。 ・炉跡から土師器壺出土。 ・東辺ピットから土師器壺出土。 ・覆土から弥生土器壺、鉢、土師器壺A・G、甕A・B・F、高杯B(3)、器台(4)出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・弥生後期(V様式)～庄内式土器併行期。 ・5号と重複。4号→5号。
5号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・方形。(6.0×6.2、深さ0.05)床面積36.1㎡。 ・方位はN-45°-E。 ・主柱は4本。柱間寸法は3.12、3.1、3.05、3.0。 ・北柱穴から柱(径0.2)を据えた状態で検出。 ・周溝(幅0.15、深さ0.5)は南隅に一部残存。 ・中央に炉跡。円形(径0.5、深さ0.1)で周辺が焼け、中に炭が残る。 ・東辺中央に楕円形の2段掘り土壇(1.3×1.5、深さ0.4)。中に焼土・炭が充満して盛り上がる。壁面は焼けていない。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から土師器壺、甕B・F(5)、高杯出土。 ・炉跡から土師器壺、甕、高杯、器台B(6)出土。 ・東辺土壇から土師器壺、甕、焼土塊出土。 ・柱穴から土師器甕出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内式土器併行期。 ・4号と重複。4号→5号。
6号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・隅丸方形。(6.0×5.8、深さ0.1)床面積は33.5㎡。 ・方位はN-65°-E。 ・主柱は4本。柱間寸法は2.55、2.7、2.65、2.75。 ・周溝(幅0.2、深さ0.5)は全壁を巡る。 ・北西部に浅い落ち込み(幅0.8、深さ0.2)。床面と同じ高さまで土(黄灰色砂泥)を埋める。 ・中央に炉跡。円形(径0.7、深さ0.1)で周辺が焼け、中に炭が残る。 ・東辺中央に楕円形(1.5×1.2、深さ0.2)の土壇。土壇の底に、西に方形(一辺0.6、深さ0.5)、東に長方形(0.3×0.4、深さ0.35)のピットあり。堆積状況から、北が先に埋まり後に南が埋まったと考えられる。北では、木蓋が落ち込んだ堆積を呈す。埋土はいずれも暗灰色粘土。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から土師器壺、甕出土。 ・東辺土壇から土師器壺、甕A・B、鉢(19)、高杯出土。 ・周溝、柱穴、北側落ち込みから土師器甕出土。 ・覆土から弥生(土器)壺、土師器壺A(20)、甕A、高杯B、砥石(53)、石包丁(56)、鉄製品出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内式土器併行期。
7号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・円形。深さ0.14。 ・柱穴未検出。 ・周溝(幅0.35、深さ0.2)が巡る。 ・内部施設未検出。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上、周溝から弥生土器壺、甕出土。 ・覆土中から弥生土器壺B・G、甕A(16)・B(17)、鉢B、高杯A(18)、器台出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・弥生後期(V様式)。

第4表 遺構一覧表(3)

8 A 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・隅丸方形。(5.3×5.0、深さ0.05) 床面積は26.3㎡。 ・方位はN-45°-E。 ・主柱は4本。柱間寸法は2.8、2.8、2.5、2.7。 ・周溝(幅0.14、深さ0.08)は隅部を除き巡る。 ・中央に炉跡。円形(径0.4、深さ0.08)で周辺が焼け、中に炭が残る。 ・東辺中央に長方形の土壇(0.5×0.7、深さ0.5)。埋土は暗褐色泥砂。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・東辺土壇、周溝から土師器甕出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・布留式土器併行期。 ・柱穴・炉跡は同位置で全辺を拡張。8-A号→8-B号。 ・9号と重複。9号→8号。
8 B 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・隅丸方形。(6.4×6.5、深さ0.05) 床面積は36.1㎡。 ・方位はN-45°-E。 ・北東辺を除く3辺に周溝(幅0.2、深さ0.1)が巡る。 ・柱穴・炉跡はAと同じ。 ・東辺中央に長方形の2段掘りの土壇(1.8×1.5、深さ0.5)、底に小ピット数ヶ所あり。埋土は暗褐色砂泥である。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から土師器壺、甕B(13)・C、高杯B、小型鉢(14)、小型丸底壺A(15)、砥石(55)、鉄製品出土。 ・東辺土壇から土師器壺A・B、小型丸底壺A出土。 ・柱穴から弥生土器甕、土師器甕、小型丸底壺出土。 ・周溝から土師器甕出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・布留式土器併行期。
9 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・隅丸方形。(深さ0.05) ・方位はN-40°-E。 ・主柱穴3本検出。(本来は4本か)柱間寸法は2.1、2.4。 ・周溝なし。 ・中央に円形土壇(径0.7、深さ0.15)、埋土は黄灰色粘土。 ・東辺に楕円形の土壇(1.0×0.75、深さ0.18)。土壇の底に小ピットあり。埋土は黄灰色粘土。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から弥生土器壺、鉢、土師器壺(22)、甕B、甗、器台E出土。 ・東辺土壇から土師器壺、甕A(21)・B・F、高杯B出土。 ・中央土壇から土師器甕B、高杯出土。 ・柱穴から土師器甕出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・弥生後期(V様式)~庄内式土器併行期。 ・8号と重複。9号→8号。
10 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・円形。(径7.5、深さ0.1) ・柱穴未検出。 ・周溝なし。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・覆土から弥生土器壺、甕、鉢の小片出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・時期不明。

第5表 遺構一覧表(4)

11 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・円形。(径8.0、深さ0.12) ・北側で壁から0.25離れ、周溝(幅0.12、深さ0.05)が巡る。 ・柱穴2本検出。柱間寸法は0.5。 ・中央に長方形の土壇(1.2×1.1、深さ0.3)。底に円形のピット(径0.5、深さ0.5)あり。土壇内埋土は褐色砂泥で、グリ石・土器を多く含む。ピット内は炭が大量に充満する。底や壁面は焼けていない。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から土師器壺C、甕A検出。 ・中央土壇から土師器壺A、甕A(24)・B(23)・G・F、鉢、高杯B、手焙り形土器出土。 ・柱穴から土師器甕、高杯出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内式土器併行期。
12 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・多角形か。(深さ0.2) ・柱穴2本検出。柱間寸法は3.3。 ・全辺に周溝(幅0.25、深さ0.1)が巡る。 ・南・西部に円形土壇(径0.5、深さ0.3)。中に炭・焼土を多く含むが壁は焼けていない。 ・中央部床面が焼け、炭が散在する。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝から土師器甕F出土。 ・覆土から土師器壺B、甕A(25,26)・B・F、高杯A・G出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内式土器併行期。 ・住居の東側に、焼米が散在していた。
13 A 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・多角形。(8.4×8.4、深さ0.3)床面積は56.5㎡。 ・主柱は9本。柱間寸法は3.1、2.1、1.25、1.85、2.05、1.65、2.05、2.5、2.85。 ・北・南辺の一部を除く全周に周溝(幅0.3、深さ0.1)が巡る。溝底には小ピット数個あり。北東部では中央土壇から周溝まで溝(幅0.3、深さ0.08)がある。 ・中央部から南にかけ、特殊遺構がある。中央にリング状(径2.3)の土手(幅0.2、高さ0.07)があり、この南側に外周に向かってハの字状(幅1~1.5、長さ2.0)に土手(幅0.2、高さ0.07)がある。リングの中央には円形土壇(径1.2、深さ0.1)があり、中心に円形ピット(径0.5、深さ0.7)がある。ピット内は灰色粘土と炭が互層に堆積。中央土壇の底は一部焼けるが、円形ピット内は焼けていない。円形ピットの東・西両側にピット(径0.2、深さ0.7)がある。 ・ハの字の中心に円形土壇(径0.5、深さ0.55)があり、中心に円形ピット(径0.22)がある。その北と南には方形土壇(一辺0.3、深さ0.25)あり。埋土はいずれも灰褐色砂泥である。 ・北辺部に方形土壇(一辺1.0、深さ0.1)あり。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面から土師器壺、甕出土。 ・周溝から土師器壺、甕A出土。 ・南東部ピットから土師器壺B(33)出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内式土器併行期。 ・柱穴・炉跡は同位置で全辺を拡張する。13-A号→13-B号。

第6表 遺構一覧表(5)

13 B 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・多角形。(9.4×9.0、深さ0.25) 床面積は68.3㎡。 ・床面に暗褐色粘土(厚さ0.06)を貼る。 ・主柱はAと同じ。 ・全辺に周溝(幅0.25、深さ0.1)が巡る。南東部で2重になり、直線溝(幅0.3、深さ0.15)あり。 ・中央部特殊遺構はAと同じ。 ・中央部からハの字状土手にかけ、炭と焼土が厚く堆積。周辺には炭が散在。 ・東辺に楕円形土壇(0.7×0.5、深さ0.5)があり、中心に円形ピット(径0.2)がある。 ・東辺部で壁が一部張り出し、炭・焼土の塊が残存。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・床面上から土師器壺B、甕A・B・F、玉状土製品(67)出土。 ・西辺土壇から土師器高杯B出土。 ・南東部土壇から土師器甕F、鉢出土。 ・東部土壇から焼土塊出土。 ・周溝内から土師器壺、甕A、鉢出土。 ・柱穴から土師器甕A出土。 ・特殊遺構南東部から土師器壺A、甕、器台出土。 ・覆土から弥生土器壺、甕、鉢、土師器壺A・B・C・D、甕A(28)・B・G・F(27)、鉢(29)、高杯A・B(31, 34)、器台(32)、器台E、甑A(30)、小型鉢、小型丸底壺A、砥石(54)出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内式土器併行期。
14 号	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・円形。(深さ0.1) ・周溝なし。 ・柱穴未検出。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・覆土から弥生土器甕などの小片が少量出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・時期不明。

溝

1 溝	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・素掘りの溝(幅3.6~8.0、深さ0.4~0.6)。B区中央でクランク状に曲がる。 ・西壁はやや直に落ち込み、東壁はなだらかに落ちる。底は平坦であるが部分的に凹む。底は北と南の比高差が0.2で、北から南へ流れる。 ・埋土は大きく2層に分かれ、上層は黄灰色粘土、下層は灰色粘土。遺物は西側から炭と一緒に投棄したような堆積を呈す。遺物は上層より下層が多い。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・上層から土師器壺、甕B・C、鉢、高杯G出土。 ・下層から土師器壺A(41)・C・D(44)・E(42, 43)、甕A(40)・B・C(35, 37, 38)、高杯B、器台、木屑出土。 ・西肩部で土師器壺C・D、甕B・C(36, 39)・G、高杯A・C(48, 49)・D・G(46, 47)、器台E、小型丸底壺A・B、小型鉢B(45)出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内から布留式土器併行期。 ・11・13号住居を切る。

第7表 遺構一覧表(6)

溝	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・素掘りの溝(深さ0.2~0.4)。弧状に曲がる。 ・西壁はやや直に落ち込み、底は平坦。底は北と南の比高差が0.4で北から南へ流れる。 ・埋土は大きく2層に分かれ、上層は灰色粘土、下層は暗灰色粘土。埋土中には木片を多く含む。
	2 遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・上層から土師器壺、甕出土。 ・下層から土師器壺、甕G、高杯B、小型丸底壺A出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・庄内から布留式土器併行期。 ・13号住居を切る。

掘立柱建物

建物	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・南北棟建物。 ・梁間2間(1.6、1.6)、桁行4間(1.6、1.7、1.4、1.6)。 ・掘形は方形(一辺0.5~0.7、深さ0.4~0.6)。柱穴は円形(径0.2、深さ0.4~0.5)。 ・方位はN-40°-E。
	1 遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形内から弥生土器・土師器碗C(5)出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・7世紀前半代。 ・2号と同一方向であるが、柱筋は通らない。
建物	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・方形建物。 ・南北2間(1.9×1.6)×東西2間(1.6、1.7)で、中央にやや小さい柱穴(径0.4、深さ0.4)あり。 ・掘形は方形(一辺0.5~0.6、深さ0.4~0.5)。柱穴は円形(径0.25、深さ0.3~0.6)。方向はN-40°-E。
	遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形内から須恵器杯・G甕、弥生土器甕、土師器甕、小型丸底壺、碗出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・7世紀前半代。
建物	遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・東西棟建物。 ・梁間1間(3.3)、桁行2間(2.2、2.3)。 ・掘形は方形(一辺0.5、深さ0.4)。柱穴は円形(径0.2、深さ0.2)。 ・方位はN-40°-E。
	3 遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・掘形内から土師器甕出土。
	備考	<ul style="list-style-type: none"> ・7世紀前半代。 ・溝1を切る。

- ・単位はm。
- ・竪穴住居柱間寸法は北柱から時計回りに測る。
- ・遺物番号は実測図・写真と共通。

土器

第8表 遺物観察表(1)

出土遺構	器形	遺物番号	形態と文様の特徴	手法の特徴	備考
1号	器台	1	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は大きく外反し端部を下に拡張する。口縁端面にクシ描直線文を施し、上から円形浮文を貼り付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。 覆土出土。
	高杯	2	<ul style="list-style-type: none"> 杯部は内湾し、口縁部は外反する。杯部との境に弱い稜がつく。口縁端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部・杯部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で砂粒多く含む。 覆土出土。
4号	高杯	3	<ul style="list-style-type: none"> 杯部は内湾し、口縁部は大きく外反する。杯部との境に稜がつく。口縁端部は外方に伸びる。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部・杯部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 茶灰色で砂粒含む。 覆土出土。
	器台	4	<ul style="list-style-type: none"> 筒部は太く、裾部は広がる。端部は若干上に拡張する。 	<ul style="list-style-type: none"> 筒部外面はタテハケ、筒部内面、裾部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。 覆土出土。
5号	甕	5	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反し、端部は直立する。端部外面にクシによる列点文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。 覆土出土。
	器台	6	<ul style="list-style-type: none"> 脚部は大きく広がり、端部は尖る。脚部に3ヶ所円孔を穿つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 脚部外面はナデ、内面は上半オサエ、下半は斜方向のハケ。 	<ul style="list-style-type: none"> 褐灰色で細砂含む。 炉跡出土。
3号	甕	7	<ul style="list-style-type: none"> 頸部は外反し、口縁部は内湾する。端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内面はナデ、外面はタテハケ。頸部・口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。砂粒多く含む。 北辺土壌出土。
		8・9	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反し、端部は上方に拡張する。頸部内面に強い稜がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内面はヨコヘラケズリ、外面はナデ。口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗茶褐色で雲母・角閃石を含む。外面に煤付着。 8は覆土、9は炉跡出土。
		10	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反し、端部は直立する。体部にクシ描き直線文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面、体部外面はヨコナデ。体部内面はオサエ。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗灰白色で細砂多く含む。 床面上出土。
	器台	11	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反し、端部は下外方に拡張する。 	<ul style="list-style-type: none"> 調整不明。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で細砂多く含む。 床面上出土。
	鉢	12	<ul style="list-style-type: none"> 体部は丸い。口縁部は外上方へ拡張する。端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はナデ、外面は上半タテハケ、下半斜方向のヘラケズリ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。砂粒多く含む。

第9表 遺物観察表(2)

8号	甕	13	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部はやや内湾し、端部は若干内側に拡張する。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内面はタテヘラケズリ。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ、外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。細砂含む。 覆土出土。
	小型鉢	14	<ul style="list-style-type: none"> 底部は平坦で体部は内湾する。口縁端部は直立し、尖る。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部・体部外面はナデ。内面はヘラケズリ後ナデ。口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で内面は黒色。赤色斑粒、細砂含む。 床面上出土。
	小型丸底壺	15	<ul style="list-style-type: none"> 体部は丸く口縁部は内湾する。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部・口縁部内面はヨコハケ。体部外面はタテハケ。口縁部外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。細砂含む。 床面上出土。
7号	甕	16	<ul style="list-style-type: none"> 体部は丸く口縁部は外反し、端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内面はオサエ。口縁部内外面・体部外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。細砂含む。 覆土出土。
		17	<ul style="list-style-type: none"> 筒部はやや内湾して広がり、端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> 筒部外面は斜方向のハケ、内面はタテナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰褐色で砂粒多く含む。 覆土出土。
	高杯	18	<ul style="list-style-type: none"> 杯部は丸く、口縁部は外上方に伸び、端部は内外に拡張する。杯部との境には稜がつく。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内外面はタテヘラミガキ、口縁部内外面はヨコナデ後、内面に波状の暗文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 暗灰褐色で細砂含む。 覆土出土。
6号	小型鉢	19	<ul style="list-style-type: none"> 底部は平坦で体部は緩やかに内湾する。口縁部は内湾し、端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部外面はナデ、体部外面はタテナデ、下端のみオサエ。底部・体部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。砂粒含む。 東辺土壙出土。
	壺	20	<ul style="list-style-type: none"> 体部は無花果形で底部は平坦である。頸部・口縁部は緩やかに外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面上半はタテハケ、下半はナデ、下端はオサエ。体部・底部内面は斜方向のハケ、口縁部内外面ヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒を含む。砂粒含む。 覆土出土。
9号	甕	21	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反し、端部は内湾する。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面は斜方向のタタキ、内面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 東辺土壙出土。
	壺	22	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は緩やかに外反し、端部は角張る。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒含む。 床面上出土。
11号	甕	23	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外反し、端部は角張る。内面に強い稜が付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はヘラケズリ。外面はナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒含む。 中央土壙出土。
		24	<ul style="list-style-type: none"> 体部はやや内湾し、口縁部は外反し、端部は外へ若干拡張する。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面はヨコタタキ。内面はオサエ。口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒含む。 中央土壙出土。

第10表 遺物観察表(3)

12 号	甕	25	・口縁部は外反し、端部は上方に拡張する。	・口縁部内外面はヨコナデ。	・茶灰色で細砂含む。 ・覆土出土。
		26	・体部はやや内湾し、口縁部は外反し、端部は丸い。	・体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ。	・茶褐色で雲母・角閃石含む。 ・覆土出土。
13 A 号	甕	33	・底部は平で中央部凹む 体部は広がる。	・底部は円盤充填接合。 底部外面・体部外面はナデ、体部・底部内面はナデ後ヨコヘラミガキ。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂・砂粒多く含む。 ・南東部ピット出土。
13 B 号	甕	27	・口縁部は外反し、端部は直立する。外面にクシ描キ列点文を入れる。	・口縁部内外面はヨコナデ。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 ・覆土出土。
		28	・口縁部は緩やかに外反し、端部は尖る。	・口縁部内外面はヨコナデ。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 ・覆土出土。
	鉢	29	・体部は内湾し、口縁部は水平に伸び、端部は下方に拡張する。	・体部外面は斜方向のハケ、内面はナデ。口縁部内外面はヨコナデ。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒多く含む。 ・覆土出土。
	甗	30	・底部は尖り、体部・口縁部は緩やかに内湾する。底部に円孔を穿つ。	・調整不明。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒多く含む。 ・覆土出土。
	高杯	31	・杯部は丸く、口縁部は外反し、端部は丸い。外面に強い稜をつける。	・調整不明。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒多く含む。 ・東部土壌出土。
		34	・口縁部は外反し、端部はやや角張る。	・口縁部内外面はヨコナデ。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒多く含む。 ・覆土出土。
	器台	32	・筒部は太く裾部は大きく広がり、端部は丸い。	・筒部外面・裾部内外面はヨコナデ。筒部内面はオサエ。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒多く含む。 ・覆土出土。
溝 1	甕	35・36	・口縁部は緩やかに内湾し、端部は内へ若干拡張する。	・体部内面はヨコヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒多く含む。 ・下層出土。
		37	・口縁部は外上方へ伸び端部は内へ拡張する。	・体部内面はヘラケズリ外面は調整不明。口縁部内外面はヨコナデ。	・淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒多く含む。 ・下層出土。

第11表 遺物観察表(4)

溝	甕	38	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は丸い。口縁部は内湾し、端部は内へ若干拡張する。内面に強い稜をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部内面はヨコヘラケズリ、外面はヨコハケ、口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 赤褐色で砂粒含む。雲母含む。 • 下層出土。 	
		39	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は丸い。口縁部は内湾し、端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部内面はタテヘラケズリ、外面は調整不明。口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 • 西肩部出土。 	
		40	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は直線的に開く。口縁部は外反し、端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部内面はオサエ。外面はタテナデ。口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 • 下層出土。 	
	壺	壺	41	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は丸く、口縁部は外反し、端部は上下に拡張する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデ。体部・口縁部内外面はタテハケ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒多く含む。外面に丹を塗る。 • 下層出土。
			42	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部は外反し、口縁部は立ち上がり、端部は尖る。外面に稜がつく。 	<ul style="list-style-type: none"> • 調整不明。 	<ul style="list-style-type: none"> • 灰白色で赤色斑粒含む。砂粒含む。 • 下層出土。
			43	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は丸い。頸部は外反し、口縁部は立ち上がり、端部は丸い。外面に稜がつく。 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部内面はヘラケズリ。外面はナデ。頸部・口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒含む。 • 下層出土。
			44	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部は立ち上がり、上部は大きく外反する。口縁部は外反し、端部は尖る。 	<ul style="list-style-type: none"> • 調整不明。 	<ul style="list-style-type: none"> • 赤褐色で砂粒含む。 • 下層出土。
			45	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は丸い。口縁部は内湾し、端部は外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 調整不明。 	<ul style="list-style-type: none"> • 淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 • 西肩部出土。
			46	<ul style="list-style-type: none"> • 杯部は椀状で、口縁部は内湾し、端部は尖る。 	<ul style="list-style-type: none"> • 杯底部内外面はヨコヘラミガキ。口縁部・体部内外面はヨコナデ。後内面にはタテ方向の暗文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> • 淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 • 下層出土。
	高杯	高杯	47	<ul style="list-style-type: none"> • 杯底部は尖り、体部は内湾する。口縁部は尖る。脚部は大きく広がり、端部は角張る。 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部・口縁部調整不明。脚部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 • 下層出土。
			48	<ul style="list-style-type: none"> • 杯底部は平坦で、口縁部は外上方に伸びる。端部は丸い。外面に強い稜がつく。 	<ul style="list-style-type: none"> • 底部・口縁部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 淡黄灰色で赤色斑粒含む。細砂含む。 • 下層出土。

第12表 遺物観察表(5)

溝 1	高杯	49	<ul style="list-style-type: none"> 筒部は太く、裾部は広がる。筒部・裾部の境に円孔を穿つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 筒部・裾部内外面はヨコナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色で赤色斑粒含む。砂粒含む。 西肩部出土。
柱 穴	杯	50	<ul style="list-style-type: none"> 底部は平坦で、体部は丸い。立ち上がりは受け部より低く、内傾する。受け部は短く、内湾する。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部・底部内面は回転ナデで体部外面下半・底部外面はへら切り後不調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 青灰色で細砂含む。 西北部柱穴出土。
	椀	51	<ul style="list-style-type: none"> 体部・口縁部は内湾し端部は若干外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部・口縁部ヨコナデ。体部外面にはヨコヘラミガキ、内面には縦方向の暗文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> 赤褐色で微砂含む。 建物1柱穴掘形出土。

石器

4 号	砥 石	52	<ul style="list-style-type: none"> 楕円形で厚い。上面から側面にかけて砥石面である。他は自然面である。 	<ul style="list-style-type: none"> 砥石面は平滑である。砥石面上に条痕・擦痕は認められない。 	<ul style="list-style-type: none"> 砂岩製。 床面出土。
6 号		53	<ul style="list-style-type: none"> 楕円形で、破損する。上面のみ砥石面である。 		<ul style="list-style-type: none"> 砂岩製。 覆土出土。
13- B号		54	<ul style="list-style-type: none"> 細長い自然石を用いる。上面のみ砥石面である。 		<ul style="list-style-type: none"> 泥岩製。 覆土出土。
8- B号		55	<ul style="list-style-type: none"> 台形で上・下辺が破損する。上面から側面にかけて砥石面である。 		<ul style="list-style-type: none"> 泥岩製。 床面出土。
6 号	石 包 丁	56	<ul style="list-style-type: none"> 刃部は直線で、背部は外湾する。刃部は外湾する片刃である。背部には2ヶ所の円孔がある。刃部には使用の為の擦痕が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部を縦方向、刃部を横方向に研磨する。円孔は両面から穿つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘板岩製。 覆土出土。

土製品

13 B号	玉 状 土 製 品	57	<ul style="list-style-type: none"> 球形で、中央に円孔を穿つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 手づくね成形である。円孔は棒を心にする。全面ナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 淡黄灰色。細砂を含む。赤色斑粒を含む。 床面出土。
---------------	-----------------------	----	---	---	--

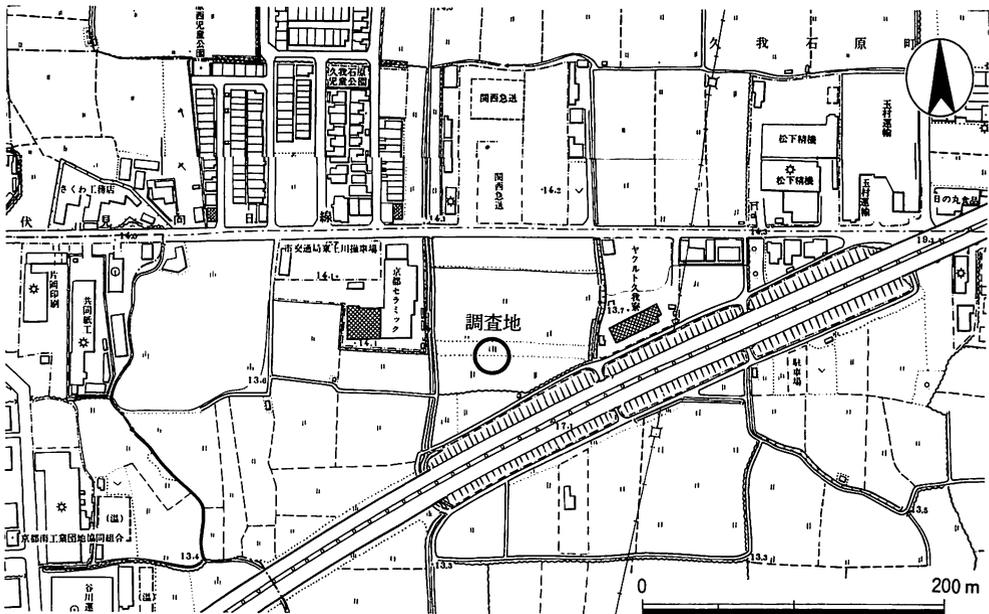
第II章 長岡京左京南一条四坊跡

第1節 調査経過

調査にいたる経緯 当該地は長岡京跡の北東隅、推定左京南一条四坊十六町に位置している。近年まで農地であったが、ここ数年は土砂の処理地として使用されており、敷地内に堆積した土砂は厚いところで旧耕作面から7～8mに達している。

昭和62年8月には宅地造成の届出が提出され、同年9月30日に試掘調査を実施した。この試掘調査で長岡京期の柱穴2基と古墳時代の東西溝1条を検出した。その後京都市と事業者側が協議をおこない、昭和63年5月から6月にかけて調査を実施することになった。

敷地内の東辺には推定東京極大路が南北方向に、また南辺には南一条第一小路が東西方向に通っている。敷地東半分はかなりの厚さで盛土されているため、調査トレンチは調査可能な場所で、南一条第一小路と宅地部分が検出できるように設定した。調査面積は約700㎡で設定したが、遺構検出面での面積は南北約20m、東西約23mの450㎡ほどである。



第9図 調査位置図 (1:5000)

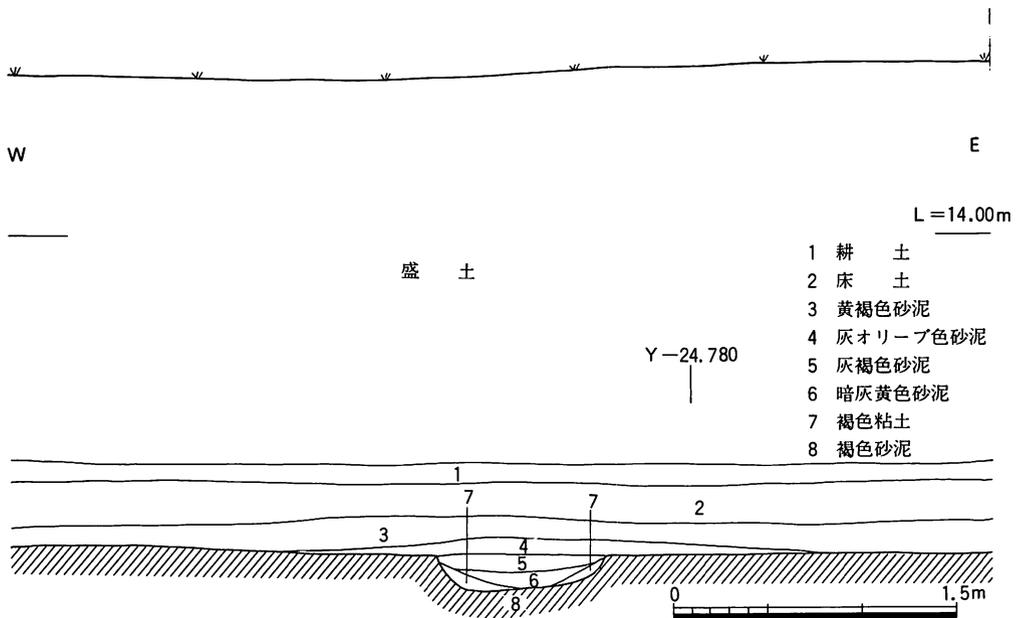
調査の経過 調査は重機による盛土及び耕土・床土除去の後、遺構検出作業に入った。当初、土置場の関係から東西の長さを短かく設定していたが、トレンチ東隅で柱穴群を検出したため、更に東側へ拡張した。

全体の遺構検出の後、平板測量による略測図を作成し、遺構の掘り下げは中・近世の暗渠排水溝から始めた。次に長岡京期とそれ以前の建物跡・溝跡の掘り下げを行った。完掘した状態で全景及び個別の写真撮影を行い、実測図を作成した。最後に柱穴などの断ち割りを行い、現場での作業を終了した。

第2節 遺 構

調査トレンチ内の基本層序は、まず近年の盛土が2～2.5mの厚さであり、以下耕土・床土が0.5～0.7mの厚さで堆積している。床土の下層は長岡京期から中世の遺物を包含する黄褐色砂泥層が部分的に堆積しており、さらに下層が黄灰色泥砂及び褐色砂泥層のベースとなる。検出した遺構はすべてこのベースの泥砂層を切り込んで形成されている。

検出した主な遺構は、中・近世の暗渠排水溝19条・杭列1列、長岡京期の掘立柱建物1棟・柵列2列・南北溝1条、長岡京期以前の遺構としては、古墳時代の溝1条、弥生時代



第10図 南壁断面図 (1:40)

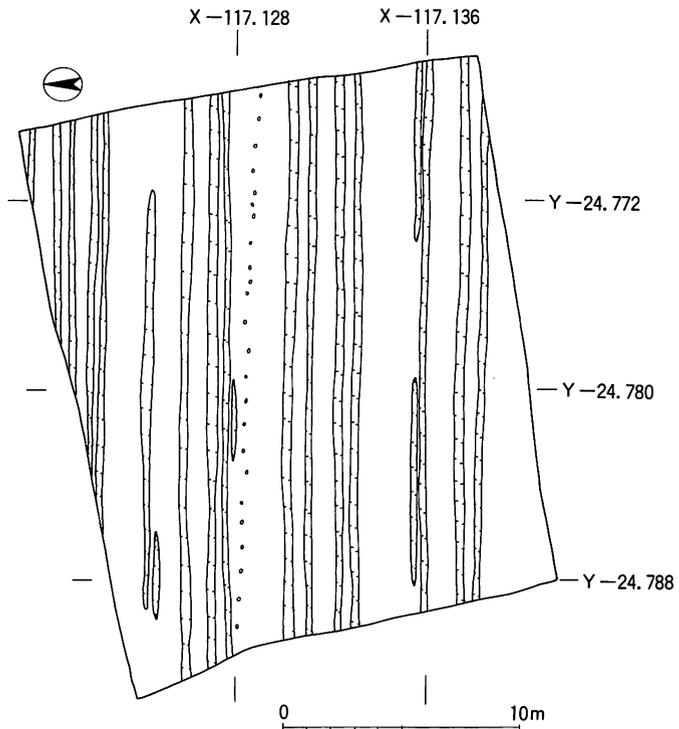
の方形周溝墓状遺構 1 基などがある。

中・近世

暗渠排水溝 検出した暗渠排水溝はすべて東西溝である。幅は検出した肩口で20~40cm、深さ10~30cmを測る。なお、耕土・床土層は場所によって数層の堆積がみられ、最上層の耕土に伴う排水溝は竹筒を使用しているものが多い。

長岡京期

SB1 トレンチの南東隅で検出した。梁間2間、桁行3間以上の南北方向の建



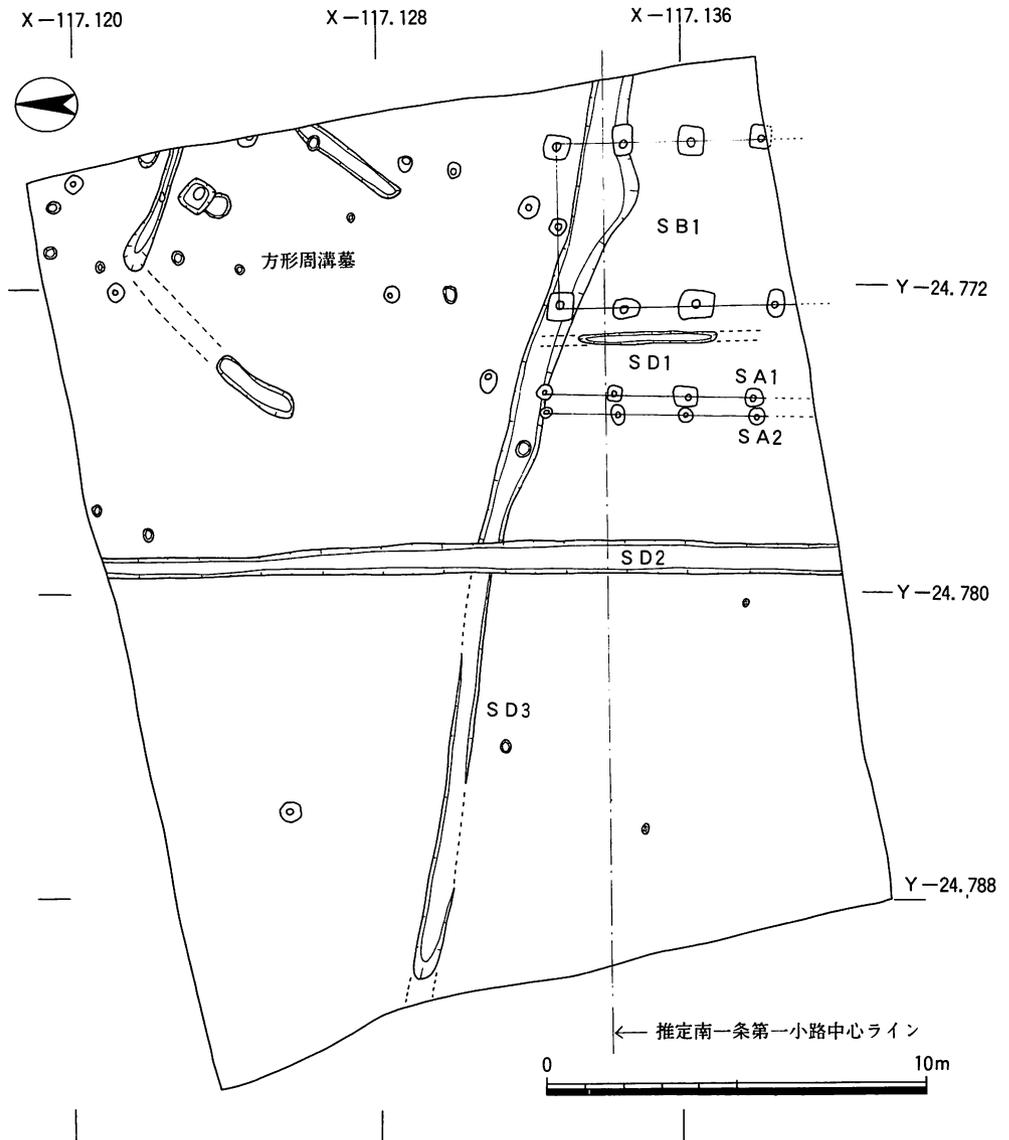
第11図 中・近世遺構配置図 (1:320)

物である。南側の柱列は未確認で、トレンチ南側へ続く。柱の掘形は、1辺50~70cmで、形状は正方形のものが多く、円形・楕円形に近いものも含まれる。柱跡の直径は20cmである。柱間寸法は172~198cmと不揃いである。

SA1・2 SB1の西側に位置する柵列で、3間分検出している。造り替えをしているらしく、2列検出している。遺構が重複していないため前後関係は不明である。柱間寸法は180cmで、柱跡の直径は13~18cmである。

SD1 SB1とSA1・2の間に位置し、SB1に近接して南北方向に走る。幅約30cmで、深さは5~10cmと浅いものである。長さは3.5m検出しているが、本来はSA1・2に平行して延びていたものと考えられる。

SD2 トレンチの中央付近で検出した南北溝である。1町の東西のほぼ中央付近に位置している。溝肩口の幅は北から南側に行くに従い徐々に広がっており、トレンチ北端付近で50cm、同じく南端付近で80cmを測る。断面の形状は両肩部から低面まで直線的であり、逆台形を呈している。構内の堆積状況は両肩部から底部中央にかけて褐色の粘質土がU字形に堆積しており、その内側に砂泥層が堆積した状態を呈している。底部の標高はトレン

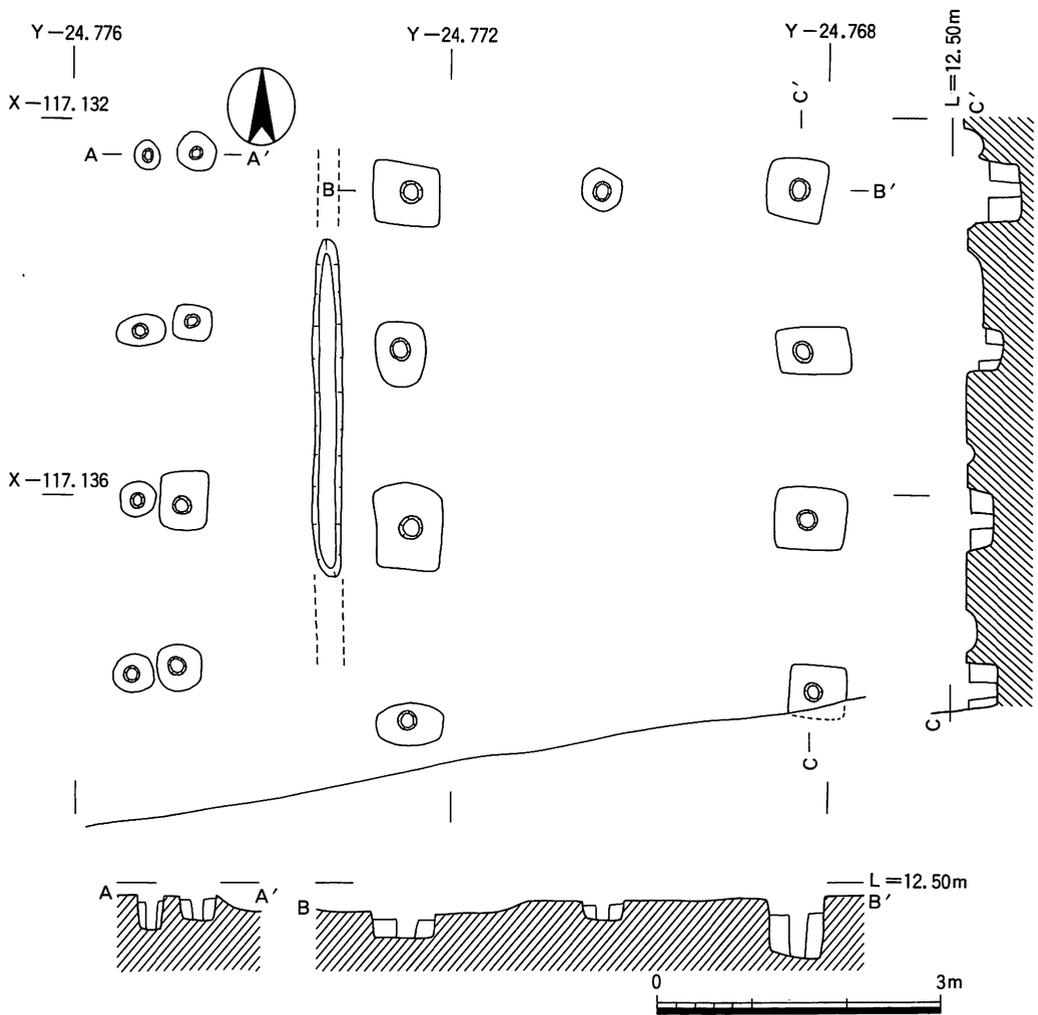


第12図 長岡京期およびそれ以前の遺構配置図 (1:200)

チ北端付近で12.3m、中央付近で12.2m、南端付近で12.16mとなっており、ゆるやかに南へ低くなっている。

長岡京期以前

SD3 トレンチ北西から南東へ流れる古墳時代の溝である。溝底の浅い西側では、肩口の検出ができなかった部分もある。幅は検出した肩口で0.6~1.1mを測るがトレンチ東壁近



第13図 SB 1 実測図 (1:80)

くでは部分的に肩が崩れた状態で、溝幅の広がる所もある。

方形周溝墓状遺構 トレンチ北東隅で検出。方位は南北軸に対しほぼ45度傾いている。検出した溝はコの字形を呈しており、南西側1辺には溝を検出していない。規模は溝の心々間で1辺6.2mを測る。溝幅は肩口で30~60cm、深さは北東辺で肩口から30cmを測るが、他は10cm前後の浅いものである。北東辺の中央付近で弥生時代の壺1点が出土している。

第3節 遺物

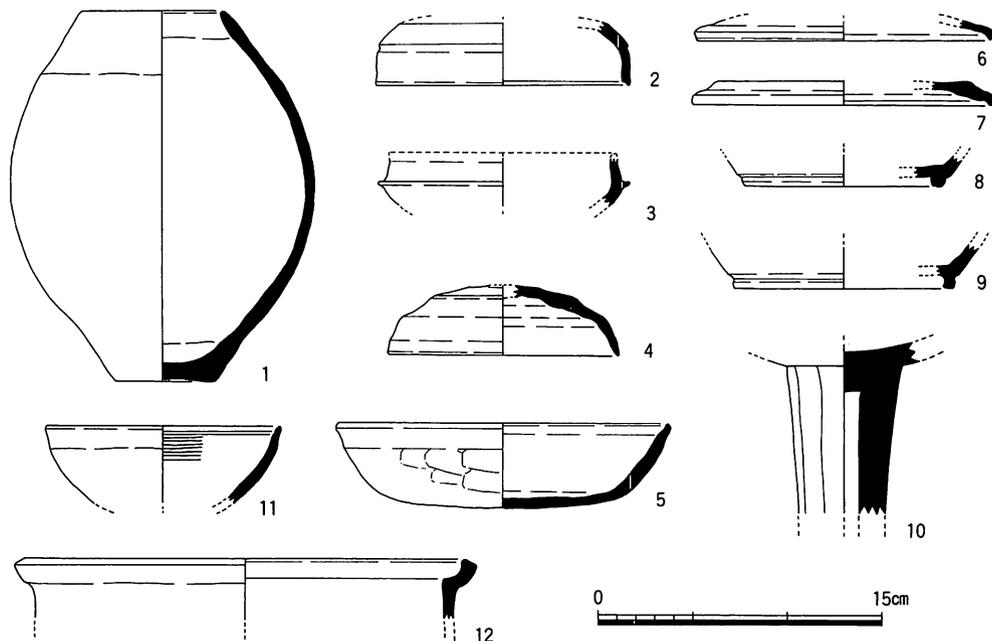
今回の調査で出土した遺物は、土器類・瓦磚類などで、その出土量は調査した面積の割には少なく、整理箱に1箱である。

長岡京期以後の遺物は、東西方向に走る暗渠排水溝から鎌倉時代の瓦器碗(11)、の他土師器片などが出土し、床土下層の黄褐色砂泥層から瓦器の鍋(12)が出土している。

SB1 から須恵器蓋(6)や土師器片が出土しており、SD2 から土師器杯(5)・高杯(10)・平瓦片などが出土しているが図示できるものは少ない。また黄褐色砂泥層からは、須恵器蓋(7)・杯(8・9)などが出土している。

長岡京期以前の遺物は、SD3 から古墳時代中期の須恵器蓋(2)・杯(3)その他須恵器・土師器片が出土しており、トレンチ北東隅では柱穴と考えられる小穴から古墳時代後期の須恵器蓋(4)が出土している。また方形周溝墓状遺構からは、弥生時代の無頸壺(1)が完形で出土している。この無頸壺は溝底からやや浮いた所で、横倒しの状態で出土した。

瓦器(11・12)碗(11)は内面の口縁部近くに浅い凹線を1条めぐらす。表面は摩耗が著しく、わずかに内面に暗文の痕跡がのこる。鍋(12)は口径24~25cmのもので、胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。



第14図 土器実測図 (1:4)

土師器（5・10）杯(5)は口径4.5cmを測る。底部は平らで、やや内湾気味に斜め上方へひらく。外面にはヘラ削りが施されている。高杯(10)は断面七角形を呈する脚部のみ出土。

須恵器（2～4・6～9）蓋(2)は天井部にはヘラ削りがみられ、口縁部との境界に稜をなす。杯(3)は水平な受け部からたちあがって口縁部をつくる。蓋(4)は天井部と口縁部とをわける凹線や稜はなく、全体に丸味をもって仕上げる。以上は古墳時代のものものである。蓋（6・7）は口縁部内面にかえりを持たず、偏平である。杯（8・9）は底部と体部の境界付近に高台を持つ。以上は長岡京期のものである。

第4節 ま と め

当該地は推定長岡京域内では北東隅近くに位置しており、調査地より約700m東方には桂川が南流している。この桂川右岸の平野部は、山城盆地でも最も早くから水稻耕作が始まった地域で、その後も中・近世まで遺跡は連綿と続いている。

今回の調査で検出した遺構も弥生時代の方形周溝墓状遺構、古墳時代の溝などがあり、トレンチ北東隅の柱穴群などは古墳時代の建物跡の存在を窺わせるものである。

長岡京期の建物跡、柵列、溝などの遺構は推定南一条第一小路（東西道路）が位置する場所にかかっており、同小路跡は検出できなかった。昭和55年に実施している本調査地西方約100mの所での調査においてもこの小路は検出されておらず、今後の課題といえる。

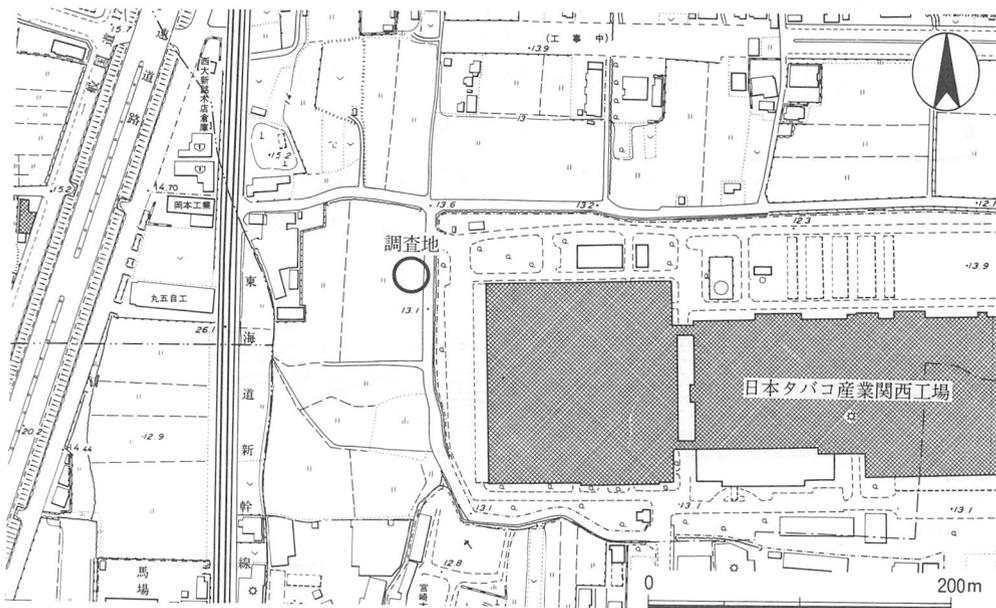
今回検出した長岡京期の遺構はトレンチの中央を南北に走るSD2を境にしてその東側に集中しており、西側では検出していない。この南北溝は一町のほぼ中心ラインにあたっていることと、検出した遺構の主軸がほぼ真南北に近いことから考え、調査地は長岡京の条坊に規制された一区画を占めていることが推定できる。

第III章 長岡京左京四条三坊跡

第1節 調査経過

調査地は、左京四条三坊四町の推定地にあたり、左京6次調査^{註1}の西側に接する。ここに倉庫建設が計画されたため試掘調査を実施したもので、都合により2回に分け調査した。調査地の東側では中世の建物跡、長岡京期の沼状遺構を検出したのをはじめとして、北側の道路を挟んだ昭和60年度に実施した試掘調査^{註2}では長岡京期の建物跡2棟を、さらに北方約100mで実施した外環状線予定地内の発掘調査では、長岡京期の石敷きを伴う建物跡など多くの遺構・遺物を検出している。特に当調査地の北にあたる三町内で検出した遺構群は、「川原寺」の関連遺構と推定しているものである。当試掘調査地は、上述した遺構群がさらに南に続くかどうかを知る上で重要な位置にあたる。

調査は、昭和63年10月12日に敷地4ヶ所にトレンチを入れ長岡京期の遺物包含層などを確認する成果をえた。この後協議の結果、調査区を4ヶ所設定し、遺構の確認調査を実施する運びとなった。調査区は北端部に1トレンチを設定し、順次南へ4トレンチまでを設定した。



第15図 調査位置図 (1:5000)

第2節 遺 構

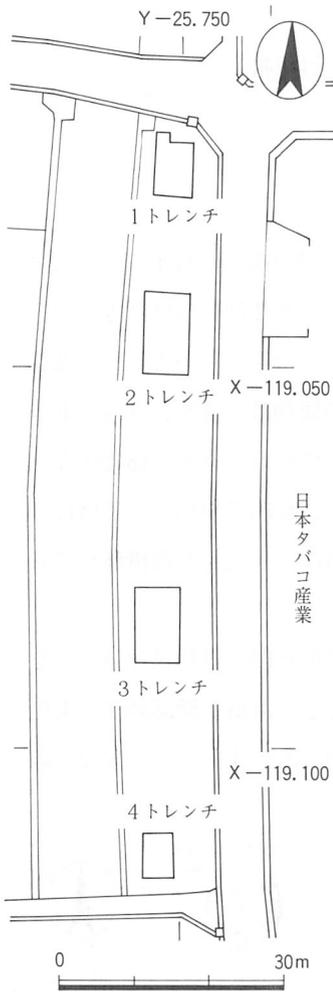
調査地は、一筆の水田で耕作面は標高12.7m前後を測る。長岡京期の遺構面は、1トレンチで標高12.2mを測り、南へわずかに傾斜し4トレンチで12.1mを測る。以下長岡京期の遺構について説明する。

1トレンチ 北端部で帯状に小礫（径2～3cm）が東西方向に散布する部分を検出した。また南端部で東西方向の溝（SD1）を検出した。埋土は、焼土・炭化物の堆積がみられる。

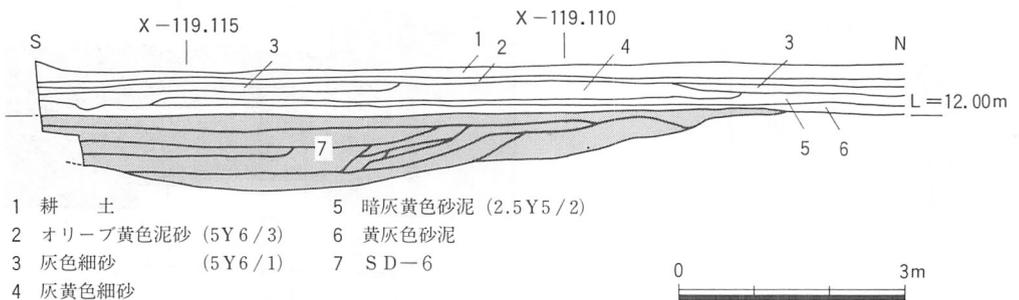
2トレンチ 長岡京期の明確な遺構は認められなかったが、トレンチ全面に薄く遺物包含層が堆積し、土器・瓦片が少量出土した。北端部で、焼灰層を検出した。

3トレンチ 北部に焼土・焼灰層の堆積（SX2）、南部にピット状遺構（SX3・4）および溝状遺構（SX5）を検出した。SX3は、一辺25cmを測り深さ10cmの方形を呈し、焼灰・焼土で埋まり、SX4・5も焼灰層で埋まる状況にあった。

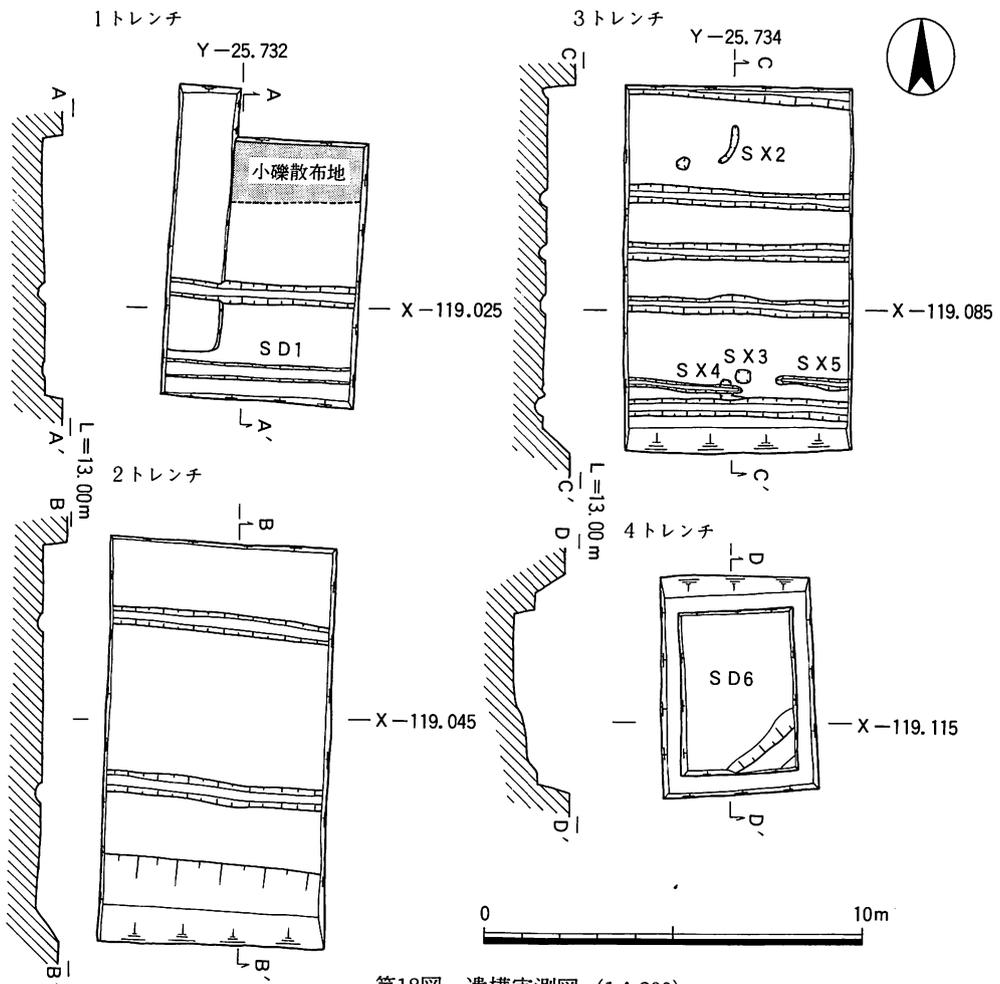
4トレンチ 1～3トレンチとは異なり、灰色砂泥層の堆積が全面にみられ、これを除去し北東から南西方向に走る溝状遺構（SD6）を検出した。南肩部はトレンチ南東隅で検出したが北肩はトレンチ外のため、補足トレンチを北へ延ばして確認し、幅約10m、深さ1mの溝とわかった。堆積土は有機物層が顕著にみられ、ここから遺物が多く出土した。



第16図 調査区配置図
(1:1000)



第17図 4トレンチ西壁断面図 (1:100)



第18図 遺構実測図 (1:200)

第3節 遺物

調査では、遺物が整理箱に6箱出土しており、大半が長岡京期に属し、他に奈良時代のものがわずかにある。そのほとんどが4トレンチで検出した溝(SD6)から出土し、土器類、瓦類の他、多量の木製品がある。以下、出土量の多い土器類、木製品について述べる。

土器類 (第19図-1~16)

土器類では土師器、須恵器の出土量が多く、ついで製塩土器が多い。他に黒色土器が出土しているが小片で量も少ない。

土師器 土師器には、椀・杯・皿・鉢・甕の器形があり他に高杯の破片が認められる。

椀（1・2）は小さく平らな底部と大きく湾曲しながら立ち上がる口縁部からなる。小ぶりなもの(1)があり、口縁部及び内面はヨコナデ、外面は指オサエ痕を残している。(2)は外面全てを丁寧にケズリ、内面はヨコナデである。

杯(3)は、平らな底部とやや外反しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、底部外面は指オサエ痕を残している。

皿（4～6）は、大きく平らな底部と小さく湾曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はヘラケズリである。外面のケズリが口縁部まで及ぶ(4)とそうでない（5・6）がある。なお、(6)の底部外面には「大」の墨書がある。また、(7)も皿の底部と考えられ、外面に「壺」の墨書がある。

鉢(8)は、大きく内湾する体部とハの字に外反する口縁部が残存しており、口縁端部は上部につまみ上げている。口縁部及び内面はヨコナデ、体部外面は指オサエ痕を残し、粘土紐の継ぎ目が観察できる。これは人面墨書土器で、体部外面に大きく目と眉の墨書がある。

甕(9)は丸味を帯びた体部と外方にハの字に開く口縁部が残存している。口縁部はヨコナデ、体部内外面は粗いハケを施す。また所々に煮焚きのための煤が付着している。

須恵器 須恵器には杯蓋・杯・壺の器形があり、他に甕や鉢の体部の破片が認められる。

杯蓋（10～12）はいずれも平らな天井部の上部に偏平なつまみが付くと考えられる。口縁部は屈曲し、端部は下方につまみ出している。口径から大(12)、中(11)、小(10)に分けることができる。口縁部及び天井部内面はロクロナデ、天井部外面はヘラ切り跡を残している。(10)はややかさ高で、(12)は焼け歪みのため変形している。

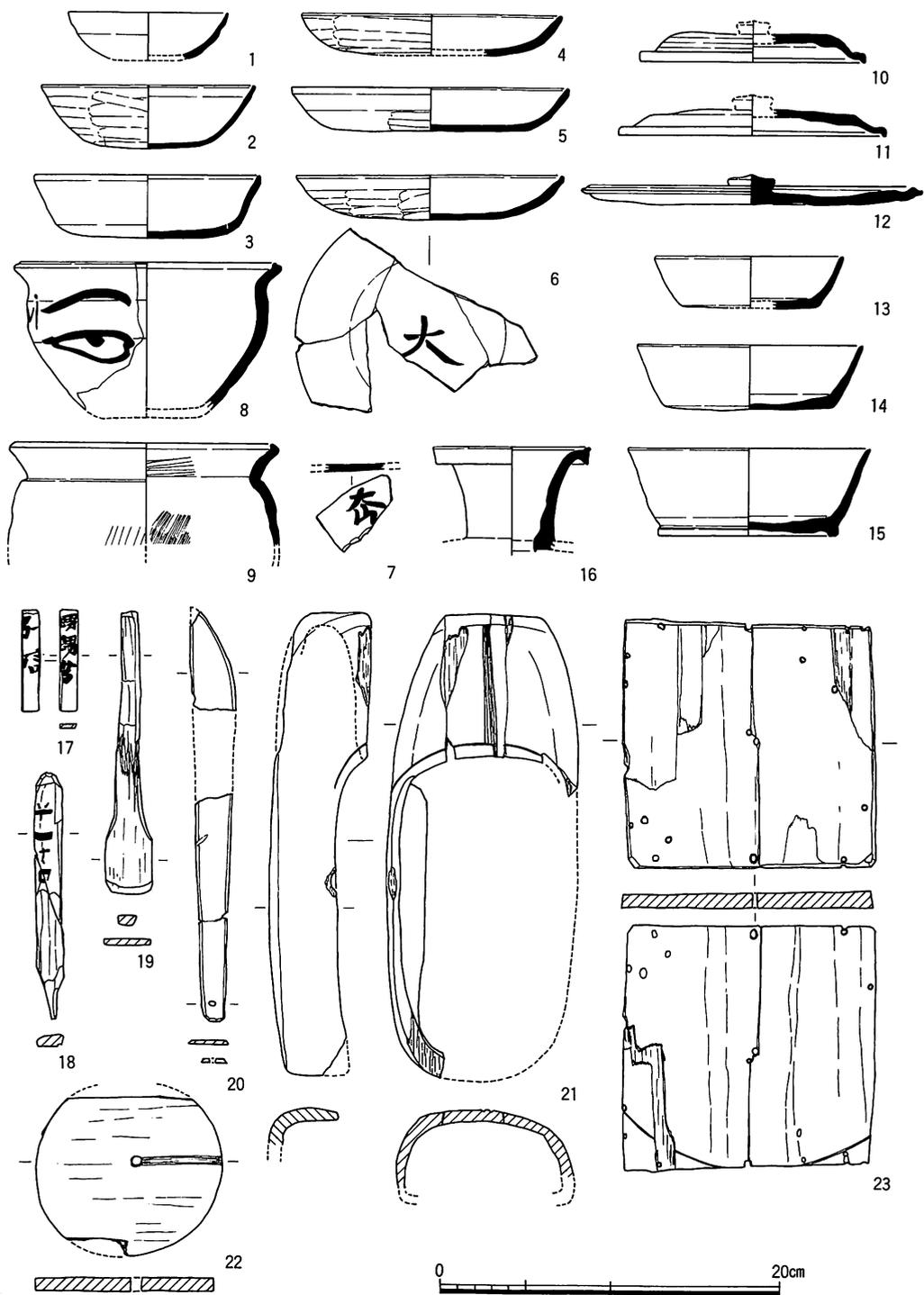
杯（13～15）は高台の付く(15)と付かない（13、14）がある。高台の付かない杯は平らな底部とやや外方に直線的に立ち上がる口縁部からなる。内外面ともロクロナデで、底部外面はヘラ切りの跡を残している。口径の大きい(14)と小さい(13)がある。高台の付く杯(15)は、平らな底部とやや外反しながら立ち上がる口縁部を持ち、低い高台を底部の外端に張り付けている。内外は面ロクロナデで底部外面にはヘラ切り跡がわずかに残っている。

壺(16)は口縁部だけが残存する。口縁はゆるく外反し、端部は上下に拡張して面をつくる。

木製品（第19図-17～23）

出土した木製品はいずれも比較的保存状態がよく、木筒・木履・匙形木器・檜扇など種類も多彩である。他にも用途不明の木製品や加工木片などが多数存在する。

木筒（17・18）木筒は2点出土している。(17)は薄い板材を用いており、下端部以外は欠損している。墨書は表裏に認められ、比較的明瞭である。(18)はやや厚手で調整の粗い板材



第19图 S D 6 出土遗物实测图

を用いている。上部は圭頭状にケズリ、下部は左右からけずり込み先を鋭く尖らせている。表面上半は細かくけずってなめらかに調整し、ここに墨書しているが不明瞭である。

〔釈文〕	(18)		(17)
	「□	・	・
	□	×	×
	□	子	□
	□」	信」	□
			□」

● 釈文の記載形式は『木簡研究』に準じる。

匙形木器(19)薄手の板材を用いている。身の先端はほぼ直線的で片刃の鑿状にけずっている。頸部は左右から大きくけずり込んで作り出し、しだいに直すぐな柄へと移行する。

檜扇(20)檜扇の骨の1つである。柁目のきわめて薄い板材を用いている。本は両隅を切りおとしており、中央に要の孔が1つあいている。末に向かうほど巾は広くなり、端は片方を大きく弧状に切りおとしている。その形状から扇の端に用いられた骨である。

木履(21)被甲部と側壁の一方が残存している。瓜先木口は平坦である。被甲部の先にはケドリの跡があり、内縁に沿って刻線を施す。被甲部中央には刻線が2本刻まれている。

用途不明木製品 (22・23) (22)は板材を円形に切り抜いたもので、ほぼ中央に小さな孔がうがたれている。(23)は、板材を方形に加工したものである。板の中央と端に表面から裏面に向って多数の木クギを打ち込んでいる。裏面には円弧のケドリの跡がある。

第4節 ま と め

当調査では、遺構の確認、残存状況の把握を主眼におき、上述したような遺構・遺物を検出した。1～3トレンチ全域に焼灰・焼土が散布、あるいはピット状・溝状に堆積する部分も認められた。このような状況は外環状線内調査地にもみられ、類似した堆積が三・四町に広く存在していることが明らかとなった。これをもって川原寺寺域を当町にまで広げるには当調査結果だけでは不十分で、今後の周辺での調査を待ちたい。

4トレンチは他のトレンチとは全く異なり溝状遺構を検出し、有機物層の堆積中から多くの土器類・木器類を出土した。木簡2点は荷札と習書であるが、他に墨書土器が数片出土しており、外環状線に伴う調査を含め今後検討する必要がある。

註1 鳥羽離宮跡調査研究所編『日本専売公社工場用地内埋蔵文化財発掘調査概報』1977年。

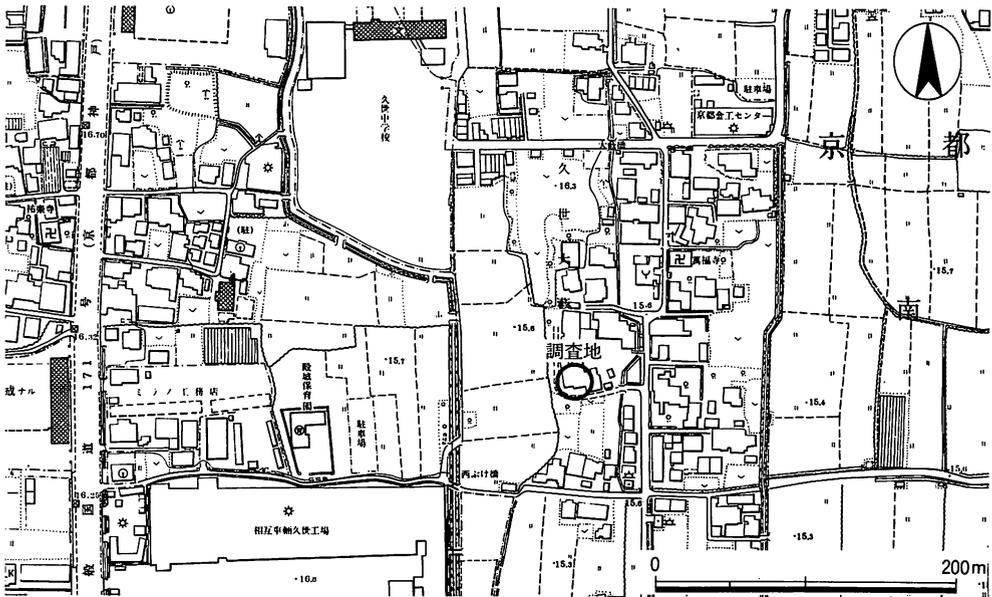
註2 京都市埋蔵文化財研究所編『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和60年度』1988年。

第IV章 大藪遺跡

第1節 調査経過

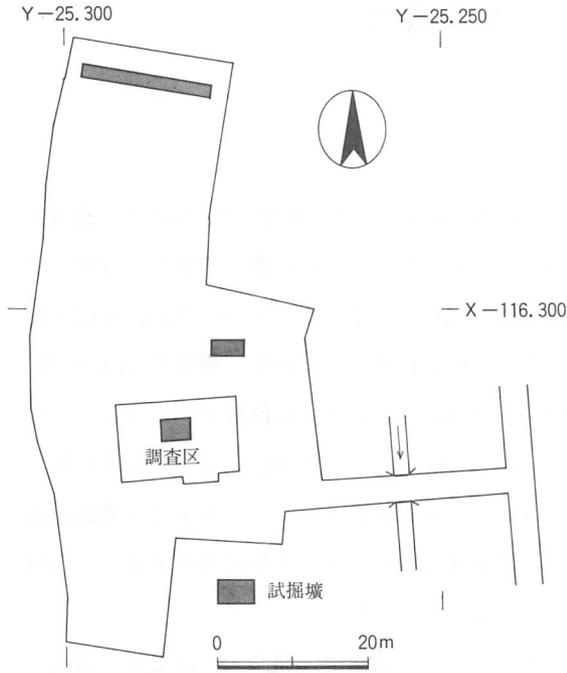
京都市南区久世大藪町291番地が宅地として再開発されることになった。当地は大藪遺跡に該当するため、試掘調査を実施し遺構の状況を観察した。その結果、中世から近世に至る建物基礎や整地層を検出したものの、開発が木造住宅を主体としているため、基礎工事による地下の遺構への影響は比較的少ないことが確認出来た。しかし、周辺での既存の調査成果から判断して、弥生時代から古墳時代の集落跡が存在する可能性が高いこと、また、当地が中世荘園「久世荘」に比定されていることに加えて、「城屋敷」という小字名を残していることから、中世集落の重要遺構が存在している可能性が高く、わずかでも発掘調査を実施する必要性を認めた。そこで、京都市埋蔵文化財センターと原因者が協議し、当研究所が委託を受けて遺構の確認調査を実施する運びとなった。

調査は試掘の結果を受け、遺構の保存状況のよい対象地南部に調査区を設定して実施した。その結果、当初予想した弥生時代から古墳時代の集落跡は認め得なかったものの、中世から近世にわたる集落の一部を検出することができた。



第20図 調査位置図 (1:5000)

第2節 遺構

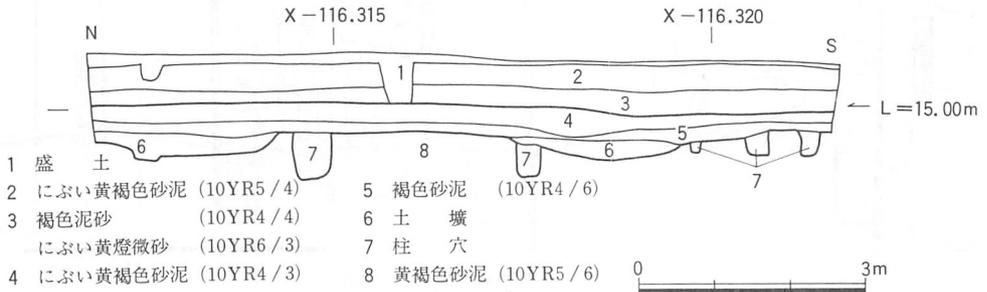


第21図 調査区配置図 (1:1000)

調査区内には全体に5~10cmの盛土があり、以下地山に至るまでに大まかに4つの整地層が認められる。整地の最上層は、にぶい黄褐色砂泥層で約20~30cmの厚さがあり、既存建物がこの上に存在していた。2層目は20~30cmの厚さで褐色砂泥層と、にぶい黄橙色微砂層を交互に積み重ねた、いわゆる版築である。版築の各層はそれぞれ厚さ0.5~3cmで少ない所で6層、多い所では10層以上が密に積み上げられ、非常に硬くしまっている。江戸時代以降の整地であると考えられる。3層目は主に、にぶい黄褐色砂泥層からなり、

20~30cmの厚さがある。今回の調査はこの層の上面から開始し、ここでは江戸時代中期(第II期)の遺構を検出した。4層目は主に、褐色砂泥層からなり約10~20cmの厚さがある。この3層目と4層目は遺物の出土状況から、ほぼ同時期の整地であると考えられる。これら整地層の下が黄褐色砂泥層の地山で、この上面で鎌倉時代後期から江戸時代前期(第I期)の遺構群を検出した。

第I期の遺構(第26図) I期の遺構としては掘立柱建物・柱穴・井戸・土塙・溝などを検出した。遺構は主に調査区の東部から南部にかけて多く分布し重複する遺構も多い。またその大半は、主軸方位がほぼN-6°-Eである。以下、主な遺構について述べる。



第22図 東壁断面図 (1:100)

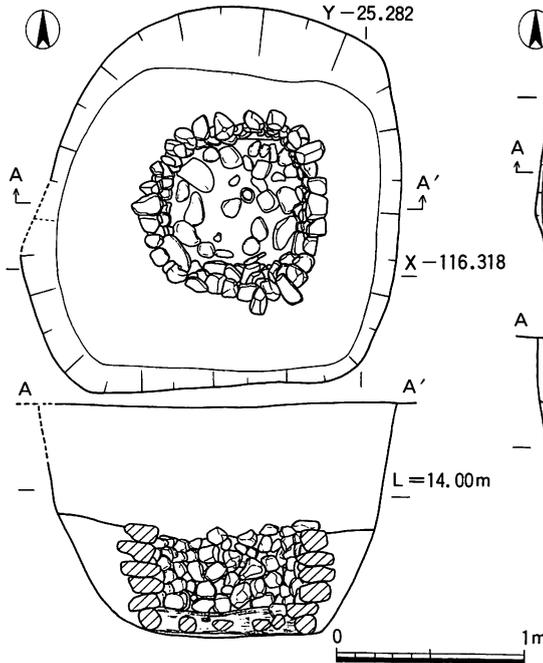
SB1 東西2間以上、南北1間以上の建物で北及び東は調査区外に伸びる。柱掘形は、一辺約40cmの方形で、深さ20~60cmであり、柱間は約2mである。柱掘形には底に石を入れているものがあり、また一部に柱根が残存している。

SB2 東西3間・南北2間の東西建物である。柱掘形は径30~40cmの不定形で深さ10~30cmである。柱間は、1.6~2.1mと不揃いであるが、東西方向の中央間がやや狭い傾向にある。柱掘形には底に石を入れたものがあり、また一部に柱根が残存している。

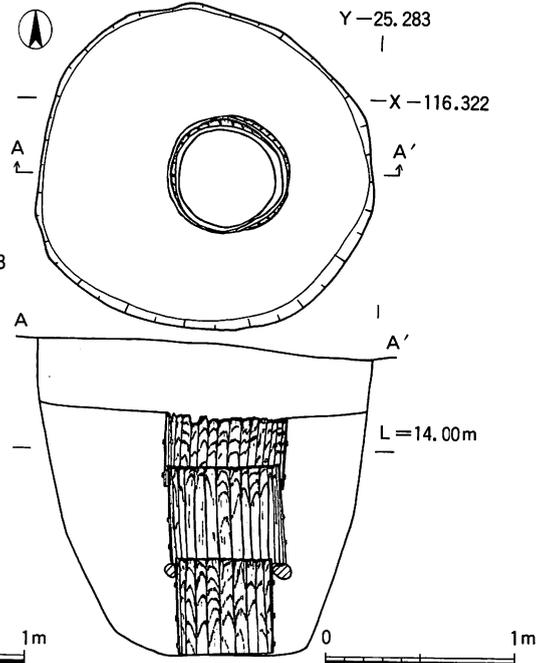
SB3 東西4間以上、南北3間以上の建物で南及び東は調査区外に伸びる。柱掘形は20×30cmの長方形を呈するものが多く、深さは20~40cmである。柱間は1.2~1.5mとやや不揃いで北側は建て替えと考えられる重複が認められる。柱掘形には底に石を入れたものがある。

SE1 掘形は一辺約2mのやや歪んだ隅丸方形で、深さは検出面より約1.3mである。井戸枠は円形の石積みで直径75cmを測るが、底部に直径約15cm、長さ90cmの丸太を井桁に組み合せ、その上に径15~20cmの河原石を組み上げている。井戸枠は底部より約50cmが残存しているのみで、上部は廃絶時に崩されたと思われ、井戸内で多量の石材を認めた。

SE2 掘形は直径1.8mの円形で、深さは検出面より約1.6mである。井戸枠には、桶を3段に積み上げて利用している。それぞれの桶は下段直径50cm高さ50cm、中段直径60cm高



第23図 SE1実測図 (1:40)



第24図 SE2実測図 (1:40)

さ50cm、上段は直径65cm高さ40cmが残存しており、上段ほど径の大きな桶を用いている。

SE3 堀形は東西1.6m、南北1.3mのやや変形の長方形で、深さは検出面より1.3mである。井戸枠は廃絶時に抜き取られたと考えられ、底部に長径1m、短径80cm、深さ10cmの楕円形を呈した枠の据付の痕跡が残っている。

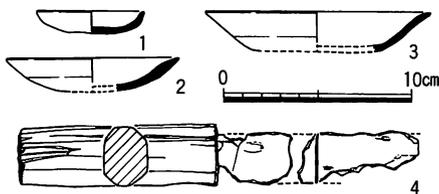
第II期の遺構（第26図）第II期の遺構は建物の礎石・根石の他に、土壇・溝をわずかに検出したにすぎない。礎石・根石などの柱跡は調査区中央付近で東西方向に一列に並んでおり、他の柱跡をも含めて一棟の建物が想定できるが説明は不明である。なお、この柱列の方位は、第I期の遺構とほぼ同じ傾きを示している。

第3節 遺物

今回出土した遺物は大半が土器類で他に金属器・木器などがわずかにある。

第I期の遺物 第I期の遺物は井戸、土壇などから土器類が出土しているが、いずれも小片で量も少ない。第I期の前半（鎌倉時代後期から室町時代中期）の土器類は、供膳形態として土師器（皿）、瓦器（椀）、調理形態として瓦器（鍋・釜）や、いわゆる東播系陶器（鉢）、貯蔵形態として常滑（甕）や、東播系陶器（甕）によって構成されている。第I期の後半（室町時代後期から江戸時代初期）には、調理具や貯蔵具に東播系陶器がみられなくなり、かわって、備前（鉢・甕）や、信楽（鉢・甕）が増加している。また、第I期を通して輸入陶磁器の出土量が少ないのは特徴的である。第25図（1～3）はSE2から出土した土師器（皿）である。大中小の3種が認められる。土器類以外には金属器（包丁・杯）・銭貨・漆器（椀）、木製品（櫛・籠）などが出土している。第25図(4)はSE1から出土した包丁である。柄は木製で鉄製の刃部をはめ込んでいる。

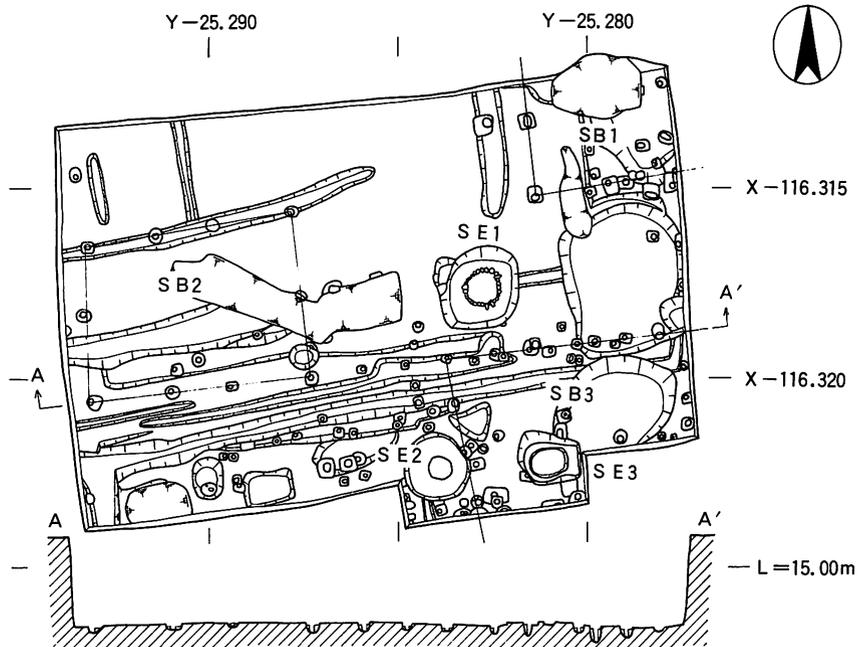
第II期の遺物 第II期の遺物は主に、にぶい黄褐色砂泥層や褐色砂泥層などの整地層から出土している。そのうち土器類は土師器に加えて唐津・伊万里などの国産陶磁器が多く出土しており、その他に産地不明の焼き物も多く、多彩な様相を呈している。土器以外には金属器（キセル）も出土している。今回出土した遺物は、いずれも日常生活に密接に関



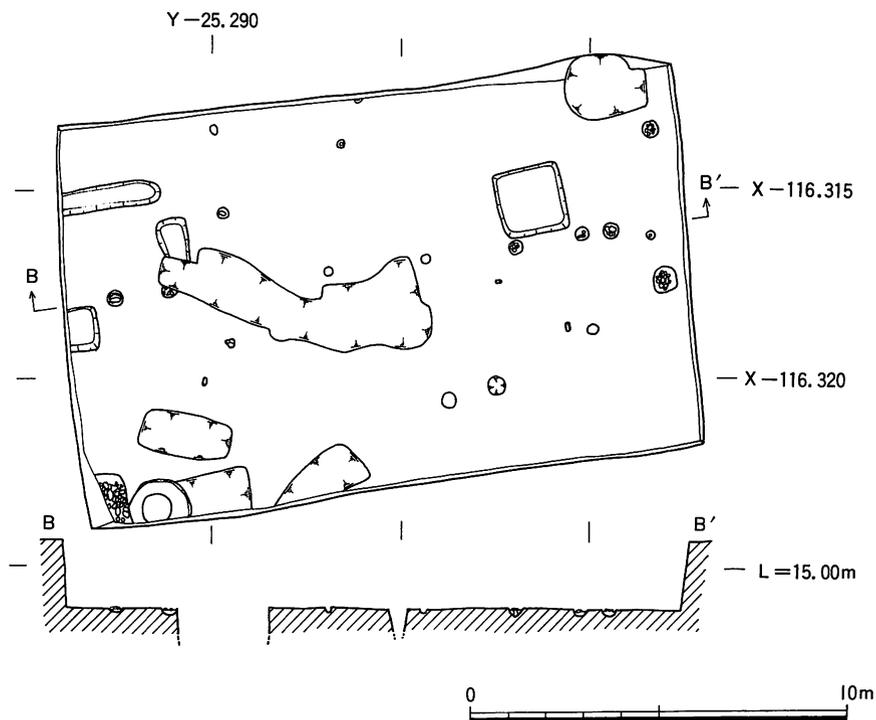
第25図 出土遺物実測図

連したものであり、検出した遺構の性格をよく反映していると考えられる。また、瓦類の出土が両期を通じてきわめて少ないことは、検出した建物の上部構造を考える上で興味深い事実であると言えよう。

第Ⅰ期



第Ⅱ期

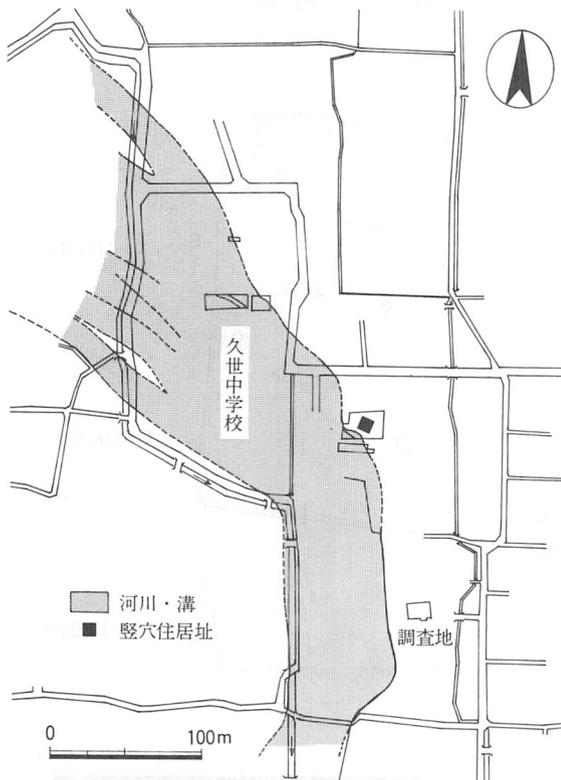


第26図 遺構実測図 (1:200)

第4節 まとめ

今回の調査では二つの点に重点を置いた。その第1点は弥生時代から古墳時代の集落跡の確認であった。この時期から奈良時代にかけて調査地北西の久世中学校付近には、かなり大規模な河川（第27図）があり、これが今回の調査地のすぐ西側を南流していることがこれまでの調査で明らかになっている。それは、現在でも調査地とその西隣の水田面に約1mの段差があることからうかがい知ることができる。集落跡はこの旧河川の自然堤防上に点々と営まれていたと考えており、当地はその可能性がきわめて高い地点であった。しかし、今回の調査では黄褐色の安定した土層の堆積は認められたものの、集落の存在を示す痕跡は認めることができなかった。ただ、調査区がきわめて限定されていたこともあり、今後の調査成果に期待したい。

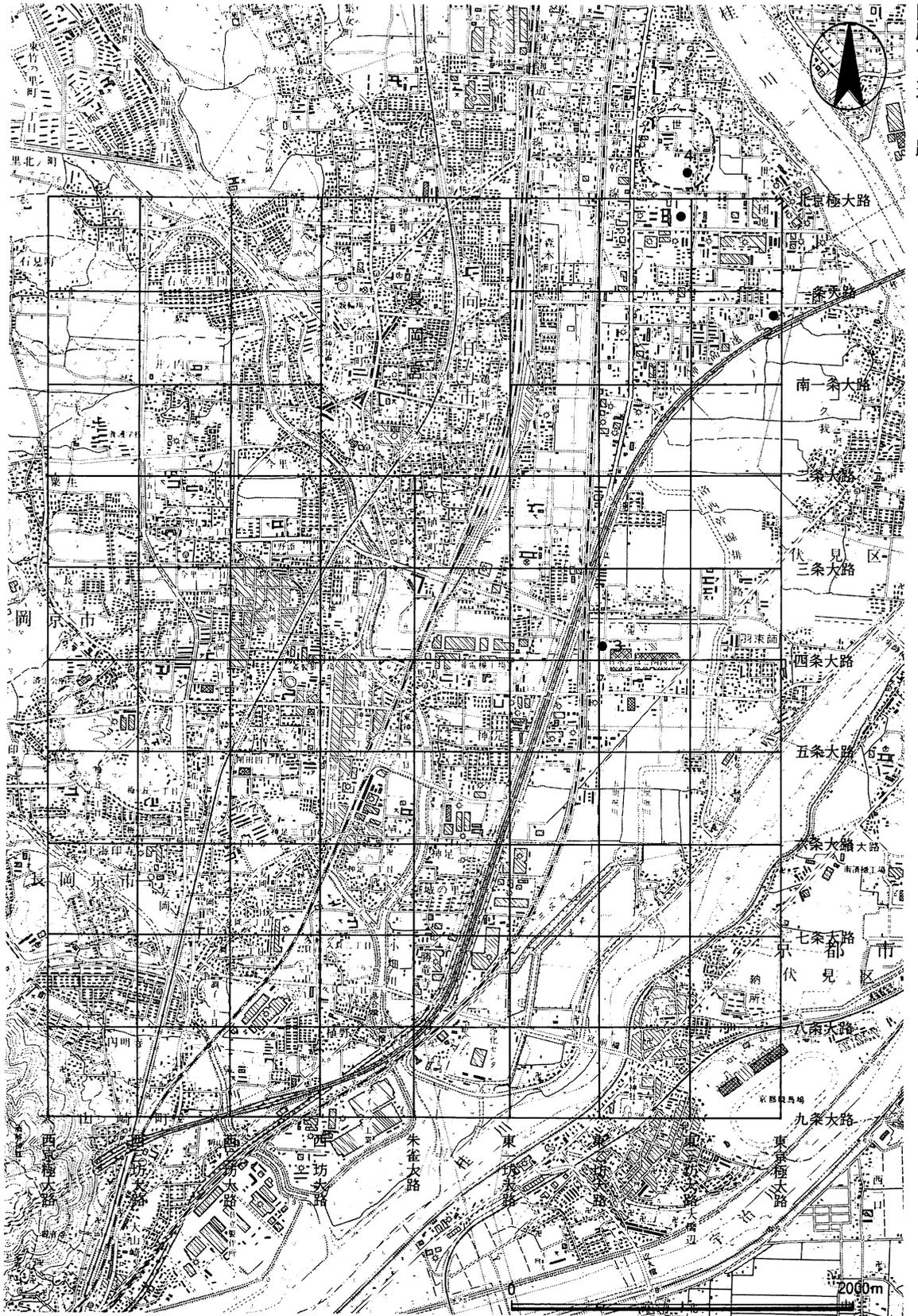
第二点は中世集落の確認であったが、この点には大きな成果があった。ただ、当地に残る「城屋敷」という小字名から想像されるような大規模な建物跡は認め得なかった。しか



第27図 旧河川復元図 (1:5000)

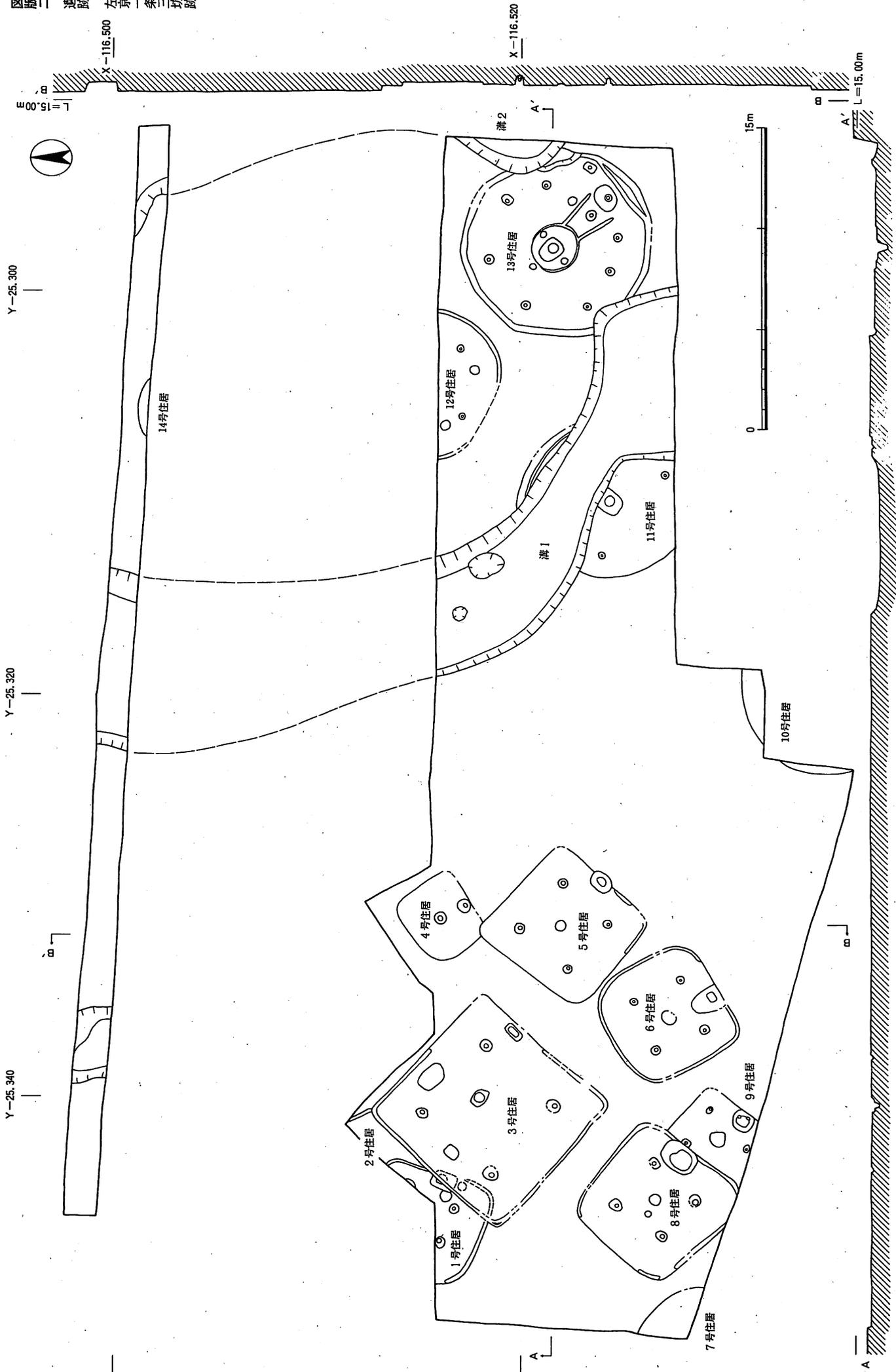
し、小規模ではあるが建物・井戸・溝などによって構成された中世集落の様子をよく伝えている。これらの遺構は何回かの造り替えが認められ、また、近世に入っても整地を繰り返しながら集落が営まれており当地区が中世以来、連綿と居住空間であったことを物語っている。そして、検出した遺構の方位がほぼ同一の方向を示していることは、そこに何らかの計画性があったことが想定できる。ただし、この方向のふれは当地に残る条里のものとは異なっており、この点は今後の調査の課題として残っている。いずれにせよ当地一帯は今後より綿密な調査を必要とする地区であると言えよう。

圖 版



調査地点図

图版二 遺跡 左京一条二坊跡



遺構実測図 (弥生-古墳時代 1:200)

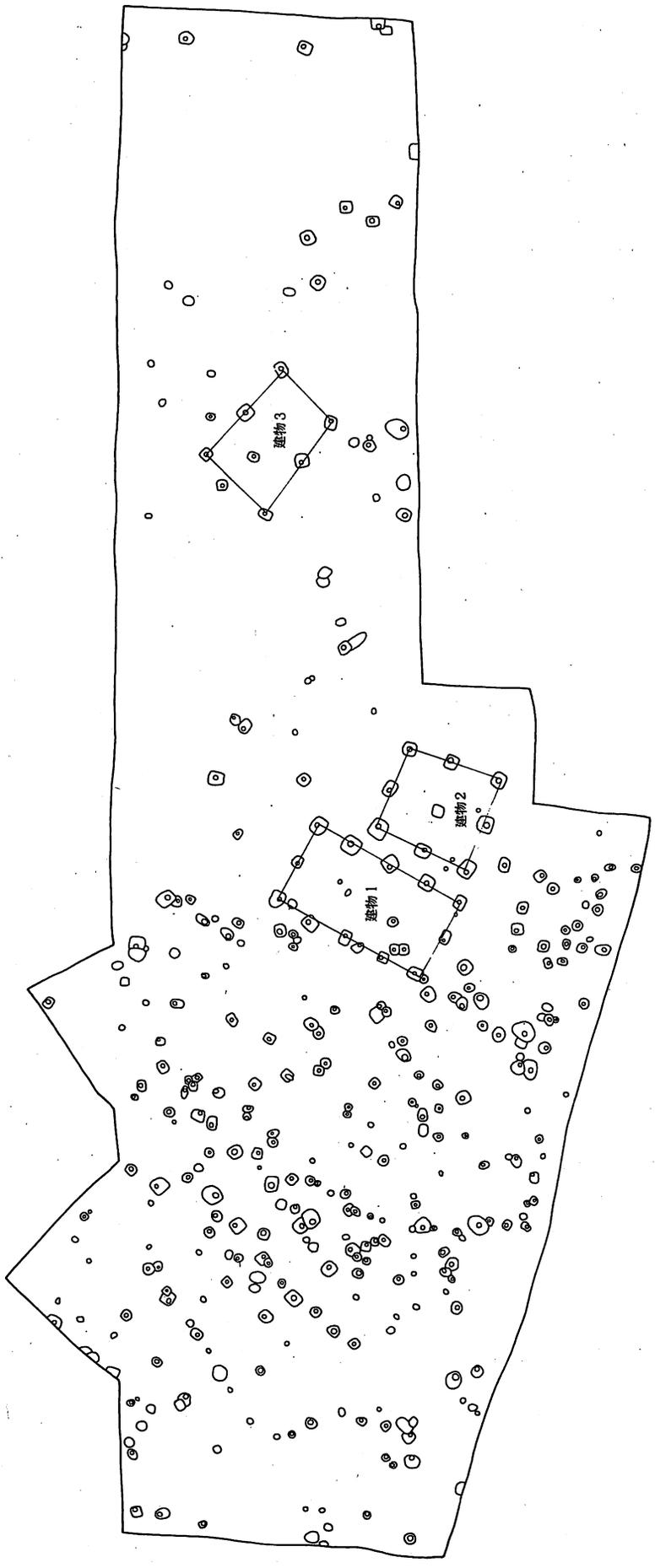
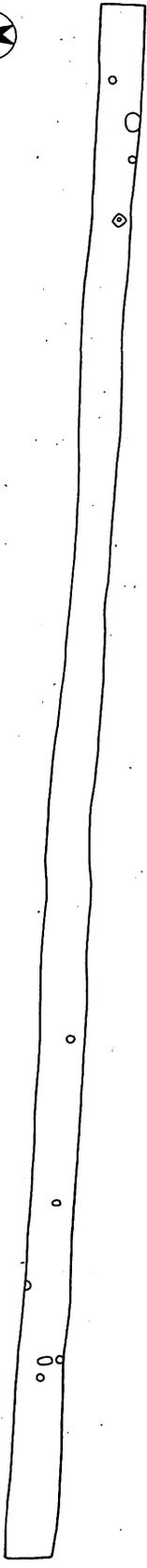
X-116.500

X-116.520

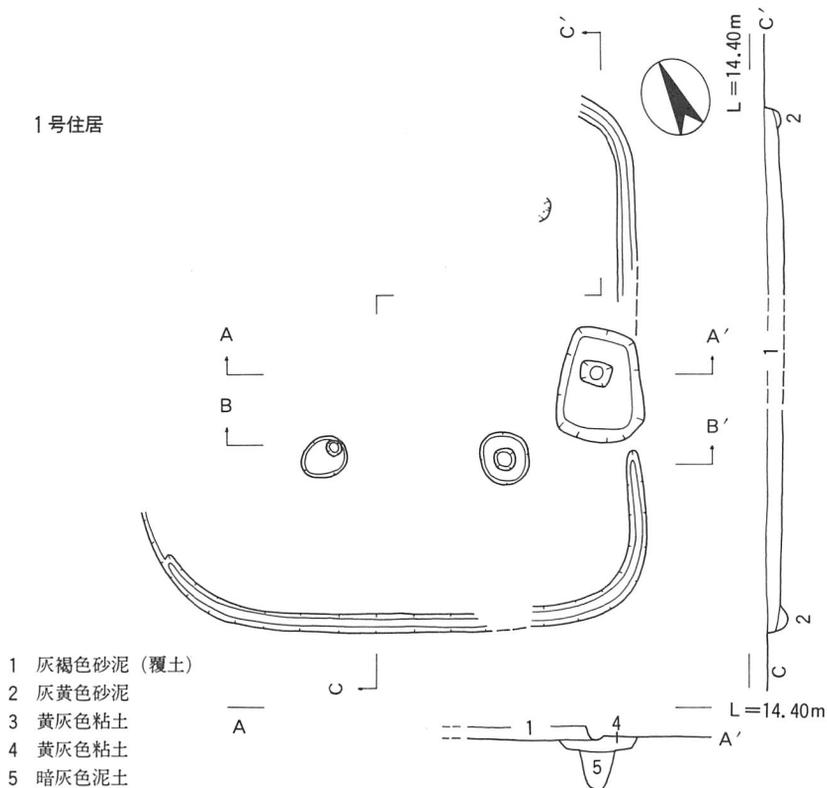
Y-25.300

Y-25.320

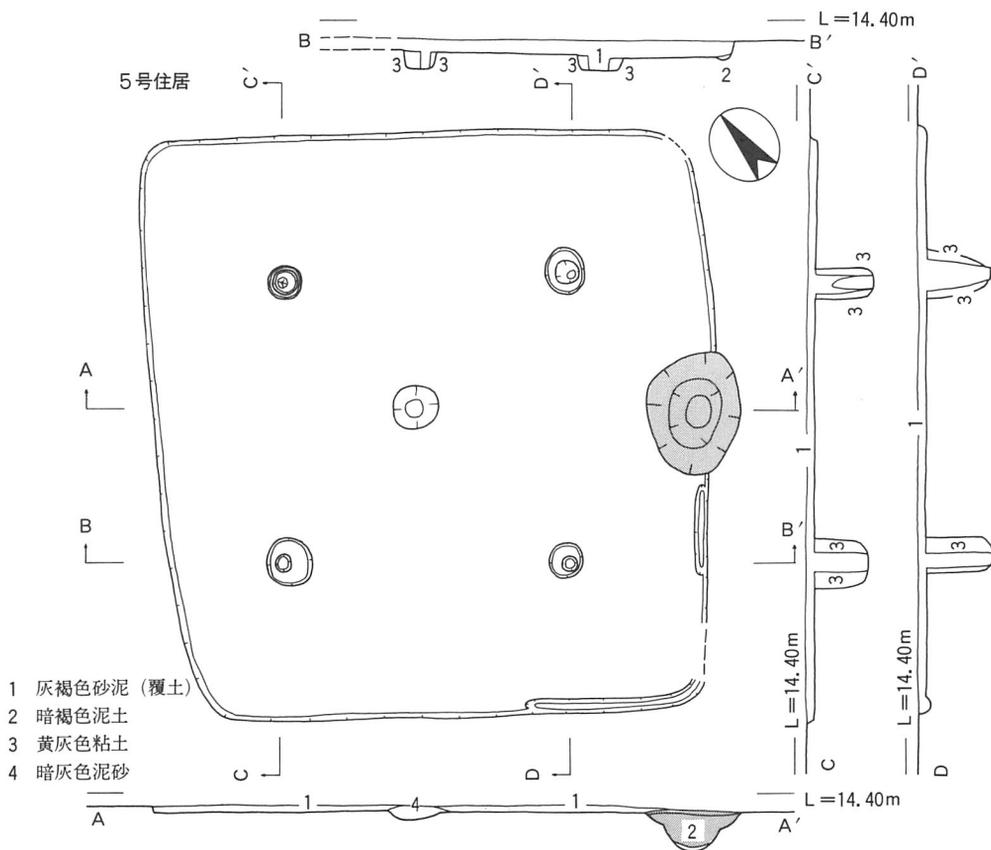
Y-25.340



1号住居



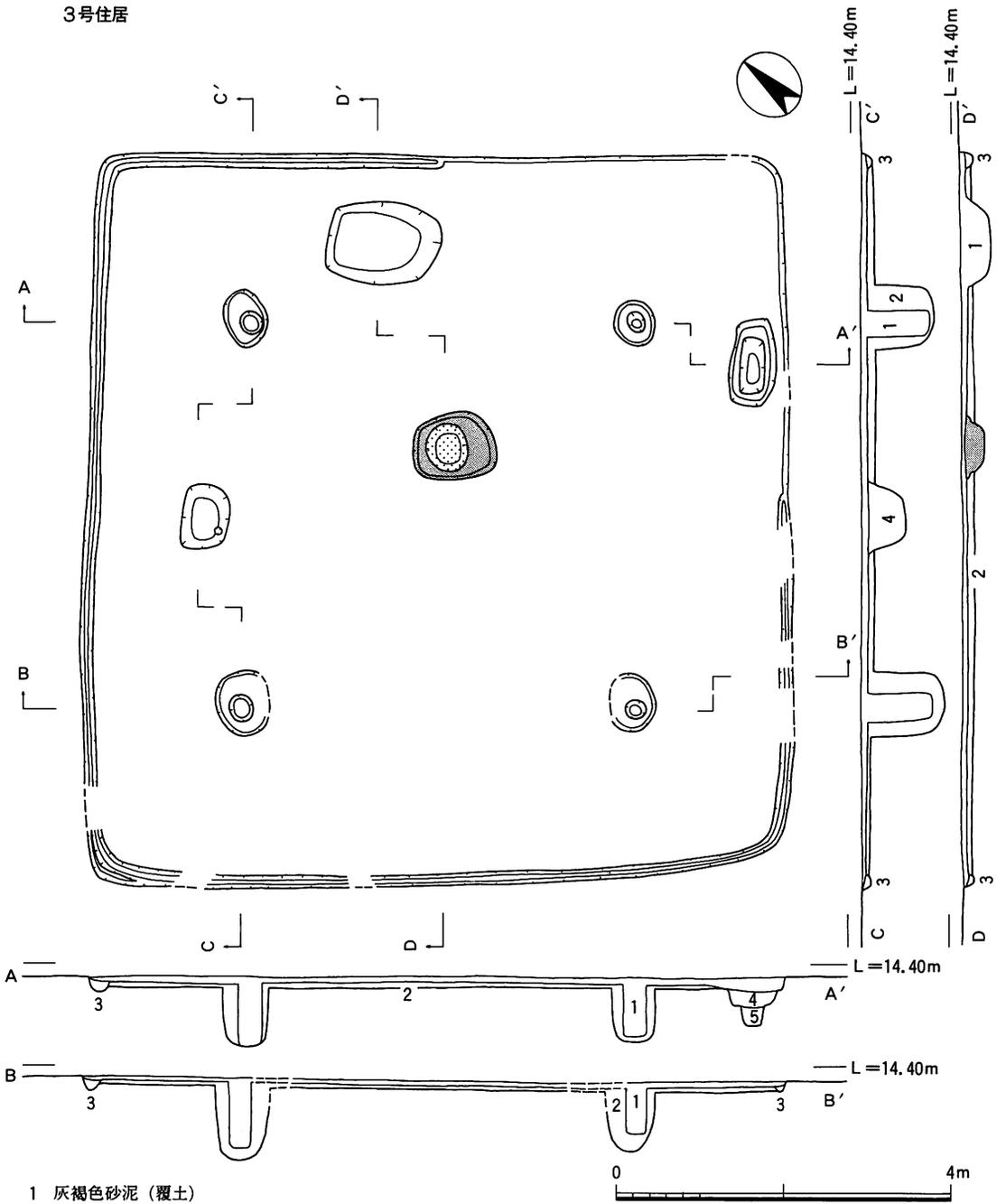
5号住居



遺構実測図 (1:80)



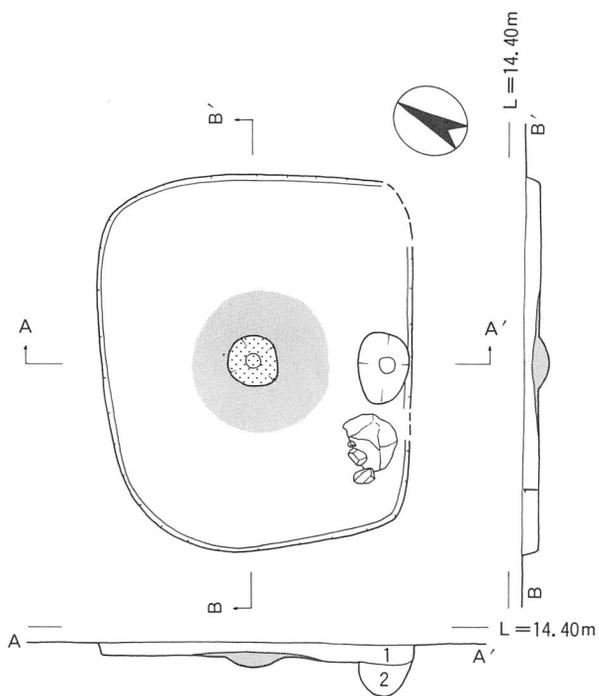
3号住居



- 1 灰褐色砂泥(覆土)
- 2 暗褐色粘土(粘床土)
- 3 灰黄色砂泥
- 4 暗褐色泥砂
- 5 灰褐色泥砂

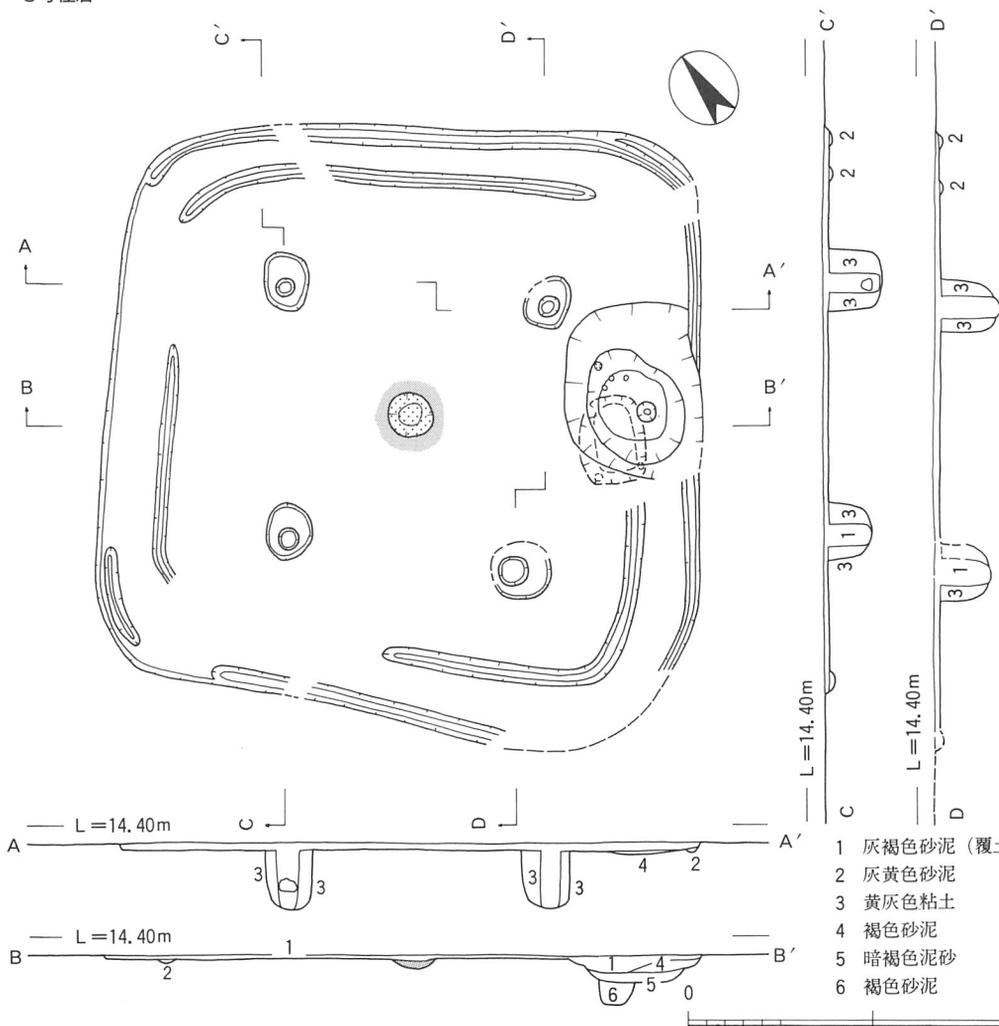
アミ目は粗が焼面, 密が炭層を表す。

4号住居



- 1 灰褐色砂泥 (覆土)
- 2 暗褐色砂泥

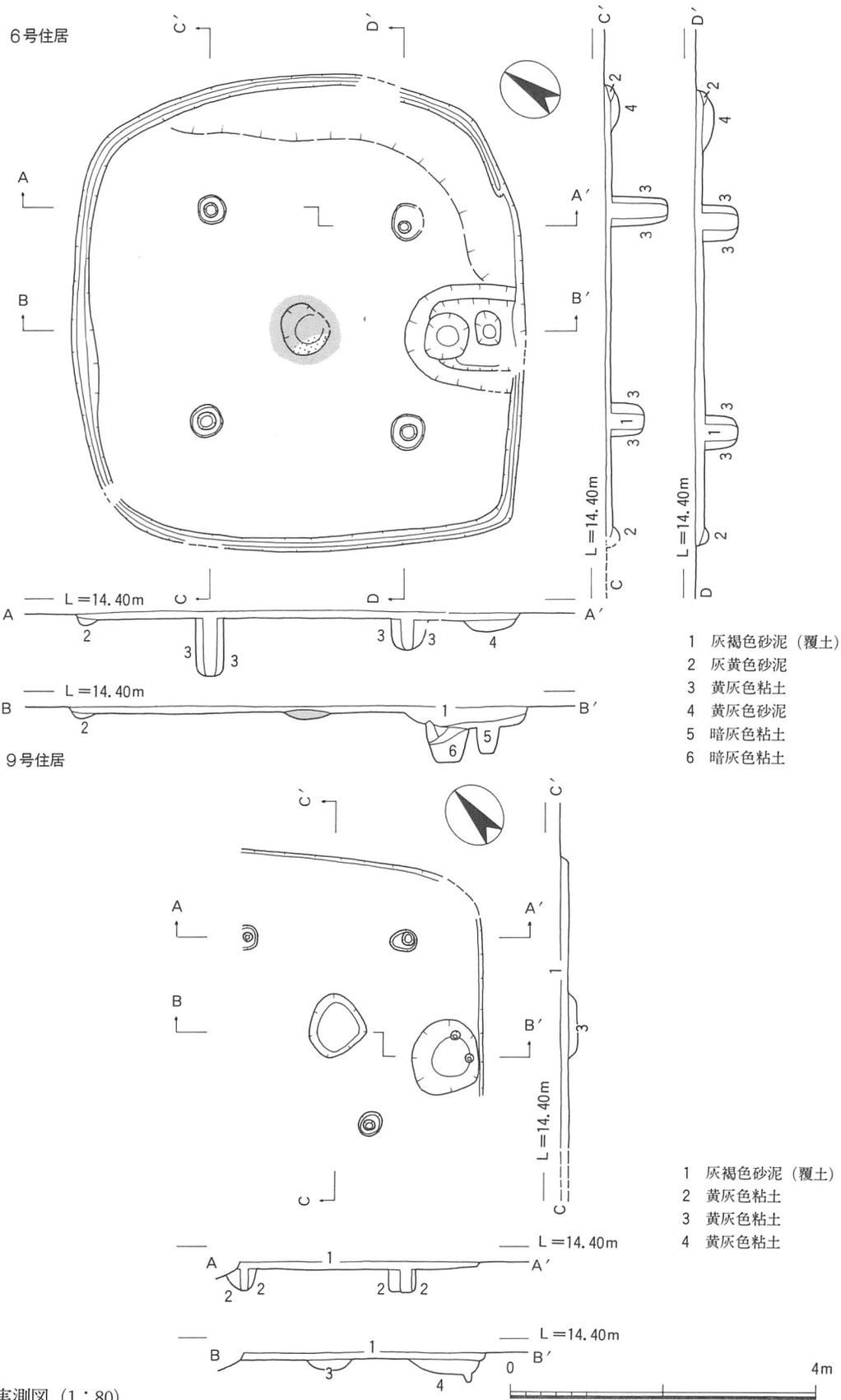
8号住居



- 1 灰褐色砂泥 (覆土)
- 2 灰黄色砂泥
- 3 黄灰色粘土
- 4 褐色砂泥
- 5 暗褐色泥砂
- 6 褐色砂泥

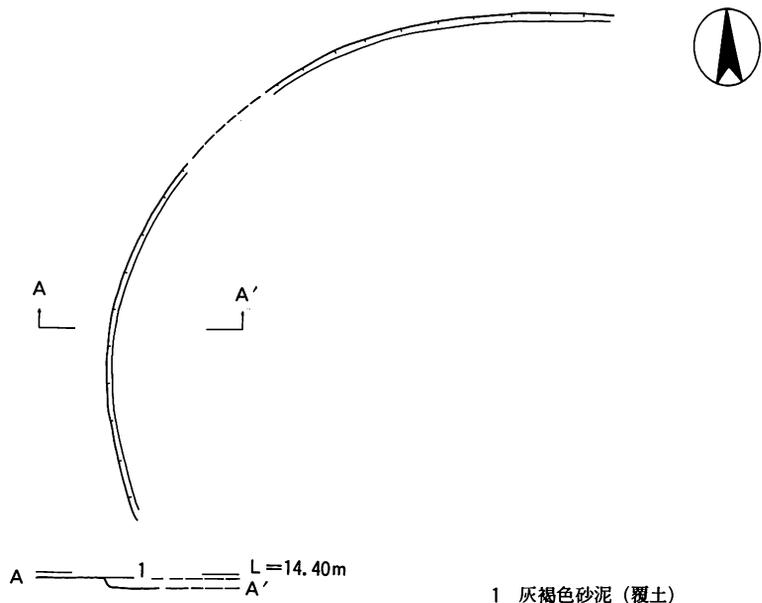
4m

遺構実測図 (1:80)

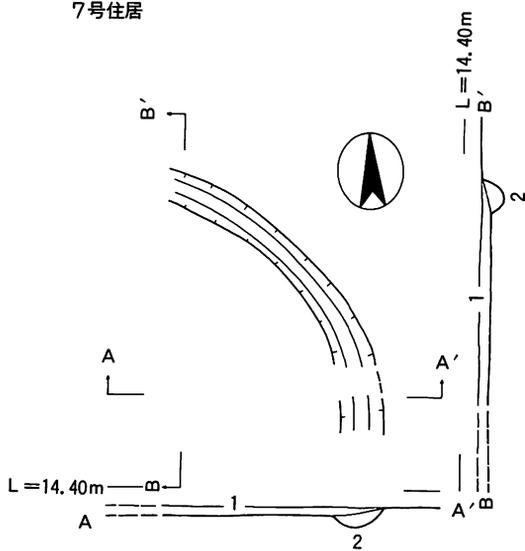


遺構実測図 (1:80)

10号住居

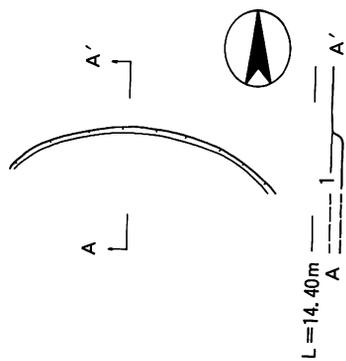


7号住居



- 1 灰褐色砂泥 (覆土)
- 2 灰黄色砂泥

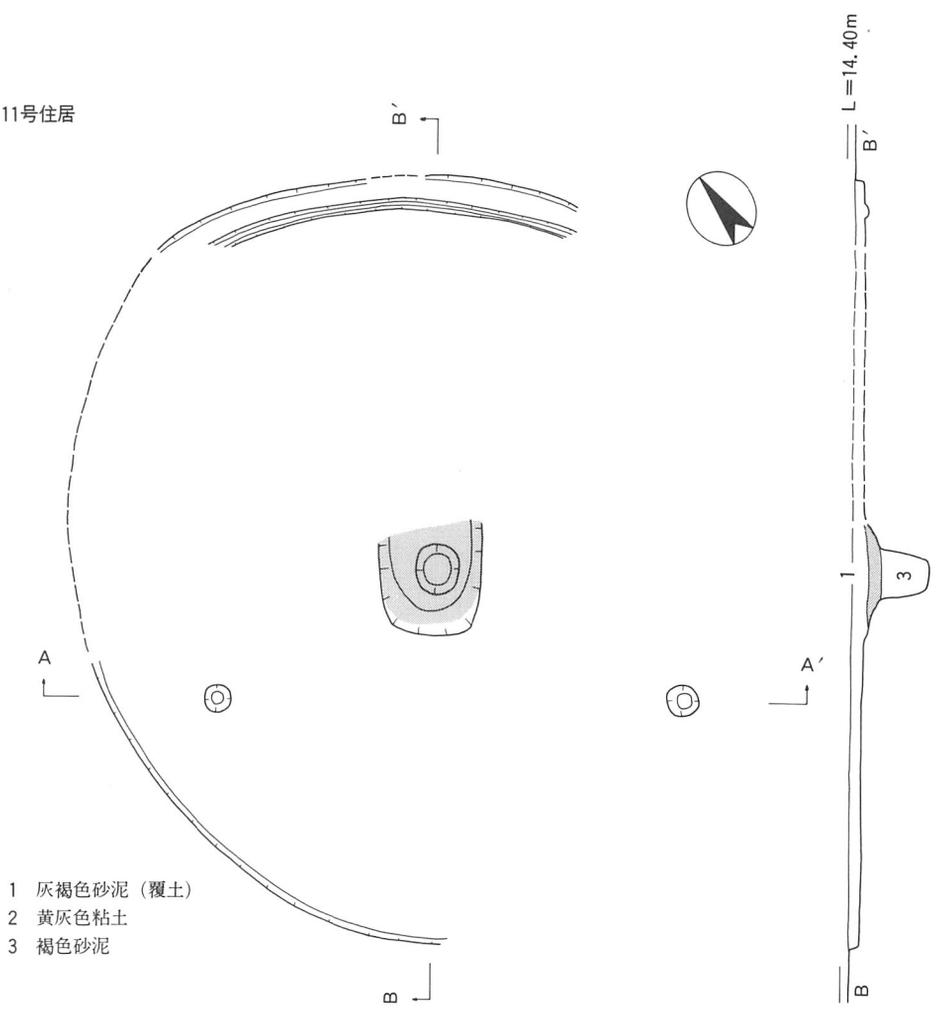
14号住居



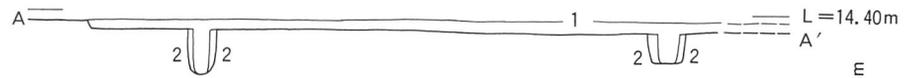
- 1 灰褐色砂泥 (覆土)



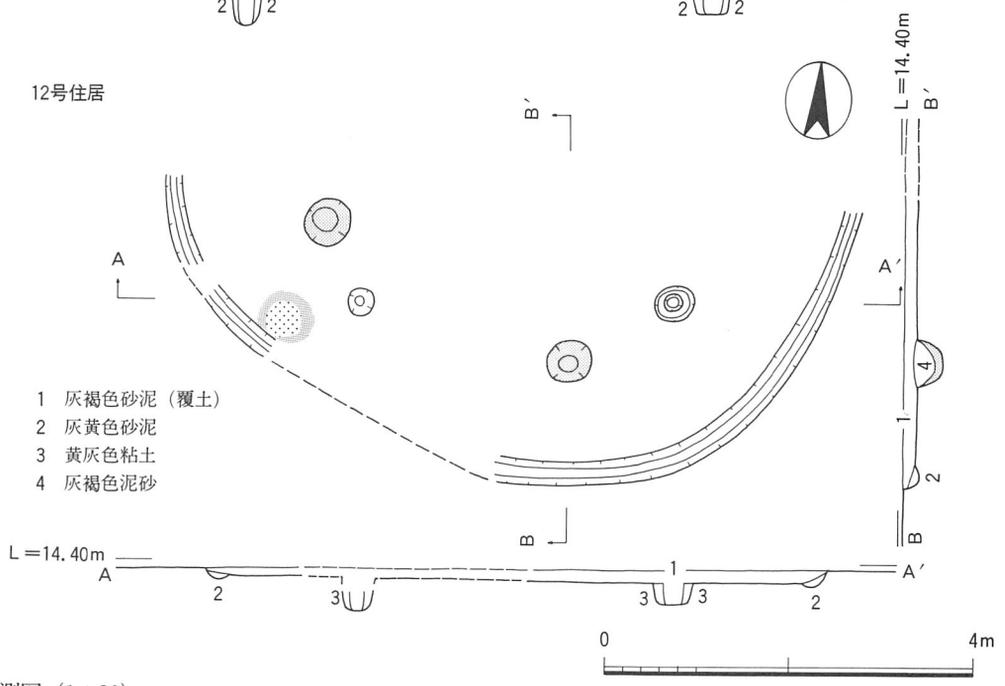
11号住居



- 1 灰褐色砂泥 (覆土)
- 2 黄灰色粘土
- 3 褐色砂泥



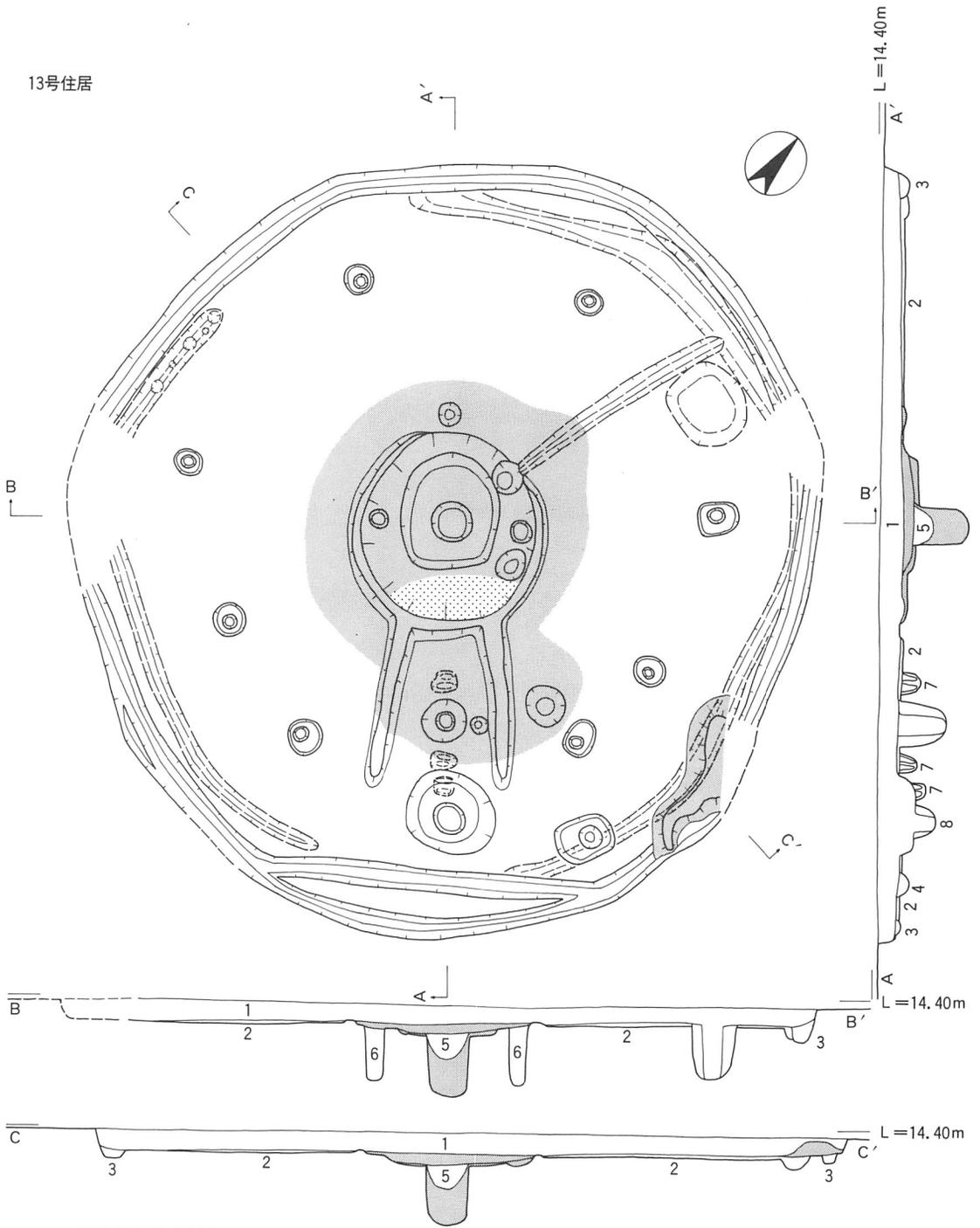
12号住居



- 1 灰褐色砂泥 (覆土)
- 2 灰黄色砂泥
- 3 黄灰色粘土
- 4 灰褐色泥砂

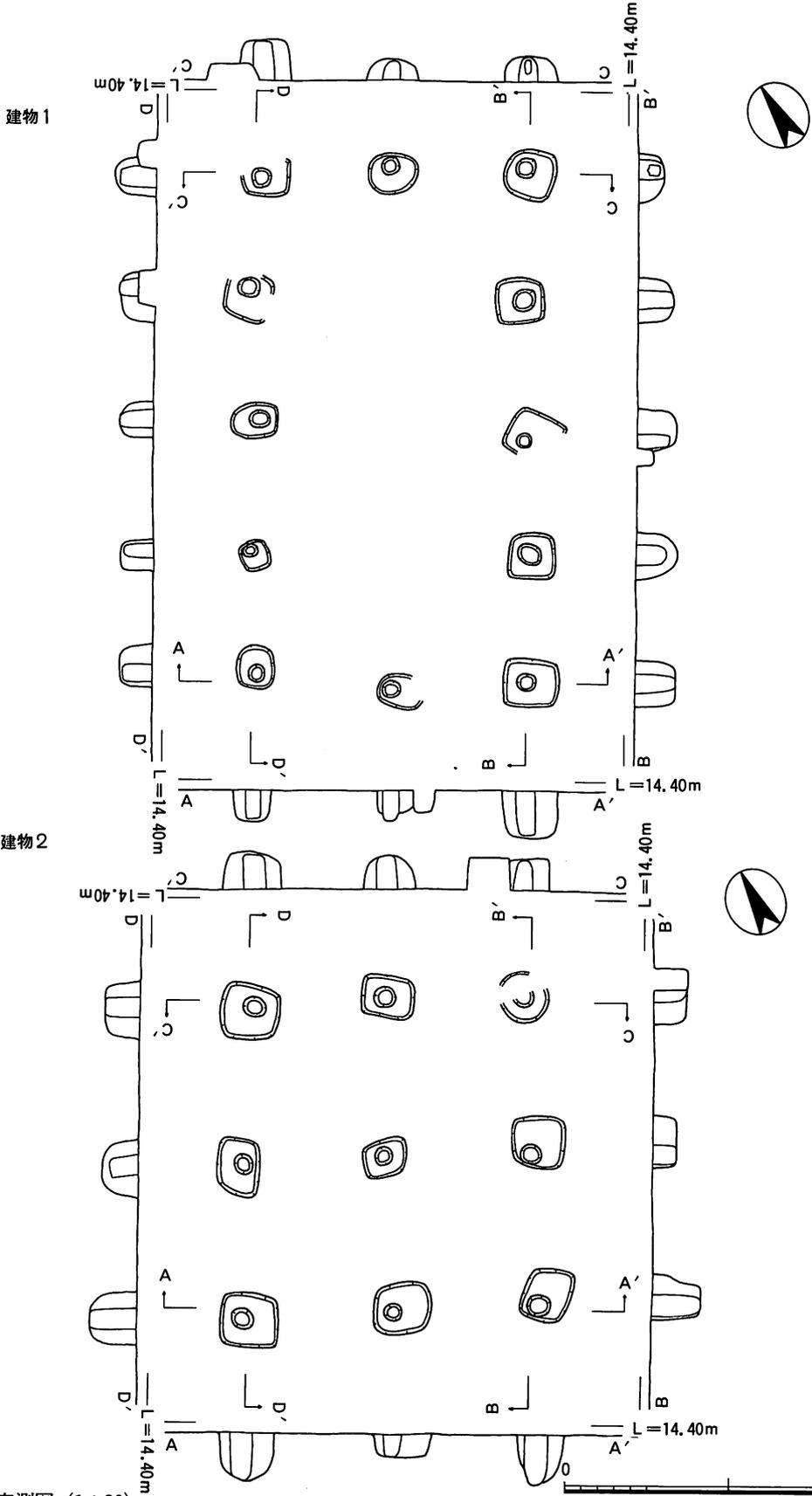
遺構実測図 (1:80)

13号住居



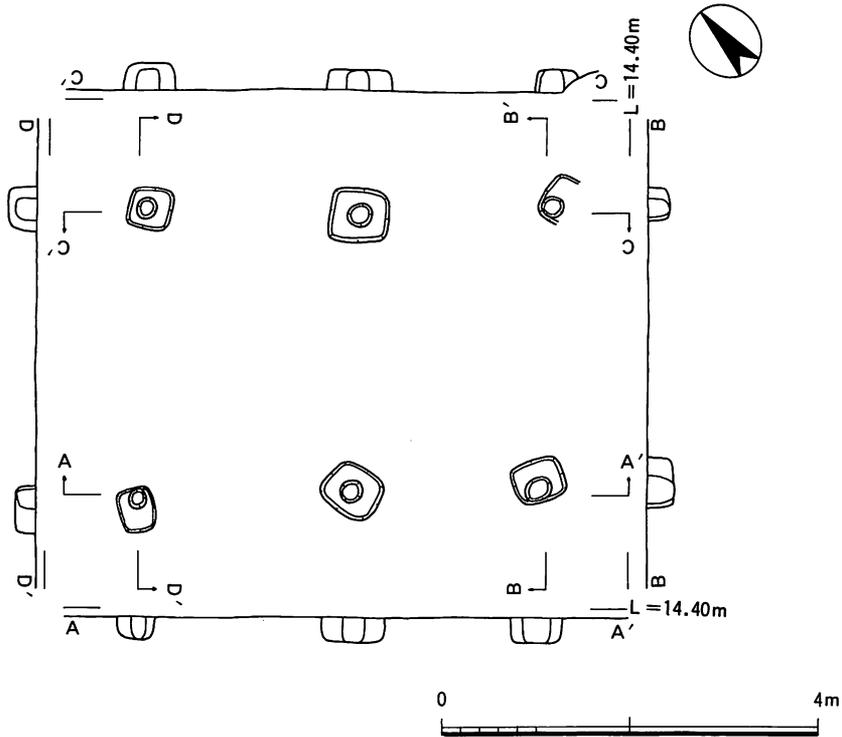
- 1 灰褐色砂泥 (覆土)
- 2 暗褐色粘土 (貼床土)
- 3 灰黄色砂泥
- 4 暗灰色砂泥
- 5 灰色粘土
- 6 灰色泥砂
- 7 灰褐色砂泥
- 8 黄灰色粘土

遺構実測図 (1:80)



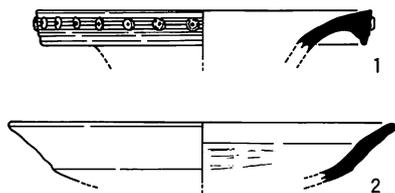
遺構実測図 (1:80)

建物3

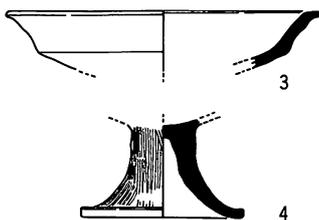


遺構実測図 (1 : 80)

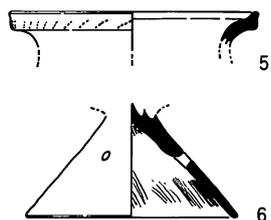
1号住居



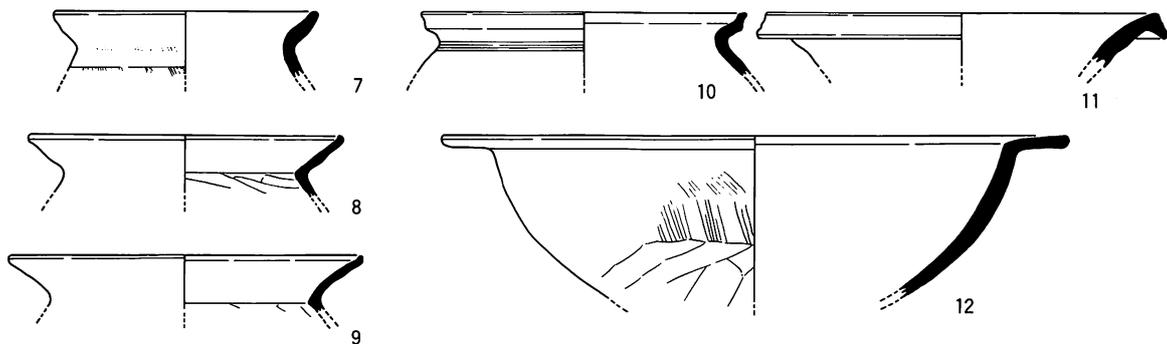
4号住居



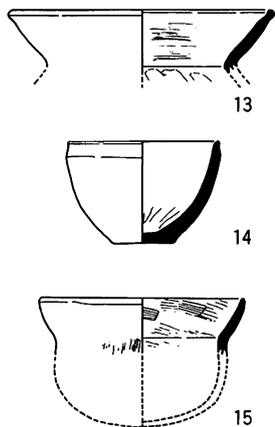
5号住居



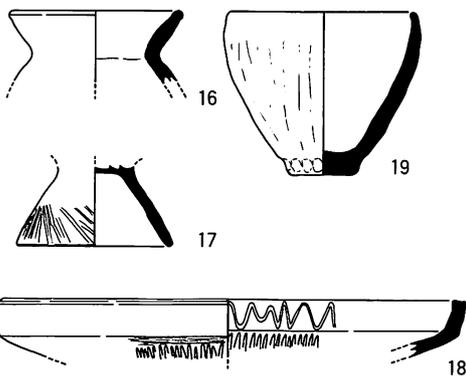
3号住居



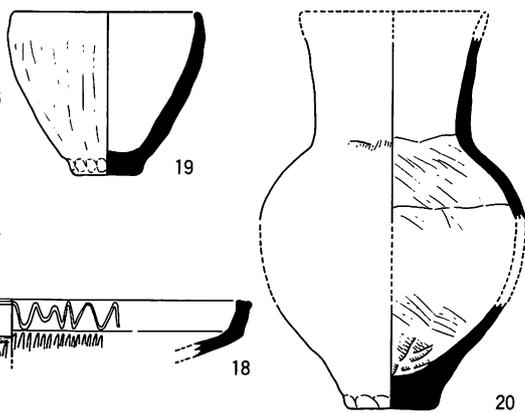
8号住居



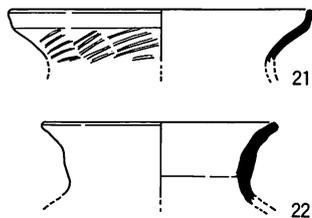
7号住居



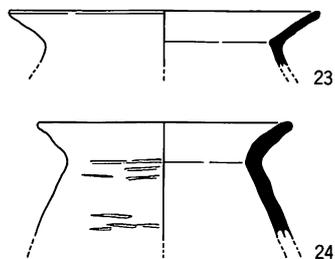
6号住居



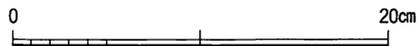
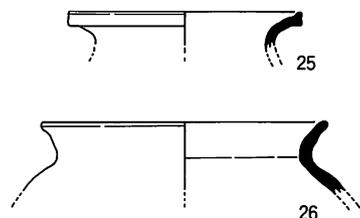
9号住居



11号住居

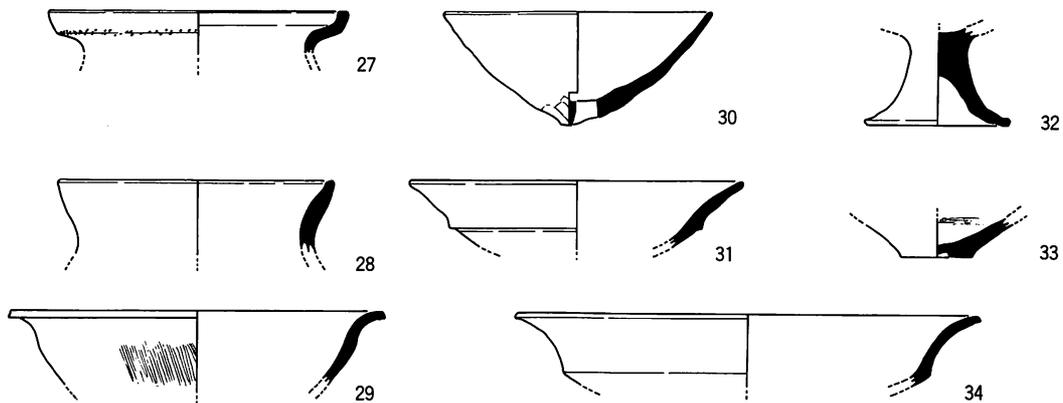


12号住居

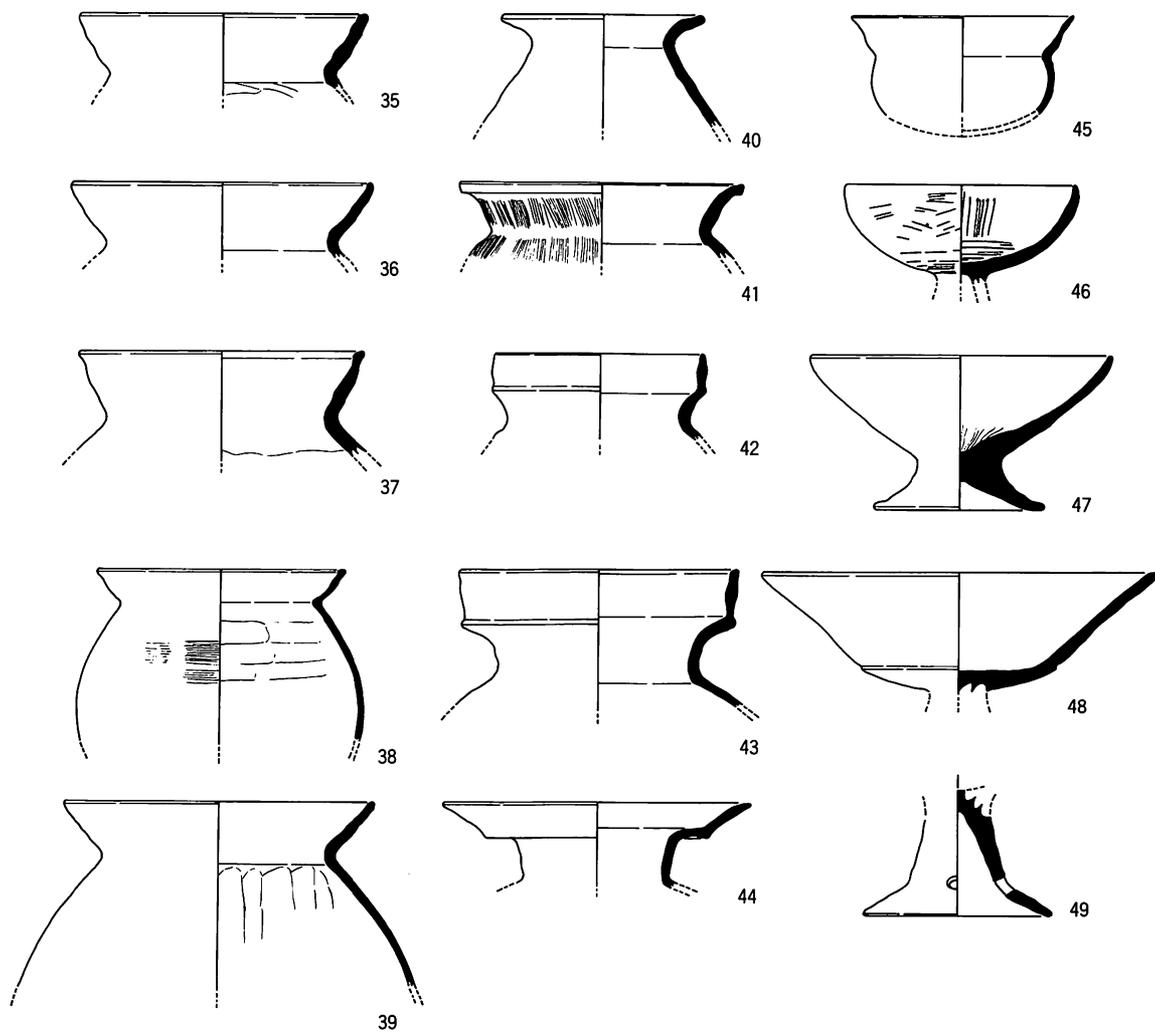


遺物実測図 壺：20・22，甕：5・7~10・13・16・17・21・23~26，鉢：12・14・19，
高杯：2~4・18，器台：1・6・11，小型丸底壺：15

13号住居



溝 1



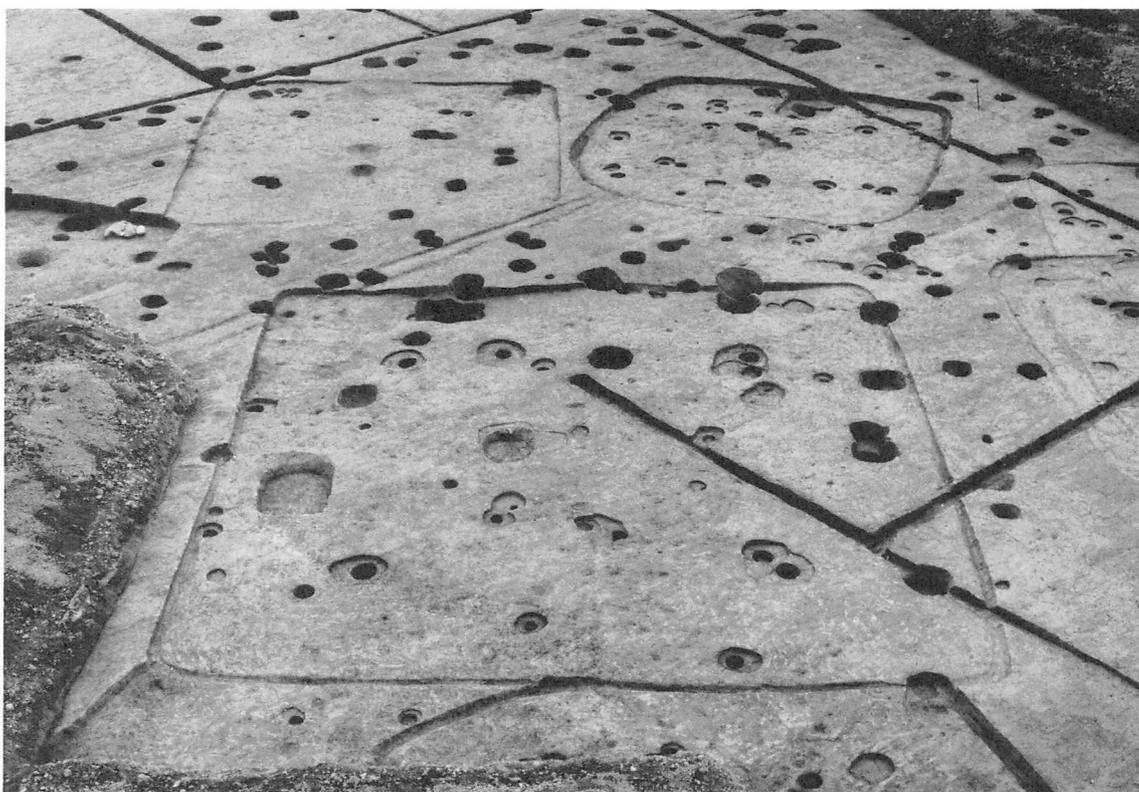
遺物実測図 壺：41~44，甕：27・28・33・35~40，鉢：29，高杯：31・32・34・46~49，
甑：30，小型丸底壺：45



調査区全景（弥生～古墳時代、西から）



1 1号住居 (南西から)



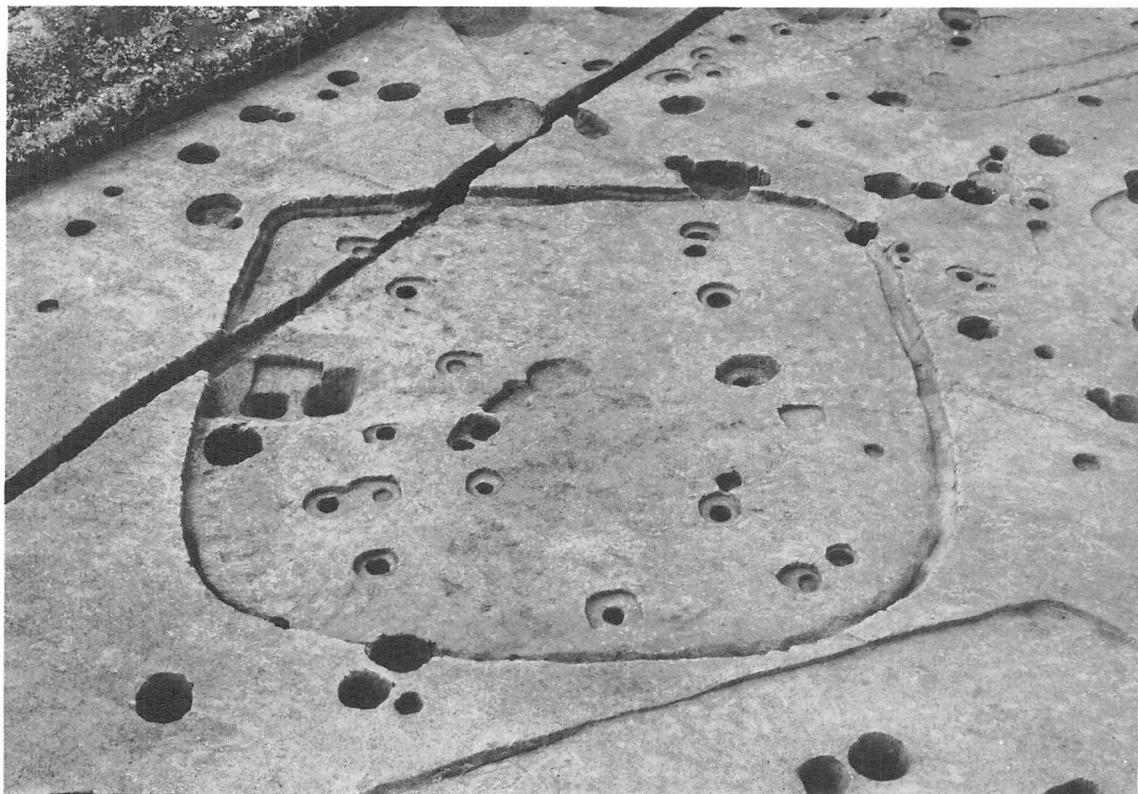
2 3号住居 (北西から)



1 4号住居（北西から）



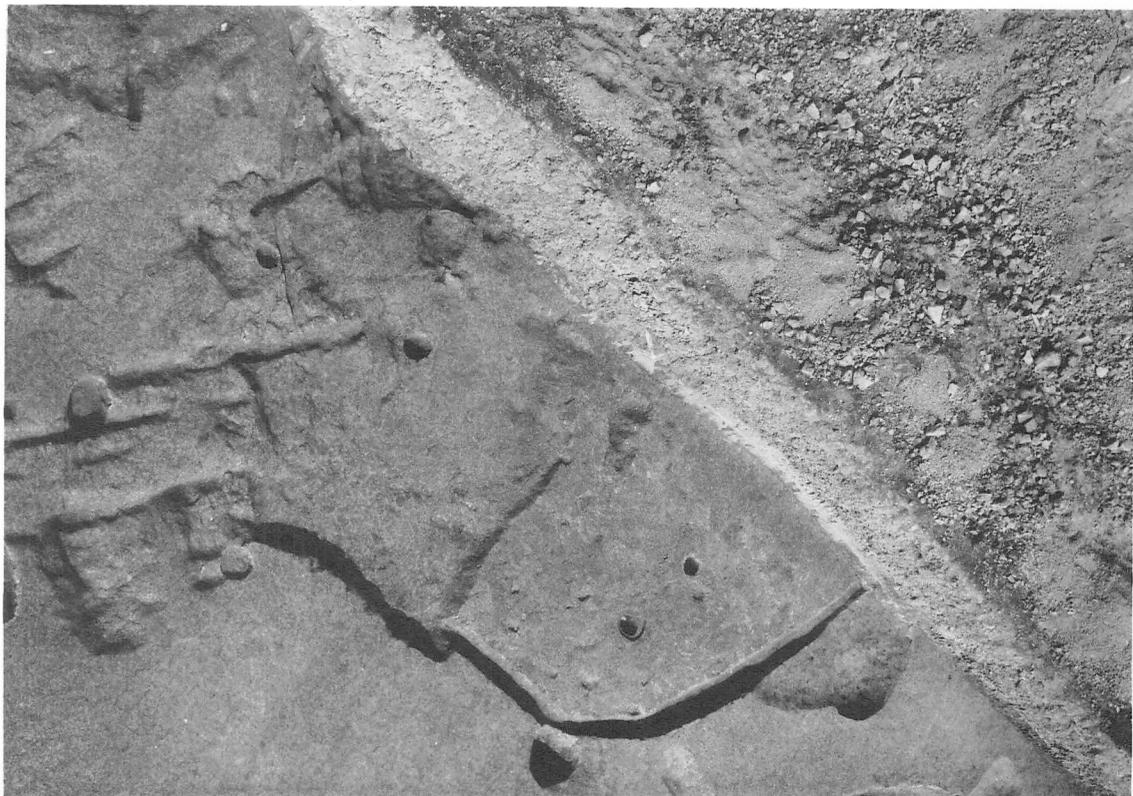
2 5号住居（北東から）



1 6号住居（北東から）



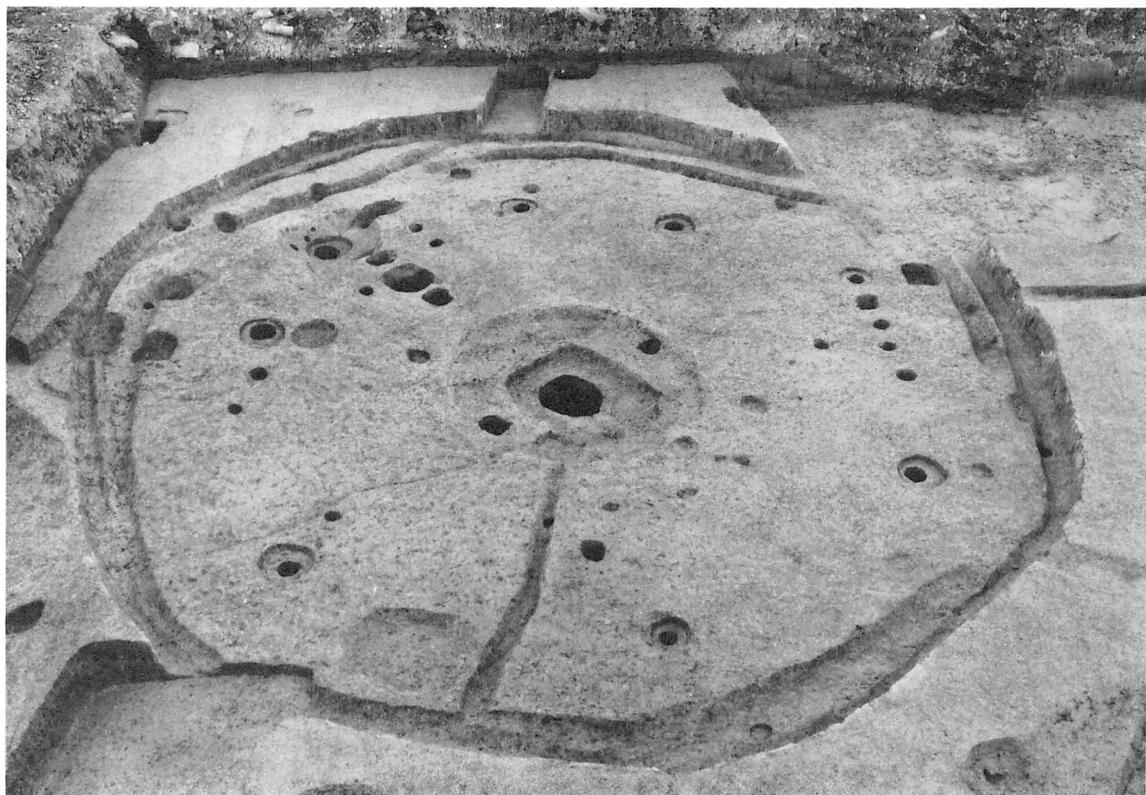
2 8号・9号住居（北西から）



1 12号住居（南東から）



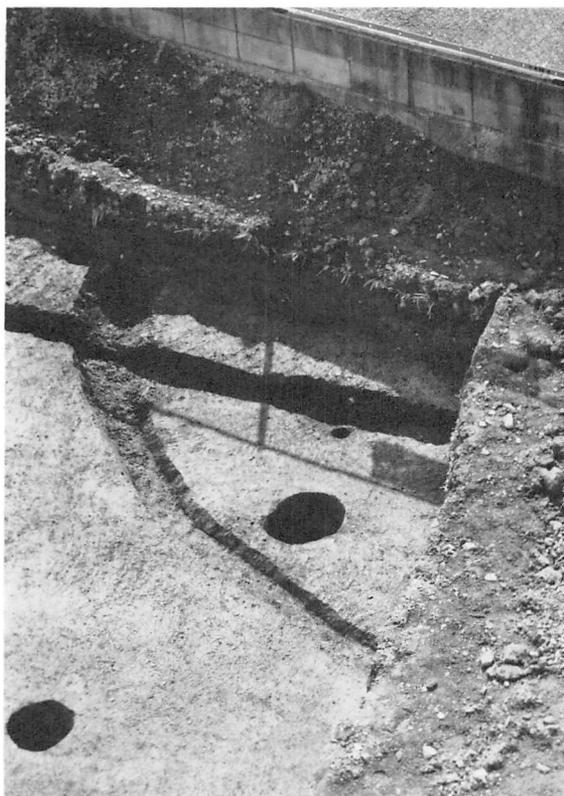
2 溝1（西から）



1 13-A号住居（北から）



2 13-B号住居（西から）



1 7号住居（北西から）



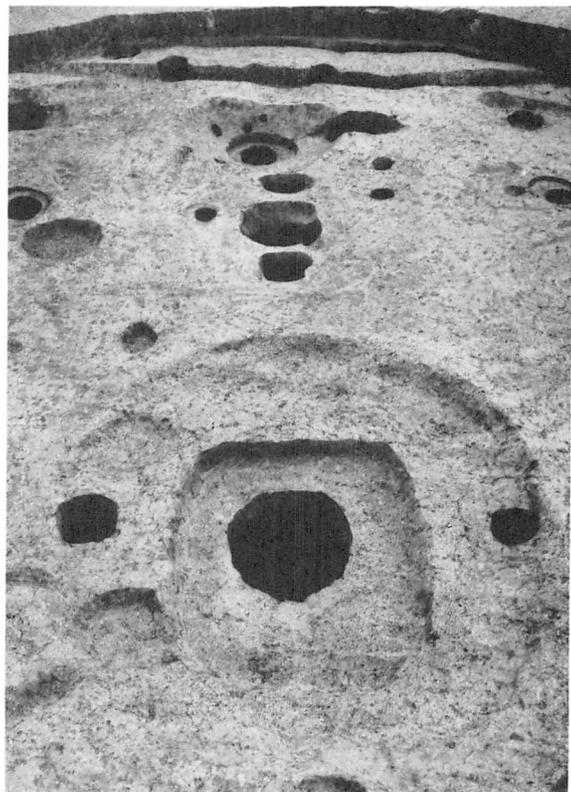
2 4号住居遺物出土状況（北東から）



3 5号住居柱痕（南西から）



4 6号住居貯蔵穴（北西から）



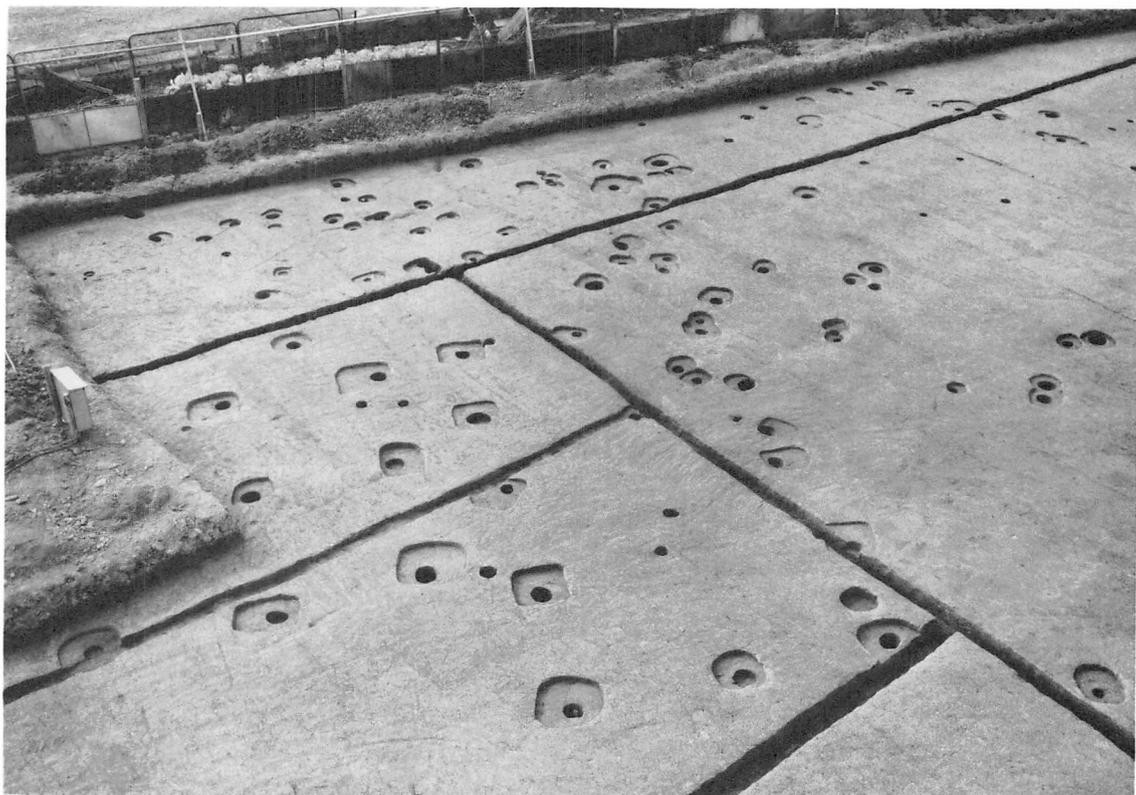
1 13-A号住居特殊遺構（北西から）



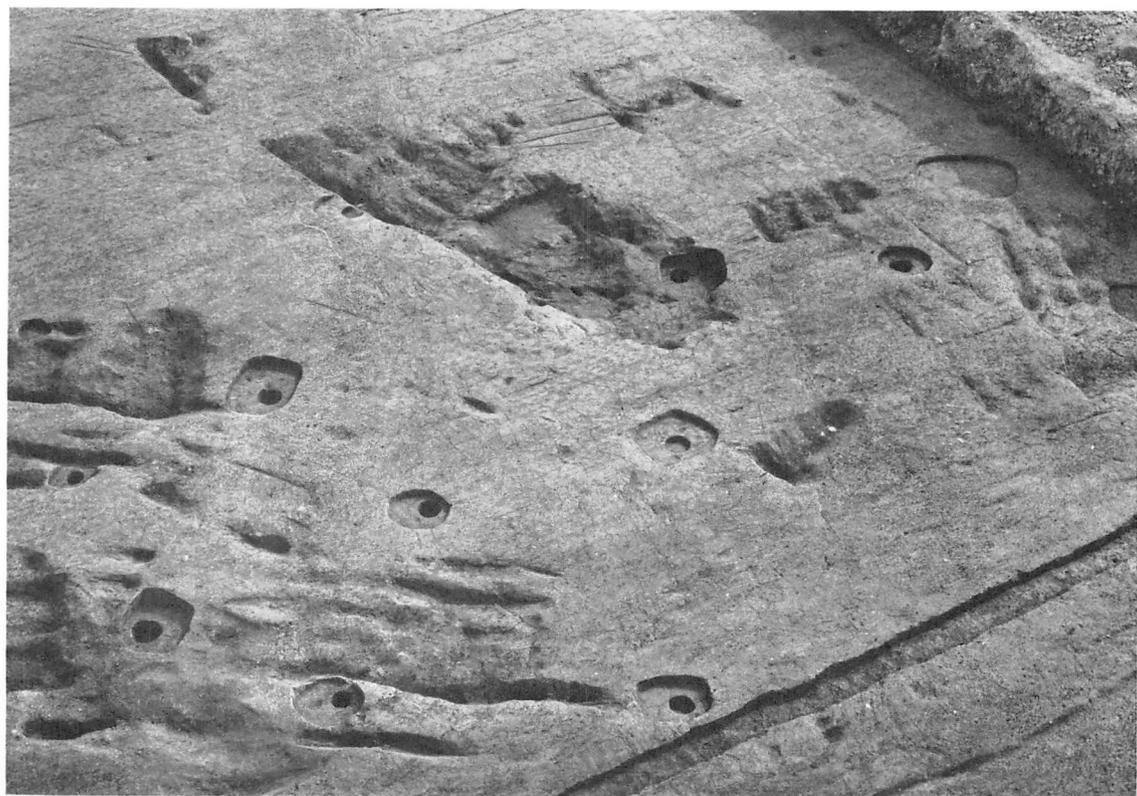
2 13-B号住居特殊遺構（北西から）



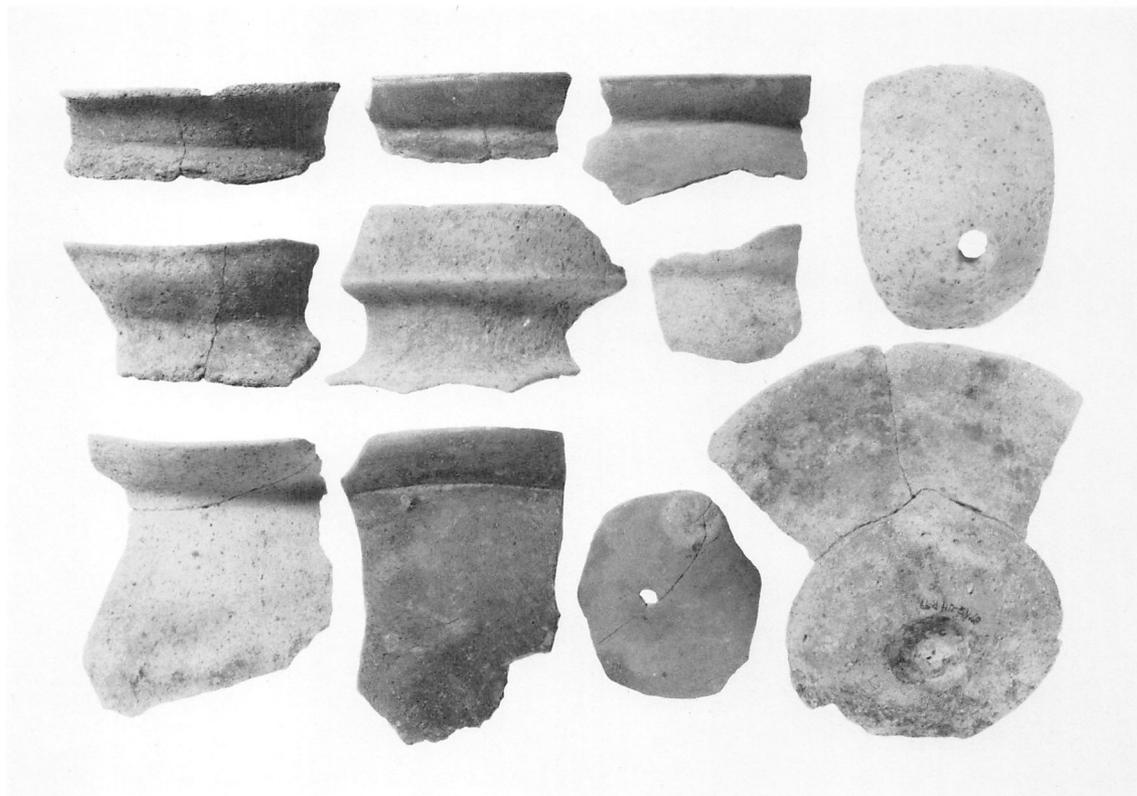
3 調査区全景（飛鳥～奈良・長岡京期、西から）



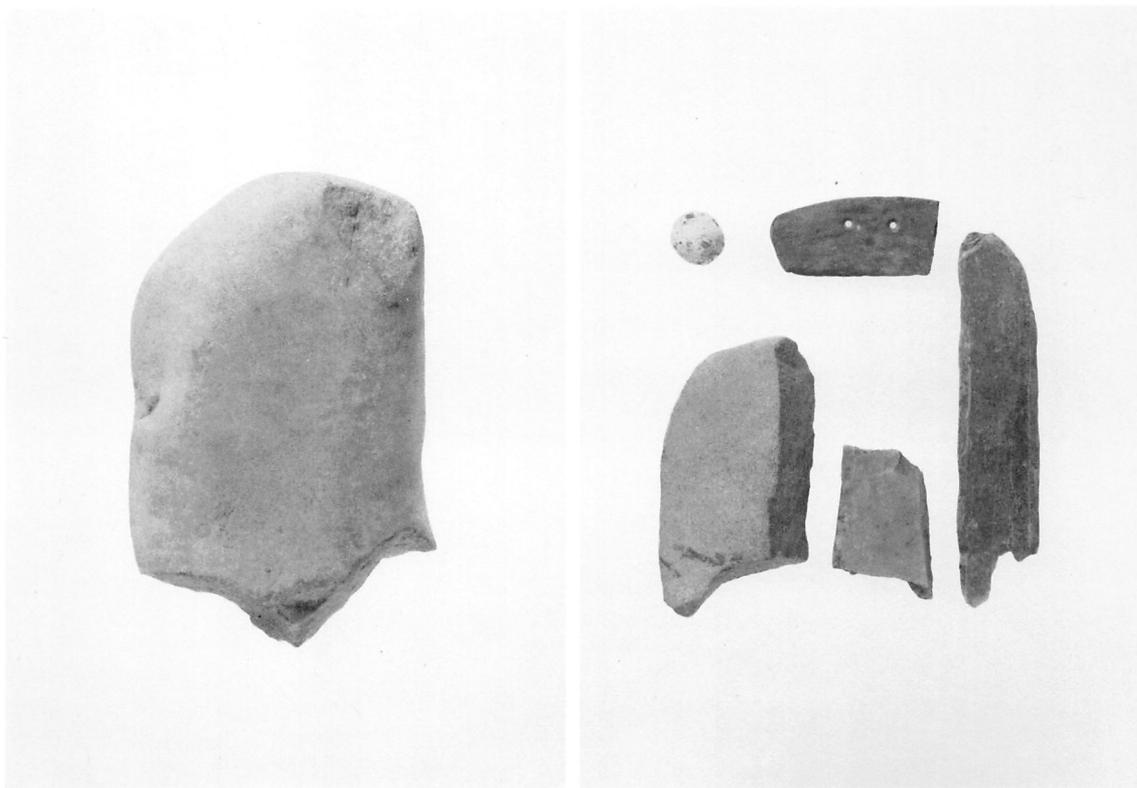
1 建物1・2 (北東から)



2 建物3 (南東から)



1 出土土器



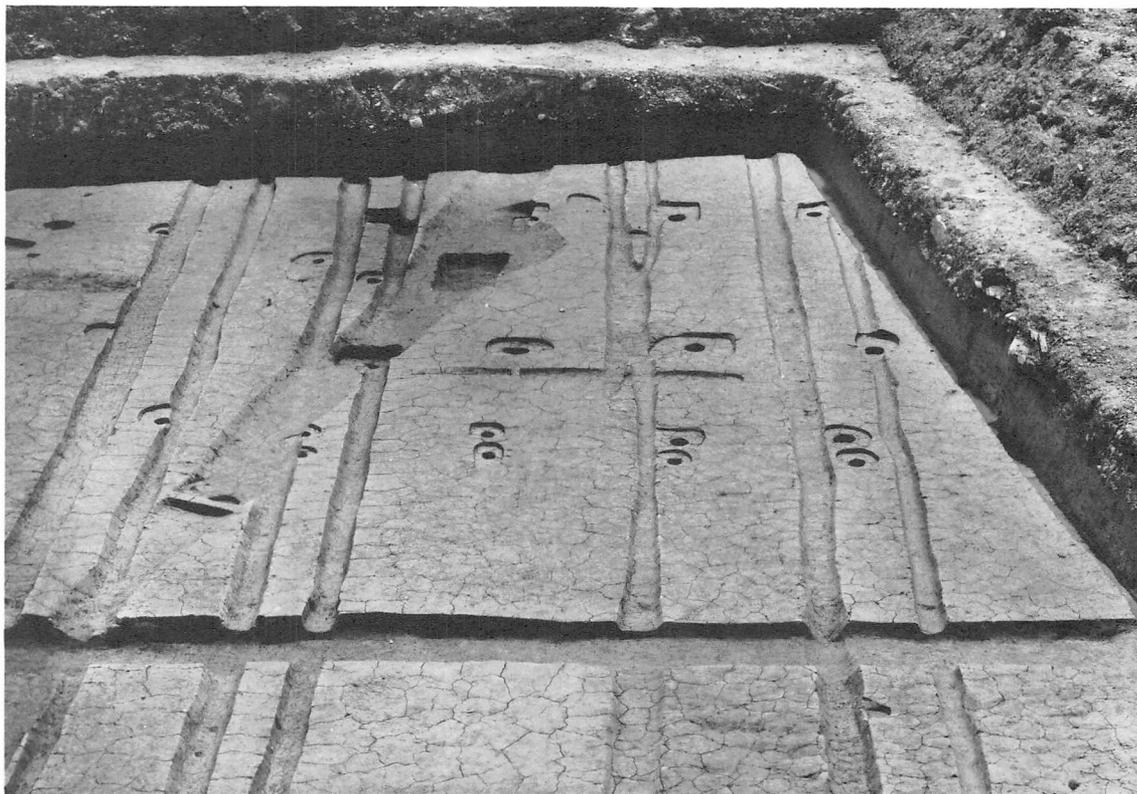
2 出土石器・土製品



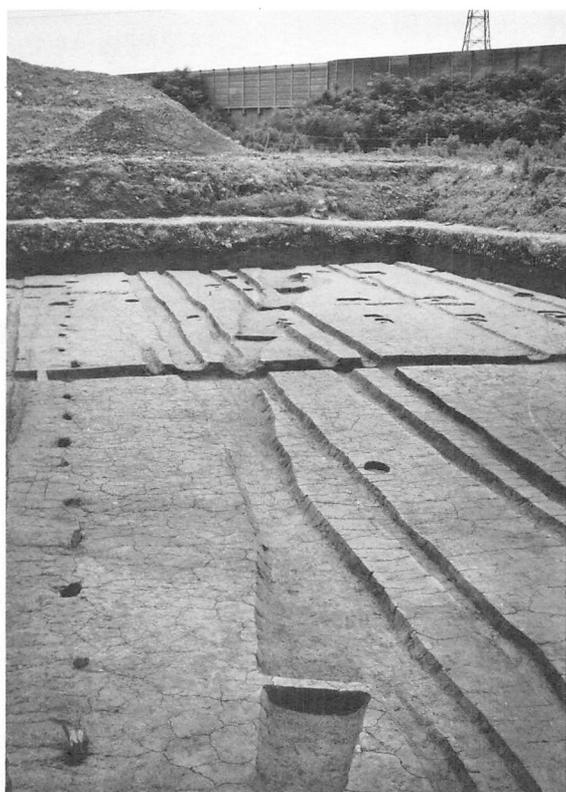
1 調査前全景（北から）



2 調査区全景（北から）



1 建物跡全景 (西から)



2 古墳時代溝跡 (西から)



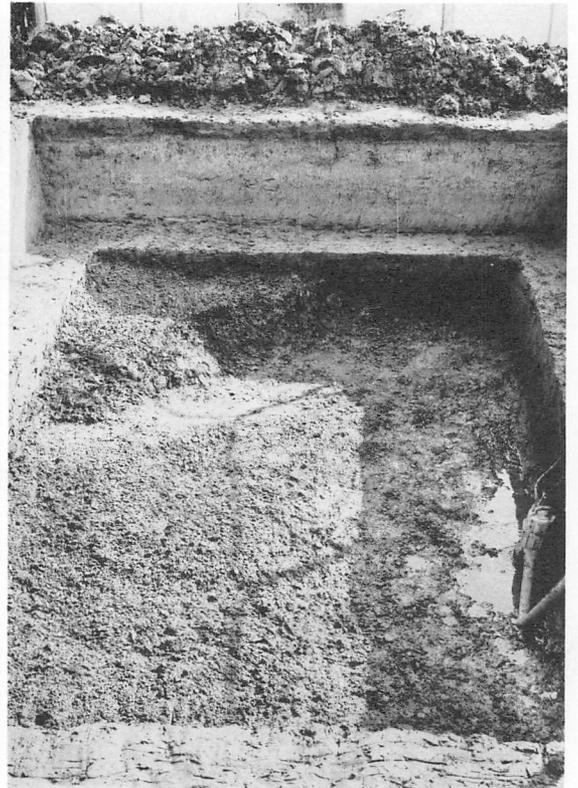
3 方形周溝墓状遺構土器出土状況 (西から)



1 調査前全景（北から）



2 3トレンチ全景（北から）



3 4トレンチ全景（北から）



1 第I期調査区全景（東から）



2 SE1断面状況（東から）



3 SE2断面状況（東から）

長岡京跡 大藪遺跡

発掘調査概報

昭和63年度

発行日 平成元年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町

TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社